ペーター・ゼルク
前進あるのみ

人智学の社会理念に向けた
イタ・ヴェークマンの活動
3つの講義

PETER SELG
I am for going ahead

ITA WEGMAN'S WORK
FOR THE SOCIAL IDEALS OF ANTHROPOSOPHY
Three Lectures



〔目次〕

序文（ミヒャエラ・グレックラー）
はじめに
第１講義 「霊的世界における歓喜」
ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマン
第２講義 「これらの島々を築き上げ、強化することが私の努力である」
イタ・ヴェークマンと治療教育者たち
第３講義 「私は誰の自由も、いかなる方法でも妨げたくはない」
ルドルフ・シュタイナーと医師たち

神秘学遊戯団

■ペーター・ゼルク
『前進あるのみ
人智学の社会理念に向けたイタ・ヴェークマンの活動』
3つの講義
PETER SELG
I am for going ahead
ITA WEGMAN'S WORK
FOR THE SOCIAL IDEALS OF ANTHROPOSOPHY
Three Lectures

〔序文〕
〔はじめに〕

イタ・ヴェークマンは、
人智学のインスピレーション豊かな天才であるだけでなく、
人智学医学的治療の天才でもあります。
忍耐、勇気、そして偉大さが彼女の本質を形作っています。
――エマヌエル・ツァイルマンス・ファン・エミショーベン

●序文

「人智学運動の内部で責任を持って行動することは、決して容易な任務ではありません。」ルドルフ・シュタイナーは、1924年5月3日に行われたエディス・マリオンの追悼演説のなかで、この言葉を語りました。この言葉は、イタ・ヴェークマンにとってもまた真実でした。彼女は、自身が共同設立したゲーテアヌムの医学セクションの責任者を11年以上にわたって務めました。それは1923年のクリスマスから、人智学協会の総会における多数決により、彼女が最初の精神的指導部（理事会）から除名された1935年の復活祭までの期間です。

特徴的なことに、ヴェークマンは協会から除名された後も、人智学医学運動の発展に向けた活動を協会の枠外で継続することに、一瞬たりとも躊躇しませんでした。

彼女には勇気があり、真実に対する無条件の愛、そして人間的なあらゆるもの、人間を動かし得るあらゆるものに対する大きな心がありました。また、彼女は許すこともできました。それは「除名」の後に彼女が手帳に記した次の言葉からも分かります。「私は、大衆による決定というものを、全般的に疑わしいものだと考えている。したがって、私が取り乱したり自己弁護をしたりしたところで、何の役にも立たないのだ」。

1935年9月27日、人智学の医師たちが年次の秋季会議のためにアルレスハイムにある彼女の診療所に集まった際、彼女はこう語りました。「精神的なゲーテアヌムには、すべての人々のための場所があります。私が自分の立場を明確にすることは必要なことです。なぜなら、すべての不愉快な出来事や困難――私はこれらを大いなる誤解と捉えており、いつの日かそれが解消され、私たちが再び愛と平和のうちに共に働けるようになることを願っていますが――それらの後に迎える、私たちの最初のミーティングなのですから」。彼女は一連の出来事を「誤解」と捉え、「不愉快な出来事」と表現しました。この致命的な一撃に対しては、深いカルマ的洞察から湧き上がる魂の力に頼ることでしか立ち向かえないことを、彼女はよく分かっていたのです。彼女はまた、自らの悲劇的な運命における自分自身の役割は、それが伴う痛みを意識的に耐え忍ぶ（苦難を甘受する）ことによってのみ解決される、という考えも受け入れていました。

今日、彼女は、個人や社会的グループのための「治癒の力」を発展させようと模索している人々にとっての模範となっています。それは特に、周囲からの無理解、中傷、拒絶、あるいは公然たる敵意に直面しているような状況において顕著です。そしてとりわけ、単に思考され説教されただけのものではなく、「実際に生きられた道徳的価値」を求める若い人々にとって、イタ・ヴェークマンとの精神的な出会いは、そのような力を呼び起こし、彼らの意志を強めることができます。さもなければ、人間が耐え忍ばねばならないあらゆる苦難を前にして、無理解と諦念が魂の麻痺を引き起こしてしまうかもしれないからです。

イタ・ヴェークマンは常に、人類を待ち受ける大いなる課題と発展に向けて、期待と希望に満ちて未来を見つめていました。同時に彼女は、人間の内面、そして人間同士の間に生じる亀裂をはっきりと感知していました。人間性の多様な危機や、悪魔的とも言える歪みが潜んでいる可能性を前にしても、彼女はたじろぐことなく、むしろ人間に本来備わっている治癒と変容の力を呼び起こすよう、突き動かされたのです。

新しい千年紀（ミレニアム）における、人智学医学運動の第1回年次会議において、イタ・ヴェークマンのイメージと存在が、これほどまでに強く、そして深くここに存在したことは極めて重要なことだと私は感じました。ペーター・ゼルクは、非常に個人的でありながら同時に普遍的でもある手法によって、それを可能にしてくれました。このことに対して、また、関心を持つすべての人が読めるようにと、講義の原稿を出版用に調整することを快諾してくれたことに対して、医学セクションのスタッフを代表して、彼に心からの感謝を捧げたいと思います。

ミヒャエラ・グレックラー
ゲーテアヌム医学セクションにて
2002年3月1日

●はじめに

「人々がこの必要性に気づき、それを完全に受け入れる準備ができるまで、私たちはただ辛抱強く待たねばならないのかもしれません。私の意志であるかのように見えることを成し遂げるなどということは論外です。なぜなら、それは私の意志ではないからです。」
（イタ・ヴェークマン）

2001年9月16日から18日にかけて、私はゲーテアヌムの大ホールで「ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマン――人智学医学の精神的基盤と医学セクションの歴史」と題した3つの講義を行いました。それは特別な日々であり、特別な時間でした。ニューヨークとワシントンでの凄惨な破壊（同時多発テロ事件）からわずか5日後という時期に、世界中の遥か遠方から何百人ものセラピストや医師たちが集まっていたのです。この不穏な出来事を前にして、非常に多くの人々が、人智学医学の未来について思考を共有し、その未来に向けて共に働くために、深く心を動かされていました。

また、その時は別の意味でも特別な瞬間でした。イタ・ヴェークマンが、今日でさえ当惑と不信、そして恐怖を呼び起こすほどに、到底維持できない卑劣な非難や申し立て,告発によって、ゲーテアヌムの大ホールから排除され、追い出されてから、ちょうど「33年の2倍（66年）」の歳月が流れていたからです。この協会側の措置は、シュタイナーが人智学者たちに最も重要かつ緊急のこととして期待していたこと――すなわち「運命（カルマ）を理解することを学び、精神的な必要性からお互いを認識し、支え合うこと」――とは、まさに正反対のものでした。この意味において、イタ・ヴェークマンを排除し、彼女が体現していた力を麻痺させたことは、単に人智学協会の内部だけの問題ではありません。イタ・ヴェークマンに対する長年の攻撃は、衰退しつつある西洋文化における、中心的とも言える重要な発展プロセスを損なう破壊へと至ったのです。ヴェークマンが直面したあらゆる抵抗にもかかわらず、1939年までに彼女が医療および社会の発展において世界にもたらした成果（ファシズムの時代において、治療教育センターだけでも22箇所に及びます！）に目を向けるとき、私たちは歴史の表面下で働いている強力な出来事を感じ取ることができます。そして、人

間への闘い、人間のイメージ・価値・尊厳のための闘い、ひいては医療と治療教育のための闘いは、今やかつてないほど激しく、そして公然と続けられているのです。

9月11日の暗く不吉な世界情勢のただ中にあったにもかかわらず、イタ・ヴェークマンの「除名」から66年が経ったこの時、9月16日から18日にかけて――この期間は「キリスト者共同体」の最初のミサ（人間聖化の儀式）が行われた日であり、ルドルフ・シュタイナーが医師たちに最後の演説を行った日でもあります――ゲーテアヌムで3つの晩を過ごし、彼女の精神的・歴史的意義について語ることができたのです。それは、イタ・ヴェークマンに結びついており、今なお結びついている、そしてルドルフ・シュタイナーという個性と深くつながっている、光に満ちた輝かしい力について語る時間でした。

これらの夜を通じて、イタ・ヴェークマンの生涯と活動、そして彼女の活動の「言語」が蘇りました。それから何十年も経った今日、このようなことが示され得るというのは奇跡のようであり、そこには精神的な謎が秘められています。しかしそれは、イタ・ヴェークマンの秘学的な遺品の中に多くのものが保管されていたからに他なりません。シュタイナーが彼女のために書いた詩や彼女への手紙、そしてイタ・ヴェークマンが医師、治療教育者、同僚、友人、患者たちと交わした、数百、いや数千通もの手紙が残されているのです。ヴェークマンは手紙のほとんどを口述筆記させていましたが、それらのなかに私たちは彼女の本質的な存在を体験することができます。それらは率直でストレートであり、非常に個人的ですが、決して「私的な」次元には留まりません。そこから私たちは、彼女の内なる存在と結びついていた、そして今も結びついているロゴスの力の痕跡を宿した、生き続ける偉大な声を聴くのです。私はこれらの手紙を読み、引用しました。講義の夜は、それらの言葉から展開していったのです。この方法は、いわゆる「客観的な歴史記述」が好む手法ではないかもしれませんが、私たちをイタ・ヴェークマンのところへと直接連れて行ってくれます。そしてここにこそ、この講義の永続的な価値と精神的な尊厳があるのです。

講義を聴き、手紙や詩が読み上げられるのを（同時に6言語への通訳で）聞いていた多くの人々から、その後、講義を思い起こし、読み、学ぶことで体験を深めることができるように、印刷された形で出版してほしいという要望が寄せられました。あの夜の時間は、語られる言葉、話し言葉を通じて生きていました。それは、そこに強い関心を持って出席していた人々、歴史的な状況、そしてその会場が持つ精神性によって生かされていたのです。書き残されたものはすべて、それに比べれば色褪せ、取るに足らない弱いものになってしまいます。それにもかかわらず、これらの講義を行うことができたという事実に今なお魅了され、感謝しつつ、私は書き下ろしの要望に喜んで応じることにいたしました。

イタ・ヴェークマンに関する数十年にわたる研究によって、すべての可能性を開いてくださったキリスト者共同体の司祭、エマヌエル・ツァイルマンス・ファン・エミショーベン氏に感謝いたします。彼は、私を彼の研究の多くの側面に参画させてくれました。また、イタ・ヴェークマンに捧げるこの3つの講義を発案してくださったミヒャエラ・グレックラー氏、そして2001年9月のこの会議のためにゲーテアヌムに集まってくださったすべての医師、看護師、セラピストの皆様に感謝いたします。

ペーター・ゼルク
ドルナッハ／アルレスハイムにて
2001年 ミカエル祭

〔第1講義〕

「霊界における歓喜」
ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマン
"Jubilation in the spiritual world"
Rudolf Steiner and Ita Wegman

●基本的な視点

ペーター・ゼルクのこの講義は、
人智学医学の「歴史」を単に時系列で語るものではなく、
運命（カルマ）の領域に焦点を当て、
特に、ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマンの関係を、
個人の内なる決断・内省的発展・霊的な近さの深化として
描き出している。

中心テーマは
「霊界における歓喜」という言葉に象徴される、
二人の間の太古からのカルマ的結びつきが、
地上でどのように顕現し、共同作業として実を結んでいったか、という点である。

歴史的事実の列挙ではなく、「足跡」を厳粛に追いながら、
個人の自由な意志と内なる存在からの決断が、
人智学運動の本質的な推進力となることが示されている。

●要点

・個人の内なる決断の重要性

シュタイナーは外部から命令せず、
ヴェークマン自身が「内なる存在」から行動することを求めた。
彼女がスイス（アルレスハイム）で
独自のクリニックを立ち上げようとした意志が、後の共同作業の基盤となった。

・長い準備期間と劇的な転換

1906年の医学生時代の葛藤
（科学に縛られ、つながりを見出せない状態）から、
1907年ミュンヘン大会での決定的出会い、
1922年末のゲーテアヌム火災を経て、
1923年夏のウェールズ・ペンマエンマウルでの会話に至るまで、
約20年の内省的プロセスがあった。
火災後の「支えとなる理解」が、彼女をシュタイナーの最も近い協力者へと変えた。

・「治療者の勇気」と秘儀的医学への志向

シュタイナーはウェールズでヴェークマンを
「治療への勇気」を持つ人物として公に評価した。
彼女の非知性的な「神秘の再興」への願いが、

知性偏重の医学講義に対する問いとなり、
二人のより深い共同作業を可能にした。

・運命の濃密な展開（1923年夏〜クリスマス会議）

ペンマエンマウルでのカルマの顕現、
障害を持つ子ども（サロンド）との出会い、
9歳の少年ポールの死、医学書の共同執筆開始、
クリスマス会議での医学局責任者任命
——これらが短期間に連鎖し、
彼女の内面的変容と役割の確立を促した。

・シュタイナーの側からの深い信頼と依存

晩年、シュタイナーはヴェークマンを
「外部からの邪魔」を避けて共に基盤を築く相手として位置づけ、
彼女に高度な秘修を与え続けた。
二人の関係は専門的協力を超え、
魂の次元での支え合いへと深まった。

・遺産としての継続

シュタイナーの死後も、
ヴェークマンは彼との永続的な結びつきを自覚しつつ、
医学局の責任者として活動を継続した。
講義全体を通じて、人智学運動の本質は
「個人の運命的決断と霊的な近さ」にあることが強調されている。

●本文

ペンマエンマウルのカルマ
完全に顕現した
魂の要素
私の側の理解
「霊界における歓喜」と
彼は言った。
（イタ・ヴェークマン、手帳の記述より）

〔訳註：Penmaenmawr＝ペンマエンマウル（地名：ウェールズ）。1923年のウェールズ・ペンマエンマウルでのルドルフ・シュタイナーとの会話を、後年イタ・ウェグマンが記したものとされている〕

※写真：
1925年3月21日、病床のルドルフ・シュタイナーの書斎にて、イタ・ヴェークマン。

親愛なる友人の皆さん、
本日とこれから2日間の夜にわたる3回の講義において、私は人智学医学の歴史を説明するのではなく、むしろ人智学医学の分野で精力的に活動した人々、特にイタ・ヴェークマン博士に焦点を当てて考察したいと考えています。

ですから、歴史的な出来事に焦点を当てるのではなく、私たち全員に関係している「運命の領域」に一歩近づくようなお話をしていきたいと思います。

ここにいらっしゃる皆さんの多くは、この領域に関連するルドルフ・シュタイナーの身辺で起きた出来事について、よくご存知のことでしょう。今夜、私がその名を借り、またその支援を受けて皆さんにお話ししているエマヌエル・ツァイルマンス・ファン・エミショーベン（Emanuel Zeylmans van Emmichoven）の著作は、それらの出来事を私たちにとってより身近なものにするのに役立ってきました。したがって、私がこれからお話しすることの多くは、皆さんにとって決して新しいことではないでしょう。

〔訳註：エマヌエル・ツァイルマンス・ファン・エミショーベン：1926年ハーグ生まれのオランダの人智学者・編集者・出版者・キリスト教共同体の司祭〕

しかし、私は私たちがルドルフ・シュタイナーの伝記や、彼の活動を取り巻く展開について、今後も省察し続けるべきだと信じています。もし私たちがそれらに改めて没頭するならば――それは、私たちが西洋世界において福音書に記述された出来事に対して慣れ親しんでいるのと同じ方法で、これらの出来事について瞑想し続けるならば――常に新しい深みが開かれていくことでしょう。私たちは、これらの歴史的な年月から私たちを隔てている時間が、ほんのわずかな期間にすぎないという事実に気づかねばなりません。その時代のすぐ近くに生きることを許されているのは一つの「恵み」ですが、同時にそれは大きな課題と責任をもたらすものでもあります。私たちは、ルドルフ・シュタイナーのあらゆる言葉やあらゆるノートを神聖な誠実さをもって扱うよう努めなければなりません。それらの出来事が残した足跡を強烈に追いかけ、同時に、それらはあくまで「足跡」であり、実際の出来事そのものではないということを心に留めておく必要があります。私たちがこのように実践しなければならないのは、それらを失い、忘れてしまう危険性が非常に大きく、ルドルフ・シュタイナーの著作や講義の広範な出版や、膨大な数の伝記的貢献があるにもかかわらず、その忘却が急速に現実のものとなりつつあるからです。

今日、明日、そして明後日にわたり、私たちは20世紀における医師イタ・ヴェークマンの仕事について省察します。彼女の仕事は、特別で極めて深い意味において、確かに1923年の夏以降、ルドルフ・シュタイナーとの継続的で途切れることのない共同作業であり続けました。私たちの省察はまた、精神科学（霊科学）によって拡張されたこの医学の始まりの時期に、政治的、社会的、経済的、そして個人的に、いかに計り知れないほど困難な状況が取り巻いていたかを思い起こさせることになるでしょう。

あらゆる状況を考慮すると、それ以来、事態ははるかに容易になったという結論に飛びついてしまうかもしれません。なにしろ9年前、ドイツ連邦のプログラム『健康のための研究と開発』の一連の発表の中で、ドイツだけでも1,200床の病床を持つ9つの人智学指向の病院、6,000の人智学医師の診療所などがあることが公表されたのですから。その一方で、1924年の復活祭に、ルドルフ・シュタイナーは若い医学生や医師たちに向けてこう語っていました。「再び集まるときには、アーリマン的勢力が彼らの目標を追求するために、人間のカルマを排除しようと全力を尽くしている様子をお話ししましょう」。予定されていたその集まりが実現することはありませんでしたが、ルドルフ・シュタイナーが当時念頭に置いていた、運命を破壊するような出来事は実際に起こってしまいました。

今日、生命はその始まりと終わりの段階で操作されています。これは「生命倫理」や「安楽死」と呼ばれています。生命の始まりと終わりの間には、ますます形式化された治療プログラムが存在し、統計的にすべての人が同じように扱われることを目指しています。そこでは、定義された病気に対して、定義された範囲の医薬品と定義された日数の病欠が割り当てられています。しかし、個人の判断や決定、そして責任のための余地はほとんど残されていません。私たちはまさに、運命の領域の排除を経験しているのです！さらに、私たちは損なわれた農業や、BSE（狂牛病）や口蹄疫、そしてそれらの根底にあるあらゆる問題によって、絶えず拷問され苦しんでいる動物界に直面しています。ルドルフ・シュタイナーは人智学医学と治療教育をイタ・ヴェークマンに託し、彼女には農業セクションの面倒も見てほしいと望んでいました。

私たちが置かれている歴史的状況は破滅的です。ドイツ政府が発表した印象的な数字にもかかわらず、世界の中で精力的に活動している、広範でエネルギッシュな人智学運動というものは本当の意味では存在していません。そこには、互いをサポートし、霊的な洞察をもって人間の生命と進化を高めるために全力を尽くす人間たちの姿が見当たらないのです。特に、非常に象徴的に思えるアメリカでの出来事を経た今、私たちは自らの文化全体の状況と、自分たちの無力さに目覚めるべきです。そして、文明の継続と地球の未来を確かなものにするために、私たちが持てるすべての力をもって協力し合う努力をしなければならないという事実にも、目覚めるべきなのです。ルドルフ・シュタイナーの死から数週間後、イタ・ヴェークマンは次のように書き残しています。

「晩年、ルドルフ・シュタイナーはしばしば警告を込めて、地球上にそれを阻止する十分な霊的（精神的）な力が存在しなければ、いつでも噴火する可能性のある火山の上に私たちは立っているのだ、と語っていた」。

私たちが共に過ごすこの最初の晩、9月16日――

――この日付は、キリスト者共同体における最初の「人間の得度式（ミサ）」が執り行われた日でもあります。私たちは、イタ・ヴェークマンがルドルフ・シュタイナーへと至る道に思いを馳せ、焦点を当てようではありませんか。その道、そして二人の共同作業は、イタ・ヴェークマンが自らその道を歩むことを決意したからこそ、初めて可能となったのです。キリスト者共同体のこの特別な記念日に、そして2001年という年に、私たちがそのことについて省察を始めることができるのは、真の贈り物であり、偉大なる真理を内包しています。イタ・ヴェークマンがただ一人で歩んだ、この個性的でまったく独自の道の足跡は、書簡や手帳、そして詩の中に今も見出すことができます

「親愛なるシュタイナー博士、私は毎日あなたにお手紙を書きたいと思っておりましたが、自分の言いたいことを言葉にすることが難しく感じておりました。
まず何よりも、あなたから受けとった書留について感謝申し上げます。［神秘学校の］書類には、もし魂や肉体のバランスが崩れていると感じたなら、あなたに手紙を書くべきだと記されていました。
最近の私はまさに後者の肉体のバランスを崩した状態にあり、ここ数日は病気のためにベッドから起き上がれずにいました。しばらく病気などしたことがなかった私にとって、これは珍しいことです。ある医師は私に再び肉を食べるよう勧めましたが、私はそうしないと決めています。ベジタリアンの食生活は私にとてもよく合っていますし、それがこの肉体的な不調の原因であるはずがないからです。
私は内面で引き裂かれているように感じており、そのためにしばしば気が滅入ってしまいます。あまりにも多くのことが不鮮明で、思考する能力がとても小さくなってしまっているのです。科学（学問）が私を縛りつけます。私は一貫性（繋がり）を求めているのに、それを見出すことができません。
しばらく前から、私は遺体の解剖実習を始めました。この作業はとても不快に感じられます。いたるところに遺体があるあの実習室にいると、心が落ち着きません。最初よりは随分ましになりましたが……。
これで、私の今の状態がお分かりいただけたかと思います。呼吸のエクササイズも、瞑想も、私なりに全力を尽くして実践しております。（……）」

〔手紙文〕（画像）

「私には、いつも私を憂鬱にさせる内面的な葛藤があります。多くのことがよく分からず、思考力もそのような状態です。周囲の社会が私に影響を与えています。私はつながりを探していますが、決して見つけることができません。少し前から、これらの「記号（あるいは絵や印）」を描くようになりました。この作業は私にとってとてつもないものです。私はこの記号から抜け出すのが一番心地よく感じます。ですが、今は最初の一歩として、すでに以前よりは良くなっています。ですから、私が今どのような状況にあるか、あなたにはお分かりいただけるかと思います。」

イタ・ヴェークマンによって書かれたこの手紙は、彼女がチューリッヒの医学生であった1906年のものです。そこには自己不信、不安、そして落ち着きのなさが語られています。「私は内面で引き裂かれているように感じており、そのためにしばしば気が滅入ってしまいます。あまりにも多くのことが不鮮明で、思考する能力がとても小さくなってしまっているのです！科学が私を縛りつけます。私は繋がりを求めているのに、それを見出すことができません」。

インドネシアのジャワ島に生まれたイタ・ヴェークマンは、当時30歳で、すでに理学療法士としてのキャリアを持っていました。彼女はすでに多くのことを見て、成し遂げていましたが、それでも医学部に入学したときには、完全にゼロからのスタートだったのです。彼女にとってこれらの学問は困難なものでした。「私は繋がりを求めているのに、それを見出すことができません」。

ルドルフ・シュタイナーは、アカデミックで科学的な研究が彼女の得意分野ではないと分かっていたはずであるにもかかわらず、彼女にこの新しい一歩を踏み出すようアドバイスしました――おそらく彼は、彼女がどのような状態にあるかを常に知っていたのでしょう。彼女は最初から、彼にとって不可欠な存在だったのです。

ルドルフ・シュタイナーは、その手紙のすぐ後、1907年の聖霊降臨祭にミュンヘンで開催された神智学協会の大会でイタ・ヴェークマンと会いました。この大会の最中に、ルドルフ・シュタイナーの神秘的な（エソテリックな）追随者たちと、アニー・ベサント（当時の神智学協会会長）の追随者たちは、それぞれの道を歩むことを決定したのです。

「そのすぐ後、彼から呼び出しがかかりました。私は自分の人生に決定的な瞬間が訪れたことを知っていました。ルドルフ・シュタイナーの道を完全に、そして全面的に選択して彼に従うか、それともオランダの友人たちのもとに留まるか、決断しなければならなかったのです。彼は厳粛な面持ちで、その目に一つの問いを浮かべて私を迎えました。私たちは多くを語り合いませんでしたが、お互いを実によく理解していました。彼がすべての事情を知っていると肌で感じた私は、ただこう言いました。「私はあなたと共に留まります」。すると彼の目は輝き、私の手を取り、ミカエルのサイン（印）を授け、私に重要なことを語ってくれました。それについてここで繰り返すことは許されていません。彼と私の間に存在していた太古のカルマが、新しく蘇ったのです。私がこの出会いの持つ重要性に本当に気づいたのは、それから何年も経ってからのことでした。」

ミュンヘン大会から17年後の1924年6月、イタ・ヴェークマンはシュタイナーから一通の長い手紙を受け取りました。その中でシュタイナーは、より広大なカルマの背景に照らして、この出会いを解き明かしていました。彼は次のように書いています。

「あなたはかつて、活動的な人生を送るためにギリシャで私のもとを去っていきました。それより以前、私たちは偉大で重要な衝動を、私たちの意識へと展開させていました。あなたはあなたなりの方法で、それらの実現へとアプローチしていったのです。（……）あの当時、あなたが私のもとを去ったとき、多くのものが私から奪われました。あなたを通じて私の傍らにあった『若さ』が、私から奪われたのです。私は、あの時ほど老いさらばえた転生を他に知りません。『彼と共に、私の心はポントス（黒海）を渡った』。……太古の昔にあなたが私を去ったとき、私は老い込んでしまいました。あなたが言及しているミュンヘン大会のときにも、これとまったく同じ強さで、その老いが私を襲ったのです。それは外側からは分かりませんでした。私は熱心に活動しているように見えました。多くの観察者には、おそらく勤勉にさえ映ったことでしょう。なぜなら、私は常に霊界へと身を捧げており、霊界は疲労が外側へと浸透するのを許さないからです。しかし、霊的・人智学的な潮流以外のあらゆるものに対する疲労が存在していました。この疲労は、あなたが私から去った後に私が老い込んだことの、カルマ的な反映だったのです。そして今、あなたは公会堂のなかにいました。しかし、アジアとヨーロッパを隔てる境界線は、依然として私たちの間でカルマ的に反映されていたのです」

ミュンヘンでのイタ・ヴェークマンは、カルマ的な洞察（過去生の記憶）に基づいて行動したわけではありませんでした。「彼がこれらの事情を知っていると肌で感じた私は、ただこう言いました。私はあなたと共に留まります」。当時、彼女が感じていたのはルドルフ・シュタイナーへの親近感、ただそれだけでした。彼女が運命の完全な現実に目覚めるには、何年もの歳月、実際には20年もの時間を必要としました。それは劇的な体験に満ちた、内省的な発展の長いプロセスだったのです。私たちは、ルドルフ・シュタイナーの身辺で起きたこれらの重要な魂の出来事を、非常に厳粛に受け止めなければなりません。なぜなら、これらの出来事の中にこそ、人智学運動の歴史が存在するからです。ルドルフ・シュタイナーは、多くの人々がこのようにカルマ的に目覚めるのを何年も待ち続けましたが、その多くは無駄に終わりました。

講義の後や、シュタイナーとの強烈な出会いを通じて、彼の周囲にいた多くの個人が、自らの起源や将来の課題についての予感やイメージを経験しました。しかしそれらのほとんどは、自らの存在の深淵から瞬間的に湧き上がり、そして多くの場合二度と戻らないまま、再び沈み込んでいってしまう、はかない予感やイメージにすぎませんでした。求められれば、シュタイナーは神秘的なエクササイズを与え、個人を助け、支え、そして彼らが自由の中で前へと進むのを許しました。「私は、霊的な参入者を内省的発展の道へと導くことのできる、その力の上に強固な基盤を築きたいのです」（1902年8月16日）。

医師たちが現れるのを待つことは、ルドルフ・シュタイナーの生涯において最も長く、最も引き延ばされた、そしておそらく最も苦痛に満ちた経験の一つでした。彼は極めて早い時期から、精神科学（霊学）によって拡張された医学が社会的にいかに重要であるか、そして、主流派の医学が飛躍的に進歩していくのを目にしながら、それがどれほど緊急を要することであるかを認識していました。「医学がこのまま唯物論的な方法で発展していくのを許してごらんなさい。今から40年経ったとき、この医学がいかに残虐な方法で発展しているか、そして人間がどのような死の形態によってこの医学に『治療』されることになるかを目にしたら、あなた方は恐怖を覚えることでしょう」（1909年6月3日）。ルドルフ・シュタイナーに与えられた時間は、いかにわずかだったことでしょう！医学、治療教育、そして人類の運命に関するこの霊的な対話は、いかに本質的なものだったことでしょう！それにもかかわらず、医師たちが科学的研究の面で貢献したものは、いかに少なかったことか。

「私自身が精神科学的（霊学的）運動として見なさざるを得ない文脈において、生理学や医学の資格を持つ人々が、生理学の成果をその事実性において検証できるほどのレベルまで、精神科学的な事実に精通してくれること、これこそが私の最も差し迫った願いなのです」。彼は1910年の夏、ミュンヘンでの講義の中で、数人の医師が出席している前で、自ら選んだテーマである「オカルト生理学」についてプラハで行う予定の連続講義を見据えて、これらの言葉を語りました。彼が「これこそが私の最も差し迫った願いなのです」という言葉を、他にどこで語ることができたでしょうか。しかし、彼が明らかに念頭に置き、これらの言葉を投げかけた個人たちは、実際にそれを聞き、理解し、そして実践に移したでしょうか。科学（当時の現代医学）によって縛りつけられ、繋がりを見出すことができずにいたチューリッヒの若き医学生（イタ・ヴェークマン）は、確かに当時はまだ、それを実践できてはいなかったのです。

シュタイナーの要請は耳に届かず、何の効果も示しませんでした。それから7年後――その間、彼は医師や科学者からの支援を得られないまま、孤独に長く、そして過酷に働き続け、人間の生理学的構造における「三分節構造（人間の肉体・生命・精神の三層性）」の概論をすでに世に送り出していました――彼はこう語りました。「ああ、私はこれらの人々に（現代医学との）架け橋を築くよう促すために、これほどまでの努力を重ねてきたというのに。もし生理学者や生物学者が、今日これらの分野で到達しうるすべての専門知識を持ちながら、私たちの専門用語（人智学用語）を使うことなく、それでも人智学の精神に則って、生理学や生物学を霊的に探求してくれたなら、一体どれほどのことが達成できただろうか」。

病院や科学研究所の助けを借りず、ルドルフ・シュタイナーが単独で医学の分野に十分な深さのインパクトを与えることは不可能でした。彼の人智学的研究の成果が医学界に受け入れられ、科学的・公的な議論の舞台に上るためには、科学的方法に基づいた臨床実験を通じてさらに発展させられる必要があったのです。彼が必要としていたのは、少数の神智学的・人智学的な開業医ではなく、当時まさに緊急に必要とされていた

医学および医学教育の改革を導入するために、精力的に活動する、信頼に足る臨床的・科学的な一大運動だったのです。彼はこのことについて、少なくとも一度、非常に明確に、そして極めて深く言及しています。

1916年10月26日、スイスの街ザンクト・ガレンで、彼は次のように語りました。

「精神科学（霊科学）は、現代の医学がその詳細しか知り得ない、人間の有機体の内部における様々な繋がりを明らかにすることができます。より洞察力のある研究者であれば、これらのことを本能的に理解しているかもしれませんが、それだけでは十分な速さで前進することはできません。私たちはこう言うことができます。もし、特に医学の分野において、この精神科学に対する広範な拒絶が存在しなかったなら、そして医学が権力者や政府によって独占されようとしていなかったなら、特に医学の分野において、精神科学から人類の利益のために偉大なことが達成できたはずである、と。

あなた方は、霊的探求者がこの進歩を達成するのを妨げるものは何もないと言うかもしれません！しかし、物事はそのようには見なされていません。なぜなら、それは単純に事実ではないからです。今日支配的な唯物論は、実際に霊的研究が介入することを妨げています。物事を見通すことのできる霊的探求者なら、どのような状況にあっても個人を救うことができるという考えは、完全に誤りです。医学の唯物論的な方法がそれを阻んでおり、この医学的唯物論が成長し続ける時間が長ければ長いほど、それはますます阻まれることになるでしょう。医学の分野における霊的探求者に対して、その脚が自由に跳べない状態にあるにもかかわらず、「ここがロードス島だ、さあ跳べ」と言うことはできません。

確かに、医学における至る所に存在する唯物論に立ち向かおうとする、賞賛に値するいくつかの努力はなされています。しかし、これらの努力はすべて十分ではありません。なぜなら、何よりも欠けているのは、単に唯物論的医学に「反対」するだけでは何も達成できないという洞察だからです。それどころか、私たちは外面的（物質的）に必要不可欠である現代医学の成果を利用しなければなりません。ただし、それらを精神科学的な方法で利用するのです！このようにして、もし偏見なくアプローチされるならば、人類が外面（肉体）的にも恩恵を受けるような多くのことが達成できるはずです。

もし人々が病院や解剖室に入り、すべての医療手段や方法に精神科学的な洞察を付け加えたなら、物事がどれほど違った結果になるかを見て、人々は驚愕することでしょう。私たちは、唯物論的医学を無視するのではなく、この唯物論的な分野に精神科学を導入することを目指して、そのための正しい努力をしなければなりません。それが達成されるまでは、他に何もすることはできません。このような短い講義の限界の中で、なぜそうなのかを説明することは不可能ですが、現実はそうなのです。」

では、イタ・ヴェークマンはどうだったのでしょうか？彼女は当時、チューリッヒの婦人科病院に医師として勤務しており、おそらく近くのザンクト・ガレンで上記の講義を聴いていたと思われます。彼女は確かにその2ヶ月後、チューリッヒでも同様の言葉を聴いたはずです。そこでシュタイナーは次のように付け加えました。

「私たちは、個人としてあれこれ行うことによって［医学的唯物論を］改善することはできません。より多くの人々が緊密に結束し、精神的な原理が医学に浸透することを可能にする方法を確立するために、その意志の力を結集させて初めて、それを改善することができるのです。」

イタ・ヴェークマンは、これが自分自身にも向けられた言葉であることを理解していたでしょうか？なぜルドルフ・シュタイナーは、生者と死者の結びつきに関する講義の中で、ドイツの都市カッセル、シュトゥットガルト、ミュンヘンではなく、スイスでのみこれらの言葉を語ったのでしょうか？彼は、科学によって「縛りつけられている」と感じていたかもしれないけれど、あれほど豊かな生命力と心の力を持ち、そして彼自身も働き、暮らしていた国、すなわち戦争中ではなかった国であるスイスで医師として働き、暮らしていた、あの情熱的なイタ・ヴェークマンの支えをあてにしていたのでしょうか？これらは私たちが自らに問いかけるべき重要な問いですが、同時に、答えるのが難しい問いでもあります。

イタ・ヴェークマンが自らの道を歩み続けたことは確かです。彼女は「あれこれの活動」を行い、ザンクト・ガレンとチューリッヒでの講義のすぐ後、チューリッヒ郊外のホッティンゲンで自身の診療所を開設しまし

た。彼女にとっても、シュタイナーが何を望み、何が危機に瀕しているのかを把握するには、時間、それも多くの時間が必要でした。1919年1月、彼女はついに、彼に次のような言葉を書き送る立場（境地）に至ったのです。

「多くの患者を抱えているドルナハに、私が立ち会うことができないのは正しいこととは思えません。そのため、私は最近、アルレスハイムかドルナハの近くに拠点を移すべきかどうか、非常に頻繁に自問しております。私は、人智学の利益になること、そして先生が価値があるとみなしてくださることを行う準備ができております。」
（引用されたドイツ語手書き文字の書き起こし文：内容は上記の手紙と同義）

彼女は、当時シュタイナーが彼女に言った言葉を心に留めていました。彼はこれ以上、いかなるアドバイスも与えることはできない、ということでした。今や彼女は、自分自身の内なる泉から、自らの内なる存在が命じることを行わなければならなかったのです。これらの言葉は、その後も何度も繰り返し現れることになります。そこには偉大なる深み、あるいは私たちを捉えて離さない一つの謎さえもが含まれています。すなわち――「私の内なる存在」。この内なる存在の深淵において、イタ・ヴェークマンは、自らの歩みと課せられた任務が何であるか、つまり、自らの過去と未来の運命に対して目覚めていくことになります。ルドルフ・シュタイナーは、この霊的な領域においてアドバイスを与えることはできませんでしたし、与えようともしませんでした。物事に価値があるかどうかを判断するのは彼の役目ではなく、彼女自身の道、彼女の仕事、そして彼女の運命がどこへ向かっているのかを、彼女自身で見出さなければならなかったのです。

この瞬間から、イタ・ヴェークマンはドルナハへ向かう準備を始めました。彼女は、ルドルフ・シュタイナーのすぐ近くに独自の研究所を備えた病院を創設すること、そして南部の土地にサナトリウム（療養所）を創設することという、具体化しつつあった自らの計画に他の人々を巻き込もうと試みました。

その1年後、彼女は名医ルドルフ・ノル（Ludwig Noll, 1872–1930）に向けて手紙を書きました。ノル博士は、ルドルフ・シュタイナーが他のどの人智学的医師よりも高く評価し、無限かつ無条件の信頼を寄せていた人物です。

「拝啓　親愛なるノル博士

こちらが粉薬の入った小箱です。これでお役に立てば（幸運がもたらされれば）良いのですが。
先生がドイツへ出発することを最終的に決断されたとのこと、その前にぜひお伝えしておきたいことがございます。私が計画していることに対して、先生が共感を持って向き合ってくださることを願っての手紙です。

私は、患者たちがシュタイナー博士の指示に従って治療を受けられるようなサナトリウムを設立する準備が整っております。このサナトリウムはすべての医師に開放されるべきであり、誰か個人の所有物であってはなりません。人智学の大業全体が、世界中に受け入れられるためにまずスイスから出発しなければならないのと同様に、このサナトリウムも、そして研究所も、スイスに置かれなければならないのです。
そこで私の問いなのですが、私たちは力を合わせるべきではないでしょうか？スイスに留まり、この極めて重要な創設のために共に働きませんか？
先生お一人では、スイスの永住権（あるいは医師免許）をお持ちでないため、これを成し遂げることはおできになりません。また、私一人でも不可能です。なぜなら、私自身の能力は先生とは異なっており、何よりも私は「女性」だからです。しかし、私たちの力を結集させれば、何か素晴らしいものを構築できると確信しております。

（計画の）3つの柱は、
1. 医学の研究所
2. ドルナハ（またはアーレスハイム）での病院
3. より温暖な南部気候の土地でのサナトリウム

これら3つの要素はすべて、治療の可能性を広げるためのものです。私を信じてください。もし私たちがこれを正しく始め、共に手を取り合うならば、あらゆる人々からの信頼を勝ち得ることができ、賛同者（関心のある人々）から資金も集めることができるはずです。すでに興味を示して始めている人たちもいるのです。

出資者から資金が集まり始めて、すでに4万5千フランの出資の約束を取り付けております。私の家具や医療用設備を新施設へ持ち込むことができますし、これらの資産も良いクリニックを運営するために役立てることができます。

14の客室（病室）のほかに、スタッフ用の部屋も確保できます。家具もリネン類（衣類やシーツなど）も揃っていますので、先生が今すぐこちらにお越しになっても困ることはありません。私自身はすでに医学教育を修めておりますし、家事全般や調理についても熟知しております。ですから、家政婦や調理スタッフを私自身で指導し、監督することができます。こうした詳細については、直接お会いしてお話ししなければなりません。

しかし、この計画そのものは確実に実行可能であり、私はこれこそが何かを成し遂げるための唯一の道であると信じております。私は、先生の方から私にお話しいただけるのではないかと期待して、これまでずっと待っておりました。しかし残された時間は少なくなっており、この広大で重要な大業は私の心にあまりにも深く刻まれているため、先生のご支持とご協力を得るための最後の試みをせずにはいられませんでした。そうして初めて、私は自分の持てる力のすべてを尽くしたと、自らを安心させることができるのです。

どうか、これらすべてを慎重にご一考ください。すべてのものがドルナハに結集することが、どうしても必要なのです。スイスを経由することで、ゲーテアヌムは世界的な大業とならねばなりません。ドイツは新しい思想を自国内に取り入れなければなりませんが、現在のドイツは、世界に向けて広く発信できるような状態（情勢）にはありません。かつての状況と現在の状況との間には、微妙な違いが存在しているのです。先生もそう思われませんか？

もし先生、そしてシュタイナー博士が同意してくださるならば、私たちが上記の動機を実地へと移し、一つの衝動（を世に送り出すためにこのイニシアチブを執る、という内容の趣意書を作成するつもりです。私たちは、間もなく建物を建設するか、あるいは購入する準備が整うと確信しております。

先生に対してご無礼を働いていないことを願うとともに、私がシュタイナー博士の思想と指示を実践に移すことに対して、いかに真剣であるかを先生がよく分かってくださっていると信じております。シュタイナー博士とお話しされたら、お電話かお手紙で一言お知らせいただけますと幸いです。直接お会いできるのを楽しみにしております。」

イタ・ヴェーグマンからルートヴィヒ・ノルへ（1920年4月5日）
私立クリニックおよび療養所（チューリッヒ第7区）」

イタ・ヴェークマンは、1920年の復活祭の月曜日（イースター・マンデー）に、この特別な手紙をドルナハへと送りました。「私は、先生の方から私にお声がけをいただけるのではないかと期待して、これまで長く待っておりました。（……）先生に対してご無礼を働いていないことを願うとともに、私のことをよく分かってくださっていると信じております（……）」。

「先生もご存知の通り、私はシュタイナー博士の示唆に従って患者を治療できるサナトリウムを設立したいと考えております。このサナトリウムは、一人の個人によって所有されるべきではなく、すべての医師に対して開かれたものであるべきです。

より広範な人智学の大業が世界全体に受け入れられるためにはスイスから出発せねばならないのと同様に、サナトリウムと研究所もまた、スイスに位置していなければなりません。

そこで私の小さなお願いなのですが、この目標を達成するために、私たちは力を合わせるべきではないでしょうか。スイスに留まり、この極めて極めて重要な事業に共に取り組んでいただきたいのです！（……）このアイデアそのものは実現可能なものであり、私の見解では、何かを成し遂げるための唯一の方法です。

私は、先生の方から私にお声がけをいただけるのではないかと期待して、これまで長く待っておりました。しかし、残された時間は少なくなっており、この広大で重要な大業は私の心にあまりにも深く刻まれて

いるため、先生のご支持とご協力を得るための最後の試みをせずにはいられませんでした。そうして初めて、私は自分の持てる力のすべてを尽くしたと、自らを安心させることができるのです。どうか、これらすべてを慎重にご一考ください。

すべてのものがドルナハに結集することが、どうしても必要なのです。スイスを経由することで、ゲーテアヌムは世界的な大業とならねばなりません。ドイツは新しい思想を自国内に取り入れなければなりませんが、現在のドイツは、世界に向けて広く発信できるような状態にはありません。かつての状況と現在の状況との間には、微妙な違いが存在しているのです。（……）

もし先生、そしてシュタイナー博士が同意してくださるならば、私たちが上記の動機を実地へと移し、一つの衝動を世に送り出すためにこのイニシアチブを執る、という内容の文書を作成するつもりです。私たちは、間もなく建物を建設するか、あるいは購入する準備が整うと確信しております。

先生に対してご無礼を働いていないことを願うとともに、私がシュタイナー博士の思想と示唆を実践に移すことに対して、いかに真剣であるかを先生がよく分かってくださっていると信じております。」

彼女はこの手紙をチューリッヒから書きました。当時彼女は、3月21日からドルナハで始まったシュタイナーによる「医師のための連続講義」に、34人の医学生や他の医師たちと共に参加していましたが、数人の患者を治療するために一時的にチューリッヒに戻っていたのです。この医学講義は、ルドルフ・シュタイナーがほぼ20年もの間、待ち望んだ末にようやく開催されたものでした。

ついに、何かが動き出そうとしていました。ルドルフ・シュタイナーの支援のもと、人智学的な新生企業「デア・コメンデ・タ－ク（来たるべき日）」が、シュトゥットガルト近郊で病院を立ち上げ、製薬研究・製造のための機関を設立する計画を進めていたのです。講義の参加者たちは宣言書に署名し、議論が重ねられました。

イタ・ヴェークマンはこれらの計画をすべて知っていましたが、それでもなお、彼女はルドルフ・シュタイナーが暮らし、働く場所であるスイスのすぐ近くで、自分自身の個人的なイニシアチブと責任において活動したいという強い衝動を感じていました。この自発的な試みのために、彼女は共に働いてくれる同僚を募ろうとしていたのです。ほぼ同時期に、彼女は人智学的な薬剤師であるオスカー・シュミーデル（Oskar Schmiedel, 1887–1959）へ次のように書き送っています。

「私たちが何をするにも、まずシュタイナー博士にお伺いを立てる必要はありません。彼は何もおっしゃらないでしょう。なぜなら、私たちは自分自身の衝動に基づいて行動しなければならないからです。もし私たちの行うことが正しければ、彼は私たちを助けてくださるでしょう。そうでなければ助けてはくれません。まあ、その時はその時で、私たちはその結果に対処し、教訓を学べばよいのです。今や、私たちは語るよりも『行動』せねばなりません。これ以上待ってはならないのです。最初から偉大なことを成し遂げる必要はありません。しかし、まずは始めなければならないのです」

この時、イタ・ヴェークマンの内部では、彼女自身がますますはっきりと自覚しつつある「別のもの」が働いていました。それは、彼女の内なる存在と結びついた、魂の深淵から輝き出る「切なる願い（憧憬）」として現れました。彼女はこのことについて誰にも語りませんでしたが、後に彼女の手帳から次のような記述が見つかっています。

医学講義における強い知性主義
ドルナハへ行くという私の決断
この知性主義に対する私の驚き
「神秘の再興」に対する私の切なる願い

1920年の秋、彼女はアルレスハイムに一軒の家を購入し、それをクリニックへと改装し始めました。彼女はルドルフ・シュタイナーにこう書き送りました。「先生が認めてくださることを願っております」。

それからちょうど9ヶ月後の1921年6月、すべての準備が整いました。

「これらすべては、一体どのように受け止められるのだろうか」――これが、最初の患者を迎える準備が整った研究所を視察していただくために、私たちの最も尊敬する師であるルドルフ・シュタイナーをお招きしたときの、私の問いでした。
それぞれ異なる色彩で塗装された部屋、診察室、ベランダなどを案内しているとき、私の心臓は激しく高鳴っていました。彼は一体何と言うだろうか？ と。
そして、忘れられない瞬間が訪れました。私たちが最上階に達し、アルレスハイムからヴォージュ山脈を見渡す美しい景色を眺めようとベランダに向かって歩いていたとき、ルドルフ・シュタイナーは私の方を振り向き、私の手を取ってこう言ってくれたのです。自分はあなたと共に働きたいと思っていること、そしてこの研究所の誕生を心から喜んでいること、と。彼はこの施設を「臨床治療研究所」と名付けたいと言い、今から私と一緒にその案内書のデザインを手掛けたいと申し出てくれたのです。
彼女の手帳には、次のようなシンプルな数行が残されています。

祝福、すべてに同意。約束：
共に働くこと。

そしてそのすぐ後には、こう記されています。

シュタイナー博士との集中した仕事、多くの患者
医薬品の開発、シュミーデルの研究所
常に神秘の深遠な探求への切なる願い。

イタ・ヴェークマンは、真に特別な医師でした。彼女の働く姿に接した人々は、彼女を通じて表現されるものに、しばしば強い感銘を受けました。医療の現場を離れた外側から彼女を観察し、その行動を肯定的かつ偏見なく見た人々は、彼女の毅然とした、精力的で勇敢な側面、すなわち、なされるべき事柄に対して果敢に取り組むその決断力を目にしました。

これらの資質は医学においても不可欠なものですが、より霊的かつ内省的な方法において発揮されるものです。もし、内省的な修行のプロセスにおいて自らを変容させるならば、シュタイナーが「治療者の勇気」と呼び、さらに発展した段階においては「運命またはカルマの治療的意志」と呼んだものが作用し始めます。それは、病を克服することに自らを完全に捧げ、霊的な意味において、すべてとは言わないまでも多くのものを背負う覚悟を持つ、キリストの力に浸透された力です。イタ・ヴェークマンはこの点において特別な才能を持っており、それと同時に、自然のプロセス（営み）に対しても極めて深く親密な親和性を持っていました。

彼女の中にあるこれらの異なる資質を感知した多くの人々は、彼女のカルマ的背景（過去生）に思いを馳せました。そのうちの何人かは、回想録の中でイタ・ヴェークマンの治療スタイルの様々な側面について書き残しています。ここでは、彼女とそれぞれ特別な専門的関係にあった、3人の傑出した人物による寄稿から引用をご紹介しましょう。

その3人とは、医師であり治療教育家であるカール・ケーニヒ、画家のリアーヌ・コロー・デルボア（Liane Collot d’Herbois, 1907–1999）、そして医師のマドレーヌ・ファン・デーヴェンター（Madeleine van Deventer）です。

「彼女は真に王者の風格を持った人物でした！ しかしそれは、彼女が近づきがたかったり、よそよそしかったり、周囲のニーズや出来事に無関心であったりしたという意味ではありません。彼女は王者のようでありながら、同時に深い「姉妹愛」を放っていました。彼女にとって、すべての人間は平等でした。

彼女が病気の子どもを看病しているときも、叫び声をあげる精神病患者、プロイセンの将軍、若いイギリスの伯爵、若い医師や医学生、看護師、庭師、あるいは物乞いを相手にしているときも、彼女はすべての人に対して、姉が弟に話しかけるように、全く同じ態度で接しました。それでありながら、彼女には気品と洗練があったのです。（……）

彼女に会うたびに、私は心の中で「ホモ・スム（私は人間である）」と呟かざるを得ませんでした。なぜなら、その実感が彼女から輝き出ており、他の人々もそれを経験していたからです。彼女は優しく、愛情深く、献身的で、困っているすべての人のことを思いやることができました。彼女は自分に話しかけてくるすべての人の言葉に耳を傾けました。彼女が耳を傾けるときには、それまで何をしていようと、次に何をする予定であろうと、他のすべてを脇に置きました。彼女はその人のためだけに、完全にそこに存在していたのです。

しかし同時に、彼女は激しく動揺することもありました。絶望のあまり叫んだり、涙を流したりすることもありました。「ホモ・スム」――完全に人間であり、王者のようであり、同時にすべての人にとっての姉妹であったのです。（……）

彼女がすべての人類に広げたその姉妹精神は、彼女の医療活動の中にも流れ込んでいました。彼女の医療は素晴らしいものでした。なぜなら、彼女は疑いなく、私がこれまでに人生で出会った中で「最高の医師」だったからです。彼女を「利口」な人だと思わないでください。彼女は「賢者」だったのです。

彼女はあらゆる方法で、あらゆるものを治療のために用いることができました。医薬品、マッサージ、強い言葉、愛情に満ちた眼差し、一曲の音楽、一枚の絵画、自然の中の散歩など、手元にあるものは何であれ、彼女はそれを癒やしのために用いたのです。」
（カール・ケーニヒ）

「彼女は、先入観（固定観念）を持って患者を診るようなことは決してしませんでした。それどころか、内面を完全にまっさらにしていたのです。周囲の人々がその患者のどこが悪いのかを彼女に説明しても、彼女はそれに特別な影響を受けることはありませんでした。彼女は常に「自分の目で見ること」を望んでいたのです。彼女は患者のベッドの脇に腰掛け、自らを完全に開き、その状況の内的なイメージが得られるまでじっと待ちました。このようにして、彼女は診断を下していたのです。」
（コロー・デルボア）

「ある患者が非常に高熱を伴う腹膜炎を発症しました。容態は極めて深刻になり、経験豊富な医師仲間たちも皆、希望を捨ててしまうほどでした。ヴェークマン博士は、2人の助手（医師）と2人の看護師のサポートを受けながら、3日3晩、ほぼ不眠不休でその患者のベッド脇に詰め切りました。治療は絶え間なく、その大半は彼女自身の手によって行われました。彼女はエッセンシャルオイルで患者のこわばった身体を優しくマッサージし、灌腸や注射を施し、シャンパンを小さな一口ずつ患者の口に含ませて飲ませました。

部屋の空気は耐え難いほどで、まるで「悪霊が群がっている」かのようでした。私たち若い助手たちは対処するのが精一杯で、彼女はしばしば私たちを休ませるために庭へと送り出してくれました。私たちは恥ずかしい思いをしながら、ヴェークマン博士には交代の必要がまったくないことに気づかされました。3日後、最悪の峠を越し、熱は下がり、患者は再び食事を摂ることができるようになりました。長い療養期間を経て、その患者は完全に回復したのです。」
（ファン・デーヴェンター）

ルドルフ・シュタイナーは、アルレスハイムにあるイタ・ヴェークマンのクリニックを頻繁に訪れました。これらの観察の背後にある、より広大なカルマ的背景を知っていたのは彼だけでした。彼は、ヴェークマンの中でどのような力が働いているかを知っていたのです。

祝福、すべてに同意。約束：共に働くこと。

シュタイナーとヴェークマンは1921年の夏に共同作業を始めましたが、それはまだ始まりにすぎませんでした。シュタイナーはクリニックを訪れ、精神科学（霊科学）から得た診断や治療への提案を提供しました。彼は医薬品、芸術療法、痛みのある患者のための瞑想を勧めました。彼はシュトゥットガルトの病院を

訪問した際にも同様のことを行い、限定的ではありましたが、彼が定期的に患者を診ていたミュンヘンのイングリッシャー・ガルテン（英国庭園）の近くにあるフェリックス・パイパーのプライベート・サナトリウムでもそれを行いました。イタ・ヴェークマンのクリニックには、彼女の若く熱意に溢れた同僚たちと共に、確かに多大なる生命力が満ちており、間もなく新しい治療法が繁栄し始めました。しかし、これだけがイタ・ヴェークマンにとっての重要な側面ではなく、また本質的なものでもありませんでした。

シュタイナー博士との集中した仕事、多くの患者
医薬品の開発、シュミーデルの研究所
常に神秘の深遠な探求への切なる願い。

本質的な側面は、まだ姿を現していませんでした。彼女はルドルフ・シュタイナーからまだあまりにも遠い場所にいたのです。1922年5月に書かれた2通の手紙（ルドルフ・シュタイナー宛て、および彼女が深く尊敬していた同僚ヒルマ・ヴァルター宛て）は、彼女とルドルフ・シュタイナーとの関係に依然として存在していた距離感と、同時に彼女自身の意志の強さを物語っています。当時、旅の途上にあったルドルフ・シュタイナーに向けて、彼女は次のように書きました。

「最も尊敬するシュタイナー博士。こちらの状況はすべて順調です。3人の患者の治療法を記したお手紙を受け取りました。深く感謝申し上げます。ハーブ（薬草）を見つけるのは困難でした。

敬具。イタ・ヴェークマン（1922年5月11日）」

そして2日後、ヒルマ・ヴァルターに向けてこう書いています。

「スカンジナビアへの旅の休暇がまだ許可されていません。費用が高すぎたのです。そのことをシュタイナー博士に話したとき、彼は少し咎めるような口調で「そうだね、しかし君はドルナハを離れられるのかい？」と言い、ボックホルトに正確な指示を出し、あらゆる不測の事態に備えておくよう私に求めました。私は（旅行へ）出かける気が失せてしまい、静かに家に留まっています。（1922年5月13日）」

「私は出かける気が失せてしまい……。」

歴史的には重要ではない出来事（旅行計画の挫折）の際に発せられたいくつかの率直な言葉ですが、これらは意味深く思われます。イタ・ヴェークマンはルドルフ・シュタイナーの意見を尊重し、家に留まりました。彼女はヴァルターに「静かに」と書きましたが、それはむしろ、引き止められ、制止され、自分の意図を阻まれたことに対する「不本意さや憤り」を意味していたのでしょうか。

「何か気に入らないことがあった」というフレーズは、彼女の初期の手紙に繰り返し登場します。イタ・ヴェークマンは、まだ本当の意味でシュタイナーの霊的な臨在の中に生きていたわけではなく、彼の精神的な領域に組み込まれてもいませんでした。彼女は彼から離れた場所に立っていましたが、彼の方向を向いていました。彼女は驚嘆と畏敬の念に満ちていたと推測できますが、同時に物事に疑問を投げかけ、自らのスタンスを維持しようと努めていたのです。

それから数ヶ月後、彼女は彼に近づくことになります。それは、ルドルフ・シュタイナーと人智学協会、そしてイタ・ヴェークマン自身のカルマに深く刻み込まれることになる、ある「夜」のことでした。それは、多くの国々から集まった人々が何年も働き、ルドルフ・シュタイナーが自らのすべてを捧げた場所、すなわち「ゲーテアヌム」を破壊した大火災の、大晦日の夜、地上における完全な破滅の夜でした。イタ・ヴェークマンは後に、その時間の中にルドルフ・シュタイナーと共に体験したことについて、いくつかの重要な文章を書き残しています。

「シュタイナー博士の姿はいたるところで見られました。ある瞬間には敷地内をあらゆる方向へ歩き回り、次の瞬間には木工房にいました。彼の顔は深い悲しみに沈み、厳粛でしたが、落ち着いており、人類が何を失いつつあるのかを完全に自覚していました。（……）
朝の8時、シュタイナー博士は再び、まだ炎と煙が立ち上る残骸の前に立っていました。ほとんどの人は家に帰ってしまっていました。建物は空っぽでした。何人かの忠実な魂がスタジオに物品を運び戻し、そこで作業ができるように木工房に再び家具を設えました。彼はただ一人、そこに立ち尽くし、破滅の跡を見つめていました。私は恐れ多くも彼に謙虚に近づき、ただ「私たちにとってこれは恐ろしいことです」としか言えませんでした。すると彼は「そうだね、今やこれらすべては世界エーテルに刻み込まれたのだ」と言いました。」

「私は恐れ多くも彼に謙虚に近づき」――イタ・ヴェークマンはルドルフ・シュタイナーのより近くへと歩み寄り、それまでの何年間よりも、自らの存在の最も深いところで彼を理解したのです。この「支えとなる理解」、すなわち、ルドルフ・シュタイナーが何者であり、どのように感じ、何を必要とし、どのようにすれば彼を助けられるのかという繊細な感覚が彼女の中に湧き起こり、彼女自身の内なるあり方を変容させました。1907年の聖霊降臨祭に一瞬だけ輝いた彼との内なる結びつきは、彼女の自己認識の深まりと共に成長し、彼女の中で作用し始めました。そして今、真の近さが可能となり、展開し始めたのです。

イタ・ヴェークマンは常に強い独立心を持っており、すべてを自らの力で成し遂げたいと考えていました。しかし、この瞬間から、彼女は自らのすべてをルドルフ・シュタイナーのために捧げることができるようになったのです。

「火災の後の早朝、ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマンが丘を登ってきました。私たちは沈黙の中で彼らを取り囲みました。するとルドルフ・シュタイナーはこう言ったのです。「私たちの仕事は続く。私たちは再建するのだ」と。」
（マドレーヌ・ファン・デーヴェンター）

火災後の数ヶ月間、ルドルフ・シュタイナーは人智学協会に対して容赦のない批判を浴びせました。彼の考えでは、協会の数々の不手際や「破滅的」な状態が、あのゲーテアヌム全焼という大惨事の一端を招いた原因でもあったからです。1923年という年が人智学協会の歴史において持っていた意味について記された、ヘラ・ヴィースベルガーによる1991年の包括的な著書（全952ページ）を紐解くならば、これが決して誇張ではないことが分かります。

数え切れないほどの深夜に及ぶ会議、投票、演説、そして講義を通じて、ルドルフ・シュタイナーは人智学徒たちに自己反省を促そうと試みました。そして、実際に協会の活動を麻痺させている原因は何なのか――なぜ科学的な課題が手つかずのまま放置されているのか、何が多くの新しい基礎の繁栄を妨げているのか、何が若者たちを遠ざけているのか、など――を彼らと共に突き止めようとしたのです。

ルドルフ・シュタイナーは火災の5週間前、フリードリヒ・フーゼマンに「協会の中で、医師たちが誰よりも強い抵抗を示してきた」と語っていましたが、シュトゥットガルトの臨床治療研究所の医師たちとの間の意見の不一致は、確かに最も深刻なものでした。

何年もの間、あるいは何十年もの間、彼はこれらの医師たちが人智学医学のための根本的な科学的研究を引き受け、その教科書を準備してくれることを期待していました。しかし、シュタイナーの目には何もなされていないように映り、最も貴重な時間が無駄にされ、壊滅的な結果を招いていました。今日、1923年1月31日に行われた重要な「医師たちとの討論」を読むと、ルドルフ・シュタイナーの発した言葉の率直さと過酷さを考慮すれば、ルートヴィヒ・ノル、フリードリヒ・フーゼマン、フェリックス・パイパーズ（Felix Peipers, 1873–1944）の3人が、その後も人智学医師として共に働き続ける勇気を持てたことに驚かされます。

その半年後、1923年8月28日から、非人智学徒の医師たちや関心を持つ一般の一般大衆に向けて新しい治療芸術に関する一連の講義を始めたとき、ルドルフ・シュタイナーはもはや、あのシュトゥットガルトの偉大な研究所の名前を口にすることはありませんでした。まるでそれが存在しないかのように扱ったのです。その代わりに、彼は明確にこう宣言しました。

「私はここで、特にアルレスハイムの臨床治療研究所について言及したいと思います。この研究所は、私が彼女の『治療への勇気』と呼びたいものに基づいて、研究所のために有益な活動を発揮されているヴェークマン博士の優れた指導の下にあります」

ルドルフ・シュタイナーは、ヒベルニア秘儀やミカエルの潮流と深い結びつきを持つ土地であり景観である、ウェールズの地でこれらの言葉を語りました。彼が「治療への勇気」について語ったのは、ドルナハでもシュトゥットガルトでもなく、このウェールズの地だったのです。彼はここで初めてイタ・ヴェークマン博士について語り、彼女もまたその講義に出席し、その景観の持つ豊かな霊性を深く吸い込んでいました。後に彼女は次のように書いています。

「そこでは、他の場所とは異なる方法で語ることが可能でした。それはまるで、霊界に対するより大きな受容性が存在しているかのようであり、聴衆が他の場所からやって来た人々であったとしても、ここでは自然のいたるところから湧き起こるより繊細なうごめきに耳を傾け、霊と魂の領域へと浸透することが可能になっているかのようでした。
当時、ルドルフ・シュタイナーと1回、あるいは数回にわたって会話を交わす幸運に恵まれた人々は、そこに特別な何かが響き渡っていたこと、その大気の中に何かが生きており、それが会話に特別な趣を与えていたことを知っているでしょう。太古の知恵、太古の伝統がここに漂っており、ルドルフ・シュタイナーの言葉によって、この太古の原型的な知恵が深い眠りから呼び覚まされるかのようでした。その場にいた多くの友人たちも、このことを感知することができました。人智学はそれによって、さらに大きな輝きを与えられたのです。人智学が教える、物質的なものの中での霊の働きと織り成しが、より深く体験されました。人は霊をより近くに感じたのです……」

ゲーテアヌムの火災からの8ヶ月間、その魂の中で多くのことに対処してきたイタ・ヴェークマンは、当時「ルドルフ・シュタイナーと1回、あるいは数回にわたって会話を交わす幸運に恵まれた」人々の一人でした。

ウェールズの神秘的な景観の中で、彼女はついに、自らの神秘への切なる願いについて彼に語ることができ、なぜ医学講義があれほど知性的な方法で行われたのかを尋ねました。ルドルフ・シュタイナーは、この問いをずっと待っていたかのようでした。彼は、新しい秘儀の医学を発展させることは可能であると認め、それが今まさに命を吹き込まれようとしていることを強調しました……。私たちは、彼女の手帳の中に、それらの会話と内面的な体験に関する次のような記述を見出すことができます。

ペンマエンマウルのカルマ
完全に顕現した
魂の要素
私の側の理解
「霊界における歓喜」と
彼は言った。

エマヌエル・ツァイルマンス・ファン・エミショーベンによると、これらの数行の記述は、イタ・ヴェークマンが自らの転生の背後にある運命、そしてルドルフ・シュタイナーとの結びつきへのアプローチを、段階的に、そしてますます詳細に見出していったことを表現しています。そしてそのプロセスは、ウェールズの地で「完全に顕現したカルマ」として最高潮に達したのです。

彼女は秘教的な意味において目覚めました。何年もの歳月を要し、ゲーテアヌムの火災以来さらに加速していた、彼女の内省的な修行とルドルフ・シュタイナーおよび彼の課せられた任務への接近は、ここに最初の頂点を迎えたのです。この頂点に達したからこそ、二人はより濃密で、真に神秘的な方法で共同作業を継続することが可能となりました。
ルドルフ・シュタイナーが1902年8月16日に「私は、霊的な参入者を内省的発展の道へと導くことのできる、その力の上に強固な基盤を築きたいのです」と語ってから、ちょうど21年（7年周期の3倍）の歳月が流れていました。本物の霊的な参入者が、今やその発展における決定的な、中心的なステージへと到達したのです。「『霊界における歓喜』と彼は言った。」

9月の初めにルドルフ・シュタイナー、マリー・シュタイナー、イタ・ヴェークマンらがイギリスから戻ったとき、彼らは一人の9歳の子供を連れて帰ってきました。サンドロー・ストートン（Sandroe Staughton）はアメリカ人の少年で、その両親がイルクリー（イギリスの地名）でルドルフ・シュタイナーに彼を託し、助けを求めたのです。サロンドは発達が遅れており、非常に重い障害を抱えていました。落ち着きがなく、世話をするのが困難な状態でした。イギリスに滞在中、ルドルフ・シュタイナーは彼のために次のような瞑想文を書き残しています。

はるか上には太陽があり、
私の愛する光を与えてくれる。
神が私に授けてくださる光の中に、
その光の中で神は私に
いのちの尊い力をくださる

神ご自身の力は
いたるところで輝いている
あらゆる石の中に
すべての植物の中に
動物と人々の中に

そしてもし愛がまた
私の心に宿ることができれば
神の力は私の内に入ってくる
キリストが地上の人間に与えた
崇高な神の力

私はそれを感謝する
生きている一日一日を
アーメン

9月6日、ヒルマ・ヴァルター博士（Hilma Walter,1893年10月26日-1976年9月19日）はサロンドをアルレスハイムの臨床治療研究所（イタ・ヴェークマンの病院）に入院させました。

後にイタ・ヴェークマンは、ルドルフ・シュタイナーが1923年の夏、40人のイギリス人医師たちに向けて人智学医学について語ったあのイギリスの地で、後の「医学局」の種を蒔いたのだと語っています。このように、イタ・ヴェークマンの非知性的な「秘儀の医学」への願いと意志、彼女のカルマ的な理解、そして特別なケアを必要とする子供たちの運命は、新たに発展しつつあったこの「セクション」に、最初から深く刻み込まれていたのです。それは、決して無視してはならない一つの足跡であり、いわば「運命のルーン文字」のようなものでした。

イギリスから戻って間もない9月24日の夕方、ルドルフ・シュタイナーのもとに、急いで書き殴られた次のようなメッセージが届きました。

「親愛なるドクターへ。私が家に帰ると、昨日から喘息を起こしていたポールが、恐ろしいほど悪い状態になっているのを見つけました。突然の崩壊です。彼が亡くなってしまうのではないかと恐れております。敬具。イタ・ヴェークマン。」

喘息を患っていた9歳の少年ポールは、イタ・ヴェークマンのクリニックに滞在することを心から好んでいました。なぜなら、そこに来てから彼の容態は大幅に改善しており、アルレスハイムに滞在することでゲーテアヌムのフリードヴァルト学校に通うことができたからです。

彼の誕生日であった9月24日、彼は深刻な再発に見舞われました。イルクリーやペンマインマウルでの響き、そしてイタ・ヴェークマンとの会話を心に留めながら、過去3日間にわたってパステル画『ドルイドの石』を描いていたルドルフ・シュタイナーは、このメッセージを受け取るやいなや病院へと急行しました。

イタ・ヴェークマン、ヒルマ・ヴァルター、マルガレーテ・キルヒナー＝ボックホルト（Margarete Kirchner-Bockholt）、そしてルドルフ・シュタイナーは、一晩中その少年の命のために共に闘いましたが、朝になり、彼は息を引き取りました。

そのわずか数時間後、シュタイナーは自身の青年期と学生時代を過ごしたウィーンへと旅立ち、ミカエル祭の講義と討論を行いました。ここウィーンで、彼は初めて、イタ・ヴェークマン博士と共に医学に関する書籍を執筆する予定であることを公表したのです……。

ペンマインマウルでの出来事があったからこそ、彼らは『大人のための治療指導書：精神科学（霊科学）に基づく医学拡張の基礎』という本に共に取り組むことが可能となりました。毎晩、彼らはルドルフ・シュタイナーの書斎で執筆に励み、常にキリストの彫像の傍らで「主の祈り」を唱えることから作業を始めました。昼間は、クリニックで一緒に患者を診察し、その治療法について議論を交わし、人智学的な治療薬を開発していきました。

これらすべてにおいて、イタ・ヴェークマンの周囲でこれらの強力な出来事がどれほど凄まじいダイナミズムをもって展開していったかを意識することが重要です。わずか数週間の間に、彼女は凄まじい内面的な変容を遂げており、ルドルフ・シュタイナーとの関係性もまた、同様に変容していました。たとえ、これらの変化の前に何ヶ月、何年にもわたる内省的な秘教的作業があったとしても、です。当時、彼女がどれほどの内面的な激動を経験していたことでしょうか……。

それらの数週間から残された、一通の短い手紙があります。10月30日、イタ・ヴェークマンはルドルフ・シュタイナーに、自分に与えられたあまりにも巨大な課題に対して不釣り合いであると感じ、非常に躊躇しながら、不安に満ちた次のようなメッセージを送りました。

「親愛なるドクター（シュタイナー先生）へ、
シュトゥットガルトのロシェ博士からの手紙が届きましたので、先生にもお読みいただけるよう同封いたします。今夜、先生が私のために時間を作ってくださると伺いました。
ですが、私は今、魂の状態がまったく優れず、非常に多くの心配事や逆境を抱えており、心身ともに消耗し、不満を感じております。私は今夜の集まりに行かない方が良いのではないでしょうか？ そうすれば、いずれまた元の自分に戻れると思います。どうか私に対して辛抱強くいてくださるでしょうか。
敬具。イタ・ヴェークマンより」

9月の初め、あのペンマインマウルでの日々以来、ルドルフ・シュタイナーは彼女のさらなる内省的発展を決定的に自らの手に委ねていました。そして、今まさに達成せねばならない事柄に向けて、よりいっそうの濃密さをもって彼女の準備と指導を始めていたのです。

毎週のように、イタ・ヴェークマンは彼から、彼女に強さと確信、そして医学的洞察の力を授けるための、新しく高度な秘教的エクササイズ（秘修）を受け取りました。同じ月、彼は彼女に次のような詩を授けています。

肉体から語られる言葉は、真実ではない――
私はエーテル体から語らねばならない、
真の現実へと参入するために。

1. 地下の霊たちよ、お前たちは私の足の裏を押しつける、
私はお前たちをまたいで歩く。

2. 湿気の霊たちよ、お前たちは私の肌を愛撫する、
私はお前たちを四方に押し退ける。

3. 空気の霊たちよ、お前たちは私の内なる空間を満たす、
私はお前たちと合一する。

4. 熱の霊たちよ、お前たちは私の内面に魂を吹き込む、
私はお前たちの中に生きる。

5. 光の霊たちよ、お前たちは私を精神と霊で満たす、
私はお前たちと共に思考する。

6. 化学的特性の霊たちよ、お前たちは私の力を奪い去る、
私はお前たちを克服したい。

7. 生命の霊たちよ、お前たちは私の命を殺す、
私は自らの死の中でお前たちを追い求める。

こうして、私はこれを自らのエーテル体の中で語る。
さあ、来るがよい――エーテル世界の色彩よ、響きよ、言葉たちよ。

活動は完全に濃密なまま続けられました。その数週間後、人智学協会の「クリスマス会議」において、ルドルフ・シュタイナーはイタ・ヴェークマンを、ゲーテアヌムに新設された「医学局」の責任者に任命しました。1923年12月24日、彼が彼女を最初の理事会のメンバーとして任命した際、彼は次のように語っています。

「ここ数週間の出来事から鑑みて、私はもう一人の理事会メンバーとして、私が現在、医学への人智学的アプローチについて共に働くことを通じて、正しい方法で人智学的な情熱を検証する機会を得ている人物を推薦せねばなりません。すなわち、イタ・ヴェークマン博士です。
彼女はその仕事、とりわけ仕事に対するアプローチの姿勢によって、この専門分野に人智学をもたらす能力があることを証明してくれました。そして、私はこの仕事が豊かな実を結ぶことを確信しています。だからこそ私は、近い将来にわたって、ヴェークマン博士と共に人智学的医学体系の発展に取り組むことを自らの任務としたのです。それは世界に向けて提示されることになるでしょう。その時、人智学協会の真の友人とは、このように働く会員たちのことであると、人々は知ることになるはずです」

「ここ数週間の出来事から鑑みて……」――私たちは、当時木工房に集まっていた約800人のうち、一体誰がこの言葉を理解できたのか、あるいは理解することを意図されていたのか、と問いかけるかもしれません。これらの「事実」や、このカルマ的な共同作業の濃密さを知っていたのは誰だったのでしょうか。その答えを見つけるのは難しくありません。ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマンの二人だけであり、他には誰もいませんでした。彼は、彼女を支え、その方向性を定めるために、これらの言葉を彼女に向けて語ったのです。それ以上に、彼はクリスマス財団大会によって切り開いた霊的な空間に向けて、これらの言葉を発したのでした。

その場に居合わせた若いオランダ人医師エマヌエル・ツァイルマンス・ファン・エミショーベンが後に報告したところによると、彼女がシュタイナーの言葉を聴いていたとき、その顔には涙が溢れ流れていたといいます。

1924年は、人智学協会のクリスマス財団大会と共に始まりました。この年は、ルドルフ・シュタイナーがまだ完全に活動することができた最後の1年となりました。医学の分野において、彼は今やイタ・ヴェークマンとのみ専任で共同作業を行っていました。彼はシュトゥットガルトのクリニックも訪れ、回診の際には詳細なアドバイスを与えました。しかし、未来の方向性を定めたあのクリスマス財団大会において、シュトゥットガルトの臨床治療研究所とその医師たちの名前が言及されることは、ただの一度もありませんでした。

大会後の数ヶ月間に、ヴェークマンがフリードリヒ・フーゼマンとルートヴィヒ・ノルに向けて書いた2通の返信が見つかっています。彼女はこれらをルドルフ・シュタイナーと相談した上で送っており、これらはシュタイナーの当時の態度や心境を如実に物語っています。

フリードリヒ・フーゼマンは、イタ・ヴェークマンおよびルドルフ・シュタイナーとの対話を求めていましたが、彼女は自分たちの膨大な仕事量と解決すべき課題を理由にそれを断り、次のように続けました。

「昨日、あなたの手紙をシュタイナー博士にお渡ししましたが、博士は月曜日にあなたにお会いする時間はないとのことです。シュタイナー博士は現在、仕事に圧倒されており、私たちが仕事を構築するための強固な基盤を最終的に完成させることができるよう、外部から邪魔されたくないと考えておられます。
打ち合わせは常に障害となります。ひとたびこの基盤が整えば、何をすべきか、そしてどこに各自の場所を見出すべきか、誰もが耳にすることになるでしょう。」

その数週間後、ルートヴィヒ・ノルは薬用植物の施肥に関するいくつかの詳細な質問を送り、それをルドルフ・シュタイナーに伝えてほしいと頼みました（「これらの質問に答えてくださるシュタイナー博士に深く感謝いたします。親愛なる同僚よ、あなたがその回答を私たちに伝えてくだされば幸いです」）。

イタ・ヴェークマンは1924年5月12日に次のように返信しました。

「シュタイナー博士があなたのすべての質問に直接お答えすることは不可能です。もし博士がそれらの質問すべてにこれほど深く入り込むのであれば、博士自身がその課題を丸ごと引き受けた方が早いということになってしまいます。
私たちは次のように進めるつもりです。まず私たちの研究所で実験を行い、どのように行うのが最善かを見極めます。より詳細な内容や結果が出次第、あなたにお知らせいたします。」

何かが終わりを迎えていました。何年もの間、待ち続け、支援やアドバイスを与え続けた末に、ルドルフ・シュタイナーによってついに古い関係性が断ち切られたのです。彼はもはや「外部から」邪魔されたくはありませんでした。その瞬間から、利用可能なすべてのリソースを投入して、ドルナハとアルレスハイムにおいて仕事がなされることになったのです。

1924年、イタ・ヴェークマンは、彼女が同行できなかったいくつかの旅を除いて、常にルドルフ・シュタイナーの傍らに留まり続けました。彼女は、ゲーテアヌムの火災がルドルフ・シュタイナーの存在の最も深いところをいかに揺るがし、彼がいかに傷つきやすくなっていたかを知っていました。彼女は、彼が活動を継続するために、周囲の人間からどのような助けを今必要としているかを分かっており、彼を支える意志と能力を持っていました。

シュタイナーの側もまた、ヴェークマンの内省的な秘教的発展を促すために、飽くことなく取り組み続けました。シュタイナーがヴェークマンに授けた多くのエクササイズの中には、彼らの共同作業の持つカルマ的な次元を今後も深め続けるための、いくつかの瞑想文も含まれていました。ルドルフ・シュタイナーが、イタ・ヴェークマンとのこのカルマ的な専門職としての関係性と友情によって、ますます精神的に満たされていくのを感じていたことは明らかであり、彼がそこから汲み取った強さは、人智学のさらなる発展にとって極めて不可欠なものだったのです。

2月22日のイタ・ヴェークマンの誕生日に、シュタイナーはヴェークマンに次のような詩を授けました。

遥かなる太古の時代に思いを馳せ
古き共同体の中に生きることは
一つの絆を紡ぎ出し
数々の問題を解決し
私たちに霊たちを見出させる。
それは人生に真実をもたらすのだ。
然り、そのようになりますように。

そのわずか5日後の2月27日、ルドルフ・シュタイナー自身の誕生日に、次のようなマントラが続きました。

心がカルマを読み解くだろう
人間の生命の中で
万物を形づくる
「言葉」を読み解くことを
心が学ぶとき。
人間の世界の中で
万物を形づくる
「言葉」を解き放つことを
心が学ぶとき。

私のマイサ（Mysa）へ
1924年2月27日

彼女の遺品の中からは、次のような詩の数行も見つかっています。

幾千年を超えた記憶
いとも愛らしく、優しきマイサの
激しく轟き、駆け抜けるアレクサンダーの
すべては、輝かしい霊のイメージの中に
今ここにある愛の中に。
希望を分かち合う魂たち
これらが私たちに強さを与え
魂のための武器を鍛え上げる。

1924年の間にルドルフ・シュタイナーの肉体的な力が次第に衰えていくにつれ、イタ・ヴェークマンの彼に対する心配は募っていきました。彼女が春から初夏にかけて受け取った手紙は、その懸念と、二人の関係の濃密さを反映しています。以下の不可欠な数行は、エマニュエル・ゼイルマンス（Emanuel Zeylmans）が1990年に初めて公開した書簡からの引用です。

「私の愛するマイサ＝イタへ。心のこもったお手紙をありがとう。大きな喜びをいただきました。私の愛するマイサが元気に過ごしていることを願っています。どうか私のことは心配しないでください。私は本当に、できる限り注意深く過ごすつもりです。これまでのところ、すべては耐えられる範囲にあります。やるべきことがかなりたくさんあります。マイサがここにいてくれたら素晴らしいのですが。しかし、私たちは物事を「賢明な方法で」手配しなければなりません。」（1924年4月1日）

「私のいとも親愛なる友人であり、先生（シュタイナー先生）へ。
先生が出発された後、シュミーデル博士が私のところへ来て、ハインツェが話していたことを教えてくれました。それは、カリージ（人智学医師の一人）がすでに癌に関する研究論文を印刷に回しているという内容でした。
医学局を完全に無視して論文が印刷され、発行されようとしているこのやり方は、あまりにも奇妙な進め方です。しかも彼は、あらかじめシュトゥットガルトの臨床治療研究所をゲーテアヌムに帰属させたいと求めておきながらです。この帰属はいたるところで公表されることになるというのに、その後、これらの医師たちは私たちに何も尋ねることなく、自分たちだけであらゆる可能なアレンジを行っているのです。
癌の問題はあまりにも重要であり、私たちが一度も意見を求められないというのは、本当にあってはならないことです。おそらく先生は、これらの医師たちに対して、今一度明確な態度をお示しになる機会を持たれることと存じます。
ベルンへの旅はいかがでしたか？ 先生が人智学に関するあまりにも多くの事柄に対処しなければならなかったことを、とてもお気の毒に思っております。これらは心身を酷使するものであったでしょうに、その上、夜には講義まで！
ですから、私たちはすべてを一緒に行う必要があります……。そこで先生に、一つ、非常に大きなお願いがございます。どうかベルンとパリの間の期間には、いかなる連続講義もスケジュールに入れないように手配してください。昨日、開催が予定されている農業講義（のちの農業講座）について耳にしました。
しかし、私たちは共同執筆中の医学の本を完成させなければなりません。そしてその本の完成は、農業講義に劣らず重要なことです。私は、誰もが待ち望んでいるこの未完成の本のことが心配でなりません。私がこのように多くの要望ばかり言うからといって、どうか怒らないでください。
先生が発たれて、私は今、とても孤独に感じており、思わず先生の車の後を追いかけたい衝動に駆られたほどです。私は今日、私たちの書斎へ行き、そこで瞑想を行うつもりです。そうすれば、私の深く愛する友人のすぐ近くにいられるからです。

心を込めて。あなたのマイサ＝イタより」（1924年4月8日）

「マイサへ、1924年のクリスマスに

宇宙の星の文字の中に
私たちを結びつけるものが
何であるかを読み解くことができる

それは星の文字の中に明かされており
私たちの心の深淵において開示される。

愛の中に刻まれた魂の文字の中に
あなたのハートが毎日私のために捧げてくれる、
真実の犠牲（自己捧奉）が生きている

愛の中に刻まれたそれは、やがて現実となり
はるか高き宇宙の星々の中に書き込まれるだろう。

クリスマスの季節のなかに
魂はその内奥に生きているものを深く感じる
愛 ＝ 星 ＝ 感謝の文字
深い感情を込めて、あなたのためにこれを贈ります。」

1924年のクリスマスの頃、そして年の瀬にかけて、ルドルフ・シュタイナーが深刻な健康上の危機に陥ったとき、多くの人智学徒たちがドルナハへと集まってきました。クリスマス財団大会から1年が経過しており、彼らはもはや直接会うことのできなくなった師の、せめて近くにいたいと願ったのです。

その中には、シュトゥットガルトのヴァルドルフ学校の校医であり、ルドルフ・シュタイナーおよびイタ・ヴェークマンと非常に親しかったオイゲン・コリスコ（Eugen Kolisko）もいました。12月30日、彼は長い感謝の手紙を書き送りましたが、その中には、繊細であると同時に極めて先見の明のある次のような一文が見出されます。

「ヴェークマン博士が、忠実な看護という面において成されていることは（……）、深い愛に満ちた医療ケアの輝かしい手本として、永遠に医師たちの前に立ち続けることでしょう」

それから3ヶ月後の1925年3月30日の早朝、ルドルフ・シュタイナーはドルナハの書斎で亡くなりました。イタ・ヴェークマンは後に次のように書き残しています。

「最期の数日間、彼の周囲にはかすかな哀しみが漂っていました。私には、彼が何か重大な問題を解決しようとしているかのように思えました。彼の目はいつもより輝きを失っているように見え、私は説明のつかない大きな不安に捉われました。彼の肉体的な状態は悪化しておらず、むしろ良くなっていたのですが、私の内なる胸騒ぎは消えませんでした。私がそのことについて尋ねると、彼はいくつかの優しい言葉をかけ、自分は大丈夫だからと私を安心させて、回答をはぐらかしました。
日曜日の朝（3月29日）、彼は痛みを感じて目を覚ましました。彼はその朝、初めて仕事をしませんでした。私たちはその痛みについて長く話し合いましたが、懸念するような原因はありませんでした。痛みは日中には消え去りました。その日の彼は極めて穏やかで忍耐強く、私に新たな治療の指示を与えてくれました。
また彼はその朝、前日に彼自身が最後の校正を終えたばかりの一冊の原稿を私に手渡してくれました。それは、私たちの医学の本（『治療指導書』）でした。私たちは彼の発病前、多大なる愛と献身をもって、長い時間をかけてこの本に共に取り組んできたのです。彼は校正を自分自身で行うことにこだわっており、今やこの本は、彼の遺産として、彼の「手」によってなされた最期の仕事としてここにあります。それを私に手渡してくれたとき、彼は大いに喜んでいました。『この本によって、何か重大なものが与えられたのだ』と彼は語りました。
彼がどのように医学を構築していこうとしていたかに思いを馳せるとき、深い哀しみが私を襲います。彼は私たちに『メルクリウスの秘儀』の知恵のすべてを授ける計画を立てていたのですが、まだその始まりがなされたにすぎず、現在出版されているこの本の後に、一連の続編が続くはずだったのです。

午後の4時になり、痛みが戻ってきました。私の不安は消えませんでした。私は、シュトゥットガルトにいたシュタイナー夫人に連絡を入れるべきだと主張しました。しかし私のこの不安は、傍らにいたノル博士には共有されず、医学的な観点からも、そうすべき理由は本当に何もありませんでした。それは合理的な不安ではなかったのです。博士自身も、懸念を抱かせるような兆候は何も示していませんでした。彼は、隣の書斎がもうすぐ完成するのかどうかを尋ね、それによって新しいゲーテアヌムの内部の模型に取り組むことができる、とさえ話していたのです。

夜が訪れました。彼の脈拍はわずかに上昇していましたが、力強く、規則的でした。私はどうしても横になる気になれず、明かりをつけたまま夜を明かしました。非常に驚いたことに、博士はこれを受け入れてくれました。以前であれば、たとえ私が彼の命を心配しているような時であっても、彼が私にこのようなことを許したことは一度もなかったのです。これは一体どういうことだったのでしょうか。

ノル博士もまた、隣の部屋で眠らずに起きていました。夜の早い時間は静かに過ぎ去り、私は彼のあらゆる呼吸を見守り、この尊い生命が私たちの元に留まってくれるよう祈り続けました。朝の3時頃、私は彼の呼吸に変化が生じたことに気づきました。呼吸が速くなっていたのです。私がベッドの脇へ行くと、彼は眠っておらず、私を見つめて『疲れていないかい？』と尋ねました。そう言うことで、彼は私が投げかけようとした質問を先回りしてくれたのです。その優しさに、私は限りなく胸を打たれました。

彼の脈拍は先ほどほど力強くはなく、また非常に速くなっていました。私はどうすべきか相談するために、隣室からノル博士を呼びました。博士が真夜中に部屋に入ってきたことに対しても、シュタイナー博士は驚く様子もなく、親切に彼を迎えました。『私はちっとも気分が悪くないのだよ』と彼は言いました、『ただ、眠れないだけなのだ』と。私たちは明かりを消しました。しかし4時になると、痛みが戻ってきたために彼は私を呼びました。『そして、朝になったら、私が提案した治療を続けよう』と彼は言いました。彼は私たちを休ませようとしていたのです。これらの言葉は、彼が常に他人のことを考え、自分自身のことは決して考えない人であったことを、改めて証明していました。もちろん、私たちは夜明けを待つことなく、なされるべき処置を行いました。

しかし間もなく状況は一変し、彼の脈拍は悪化し、呼吸はさらに速くなりました。そして私たちは、この生命が次第に消え入り、私たちの指導者であり、教師であり、そして友人であった人が、物理的次元から旅立っていくのを、ただ目撃するしかなかったのです。

彼の旅立ちは、まるで一つの奇跡のようでした。彼はあたかも、それが当然のことであるかのように去っていきました。私には、決定的な選択が最期の瞬間に下されたかのように思えました。そしてひとたびそれが決まると、そこにはいかなる苦しみも、地上に留まろうとする試みもありませんでした。彼はまっすぐ前を見つめ、穏やかに、私にいくつかの優しい言葉をかけ、そして意識を保ったまま静かに目を閉じ、両手を合わせました。」

ルドルフ・シュタイナーの死から間もなくして、イタ・ヴェークマンは医師として、そして医学局の責任者としての仕事を再開しました。彼との永続的な結びつきを自覚しながら、彼女はルドルフ・シュタイナーの意図に従って活動を継続しようと努めました。これこそが、彼の残した遺産であり、明確な意志（遺言）だったのです。

魂の果実は、
私のために熟していく
精神（霊）の中で、地上のビジョンを
あなたに送ることができるとき。
私には思える
炎の中の
過去の存在が
歓喜に満ちて
形を成し
霊の家（精神の家）のなかで
私を包み込んでいるように。

だから、その魂の手を取りなさい
それはあなたに向けて差し伸べられ、
あなたの歩みを導いてきた手なのだ。

あなたのものである私の自我よ
そして、私の愛することを実行しなさい。

そうすれば、それはなされるだろう
まるで私自身の自我が
そのペンを握り、導いたかのように。

〔第２講義〕

「これらの島々を築き上げ、強化することが私の取り組みです」
イタ・ヴェークマンと治療教育の教師たち
"To build up and strengthen these islands is my endeavor"
Ita Wegman and the Curative teachers

●基本的な視点

イタ・ヴェークマンがルドルフ・シュタイナーの逝去後に
治療教育を人智学の社会理念としてどのように担い、
育て、守り抜いたかが中心に描かれている。

治療教育は単なる教育・医療の一分野ではなく、
ヴェークマンにとって「医学セクションの心臓」であり、
霊的洞察・カルマ理解・キリスト教的癒やしの衝動を
最も過酷な障害を持つ子どもたちに向けて実現する場だった。

●要点

・治療教育を人智学の核心的・社会的実現として位置づける：

特別なケアを必要とする子どもたちへのコミットメントは、
受肉の最も困難な状況に向き合い、
霊的ヒエラルキーと結びつく行為であり、人智学的医学そのもの。
受動的・敬虔な態度ではなく、
能動的に霊的領域へ参入するミカエル的な態度が求められる。

・シュタイナーの意志の継承と「島々」の構築：

シュタイナー亡き後、若い治療教育教師たち
（ピッケルト、レフラー、シュトローシャインら）が
「シュタイナーの力がヴェークマンを通じて働いている」
と体験した聖霊降臨祭の出来事を起点に、
ヴェークマンは治療ホームを
「島々（islands）」として強化しようとした。
これは中央ヨーロッパ文明の崩壊が迫る中で、
将来の再建のための霊的・実践的な避難所・拠点を築く試みである。

・暗黒の時代における対極的イニシアチブ：

19世紀末から1920年代にかけて強まる
社会ダーウィニズム・優生学・「生きるに値しない命」の思想
（フォレル、プレッツ、ビンディング＝ホッヘなど）に対し、
シュタイナーとヴェークマンは障害を持つ子どもの宿命を守る
ミカエル的対極を打ち立てた。
ナチスの安楽死政策はその頂点に過ぎない。

・リーダーシップの質：

実務的・財政的な負担を背負いつつ、
高い専門基準・霊的連帯・個人の成長への関心を維持。
仲裁者になることを拒み、共同体として誤りを正すことを求め、
常に「大きな歩み」を志向した。

●本文

「戦争によってトラウマを負った子どもたちを受け入れることは、私たちが治療教育における自らの課題を見失うことを意味しません。それどころか、それこそがこの課題の真の具現化なのです。もしそのことが理解できないのであれば、時代の大きな歩みとともに前進しているとは言えません。私は断じて、小さな歩みに甘んじるつもりはありません。常に大きな歩みとともにありたいと考えています。」
（1942年8月20日）

＊写真
1927年9月9日、アルレスハイムのゾネンホフにて。
医師、治療教育者、看護師、そして一人の子どもと共に写るイタ・ヴェークマン。

〔1925年3月22日（土）付の週刊誌『ダス・ゲーテアヌム（Das Goetheanum）』に掲載された広告。〕

「イェーナ＝リヒテンハインに新しく開設された「特別なケアと教育を必要とする子どものための研究所」に注目が集まった。3人の若者が、資金もないまま、しかし熱意に満ち、ルドルフ・シュタイナーと人智学への大きな信頼を胸に、この「研究所」を設立したのである。彼らは建物を借り、最低限必要な設備を整えると、彼らの助けを必要とする、こうした宿命を背負った子どもたちの最初の一人を受け入れた。
それからわずか8日後、ドルナッハから逝去の報せを受け取ったとき、私たちがどれほど巨大な衝撃に見舞われたか、多くを語る必要はないだろう。このショックの後、私たちがこれまで通りに活動を続けられるかどうかは、極めて危うい状況だった。確かにイェーナにいた私たちは、この半年間、その尊い命を案じ続けていた。そして、イタ・ヴェークマンがノル博士とともに全力を尽くし、人類がこれからも肉体という次元でルドルフ・シュタイナーの活動の恩恵を受け続けられるよう、最大の献身をもってその癒やしの力を注いでいることも知っていた。半年の間、私たちの思考と感情はまさにこの一点に集中していたのだ。そして、私たちがようやく歩みを始めたばかりのこの時に、あの打撃が襲ったのである。当時、スタッフの一人の父親がたまたま面会に訪れていた。彼は私たちの思想（人智学）を共有してはいなかったが、これで私たちの取り組みも終わりだと確信していた。
私たちの取り組みがそこで終わらなかったのは、イタ・ヴェークマンのおかげである。(…) 同じ年、ゲーテアヌムで大規模かつ重要な聖霊降臨祭（ペンテコステ）の会議が開催されたが、その原動力となったのは、ひとえにイタ・ヴェークマンと精神科学自由大学（理事会）の仲間たちであった。この会議の中で、その後の治療教育の活動にとって決定形となるさらなる進展があった。私たちはイタ・ヴェークマンに自分たちの状況を伝えることができた。彼女は深い関心を持って耳を傾け、訪ねてきた若い私たちに次のような深い実感を抱かせてくれた。すなわち、「ルドルフ・シュタイナーから注がれる力が、いまこの瞬間、イタ・ヴェークマンの内に、そして彼女を通じて働いている」ということである。私たちはそれを肌で感じることができた。
それまでシュトゥットガルトの自由ヴァルドルフ学校でしか行われていなかった「日曜礼拝」をイタ・ヴェークマンが導入したことは、この治療教育機関の精神的な基盤を形作る上で不可欠なものとなった。ルドルフ・シュタイナーの肉体的な不在という、私たちの活動が新しい章の始まりに立たされていたまさにその時に、ヴェークマンによってそれは創始されたのである。この活動に深く携わっている親愛なる友人である皆さまであれば、特別なケアを必要とする子どもたちが、世界の偉大なる癒やし手と自らを結びつけるこの儀式を内なる核心へと受け入れられることが、現在そして未来においてどれほど大きな恵みであるか、改めて語る必要もないだろう。

その後まもなく、イタ・ヴェークマンはラウエンシュタインで数日間を過ごし、そこで子どもたちの病のカルマとの深い結びつきを築いた。彼女は助言を与え、私たちの活動を励まし、ルドルフ・シュタイナーへの忠誠を胸に、決意を持って活動を未来へと繋いでいくよう、私たちを奮い立たせ、インスピレーションを与えてくれたのである。」
（ジークフリート・ピッケルト）

一連の連続講義のさなかにある今日、2001年9月17日、私はイタ・ヴェークマンと人智学的な治療教育について振り返ってみたいと思います。

皆さんの中には意外に思われる方もいるかもしれませんが、これについて詳しく語るのには十分な理由があります。なぜなら、治療教育運動はある意味で、イタ・ヴェークマンの「医学セクション」における社会的な中心であり、いわば心臓そのものだったからです。人間に対する霊的な洞察、そしてその特定の受肉が持つより広いカルマ的文脈から、受肉において最も過酷な障害に対峙しなければならない子どもたちへ向けてコミットすること、そして、キリスト教的・宗教的な衝動に基づいて活動する人々の集団としてこのコミットメントを果たすこと――これこそが、イタ・ヴェークマンにとっての真の人智学的医学でした。

治療教育へのこの献身には、多大なる強さと勇気が必要でした。「私たちは、受動的で、敬虔で、従順であることによってミカエルに到達することはできません。私たちがミカエルに到達するのは、霊的領域へと能動的に参入することによってなのです」（イタ・ヴェークマン）。 このコミットメントがなされたのは、すでにこうした子どもたちの根本的な生存権が疑問視され始め、まもなく治療教育の可能性や意義そのものが根底から否定されるようになる時代でした。私たちが、治療教育、ひいては人間の存在が持つカルマ的次元のための闘いにおけるイタ・ヴェークマンのミカエル的アプローチに目を向けるのには、極めて重要な理由があります。私たちは彼女の手本を自らの心と意志の中に受け入れるべきです。なぜなら、今日の「生命倫理」や遺伝子工学は、7万人もの障害者を殺害したナチスの死の運動と同じくらい、現実的な力として存在しているからです。

今朝、私たちはラジオで、昨日の夕方パレスチナで一人の男性が射殺されたというニュースを耳にしました。その男性は耳が聞こえず、口がきけず、知的障害を抱えていました。彼は通りを歩いていて、警察官の静止命令を無視してしまったのです。彼はイスラエルをめぐる死の動乱の犠牲者となりました。2000年前のまさにそのような夕暮れのときにも、キリスト・イエスは同じ地域を歩み、身体が不自由な人々、耳が聞こえず口がきけない人々、病める人々や「障害」を持つ人々を助けていたに違いありません。そしてそこは、1934年、重病により死の淵に立たされた後、ナチス・ドイツの動向やドルナッハでの破滅的な出来事を目撃したイタ・ヴェークマンが赴いた場所でもありました。ここパレスチナで、彼女は未来への力を求め、そして見出したのです。

「ルドルフ・シュタイナーから注がれる力が、いまこの瞬間、イタ・ヴェークマンの内に、そして彼女を通じて働いている」――ジークフリート・ピッケルト、フランツ・レフラー、そしてアルブレヒト・シュトローシャインは、ルドルフ・シュタイナーの逝去から数週間後、この聖霊降臨祭（ペンテコステ）のような体験をしました。それが彼らに、ある使命に向かって活動を続ける力を与えたのです。その使命が始まったのは1923年の晩夏、特別なケアを必要とする最初の子ども、サンドロ・ストートンが治療のためにルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマンに託された時でした。同時に、フランツ・レフラーとジークフリート・ピッケルトは、イェーナにあるヨハネス・トリューパーの教育・児童養護施設「ゾフィーエンヘーエ（Sophienhöhe）」で治療教育の教師としての活動を開始しました。医師たちに向けたロンドンでの2回目の講義が行われた日である1923年9月3日の午後、ルドルフ・シュタイナーは、イーストエンドのドック地帯でも特に貧しい地域の一つであるデプトフォードにある、マーガレット・マクミランの保育学校を訪れていました。

「マクミランは、最も貧困な環境にある2歳から12歳までの子どもたち300人を受け入れ、素晴らしいケアを施しています。彼女の周囲には、献身的で、毅然とし、思いやりのある教師たちの集団がいます。子どもたち

は、文字通り泥の中から引きずり出されたような、完全に放置された状態でこの施設にやってきます。くる病や結核、あるいはそれ以上に重い病気に苦しみ、感情的には無気力で、精神的には眠り込んだ状態で、このホームに迎え入れられるのです。しかし、ひとたびこのケアの恩恵を受ける機会を得ると、さまざまな教室で彼らが精神的に機敏になり、幸福そうで、より健康になり、行儀の良い小さな人間に育っている姿を目にすることになります。この子どもたちが遊び、学び、食事をし、食後に休息をとる姿を見るのは、深く満たされるものです。

……彼らはシェイクスピアの『真夏の夜の夢』の場面を、とても愛らしく演じてみせました。小さな役者たちはみな魂に満ち、劇的な表現力にあふれていました。この養護ホームの隣にはもう一つの家があります。最も貧しい人々の中の、さらに貧しい子どもたちのための治療ホームです。マクミランがその園長を務めています。毎年6,000人もの子どもたちがこのホームを通り抜けていきます。ここには、威厳ある、神聖な雰囲気が漂っています。1917年、マーガレット・マクミランは深く愛していた姉を亡くしました。現在の養護ホームは、その姉の思い出に捧げられたものです。どの部屋に足を踏み入れても、レイチェル・マクミランの精神に出会うことができます。」

シュタイナーのこの描写は、霊的に高められた社会活動への呼びかけのように思われます。秘学的な基礎の上に立つこの治療ホームがどれほど深く彼に感銘を与えたかは、この短い報告の言葉一つひとつから伝わってきます。

これらすべてが起きたのは、ペンマエンマウルでの講義の後の日々、1923年の8月と9月のことでした。これらの一連の出来事を振り返るとき、私たちはこれらすべての状況を包み込む「星座のようなつながり」を感じ取ることができます。すなわち、特別なケアを必要とする子どもたちの到来、まだ研修中だった若い援助者たち、イタ・ヴェークマンのカルマへの洞察、そして最後にルドルフ・シュタイナー自身の存在です。その数か月後、ピッケルト、レフラー、シュトローシャインは、助けを求めて「クリスマス会議」へと旅立ちました。彼らは医学セクションの設立の場に居合わせました。そして、ルドルフ・シュタイナーが、本来なら出席が厳しく制限されていた医学生向けのコースに彼らを招待したとき、イタ・ヴェークマンも含めた全員が驚いたのです。5月には、彼らはすでにイェーナのラウエンシュタインの賃貸契約を結んでいました。そして、ルドルフ・シュタイナー（コベルヴィッツ在住）とイタ・ヴェークマンとの間で最も活発に文通が交わされていた聖霊降臨祭（ペンテコステ）の時期に、彼らはシュタイナーに次のような手紙を送ったのです。

「親愛なる、そして深く尊敬するシュタイナー博士！

私たちは、1週間後に博士が私たちの元を訪れてくださることが可能となるよう、ラウエンシュタインの準備と調度品を十分に整えました。

博士と交わすことのできた対話は、霊的世界が私たちにこの贈り物と支えを授けてくださるに違いないという、確信に満ちた希望を私たちに抱かせてくれます。私たちにとって、博士のご訪問は精神的な定礎（礎石を据えること）となるでしょう。私たちの心からの願いが叶えられますよう、切にお願い申し上げます。」（1924年6月9日）

この手紙が送られた8日後、ルドルフ・シュタイナーは夜半、列車でイェーナに到着しました。翌日、彼は若い治療教育の教師たちと、すべての子どもたちの診断と治療について極めて深く議論し、詳細な助言を与えました（彼自身の控えめな言葉を借りれば、「私はほんの少し、先鞭をつけることができた（……）」）

その1週間後、彼自身が最後の病に倒れるわずか数か月前のこと、ドルナッハで「治療教育コース」が開催され、そこには数名の医師も招待されていました。その中の一人に、シュトゥットガルトの自由ヴァルドルフ学校の医師であったオイゲン・コリスコがいました。彼は、ルドルフ・シュタイナーがラウエンシュタインを訪問する3日前に、イタ・ヴェークマンへ次のような手紙を送っていました。

「治療教育コースを本当に楽しみにしています。このコースは、私の活動にまったく新しい方向性を与えてくれるかもしれません。先日の子どもたちのための医学会議の際、彼らの治療にこれがどれほど必要とされているか、あなたも痛感されたことでしょう。このコースの助けを借り、そしてシュタイナー博士とあなたが変

わらぬ支援を続けてくださるなら、医学セクションが喜ぶような成果が必ず生まれるはずです。そう思いませんか？」
（1924年6月15日）

そして、医学セクションだけでなく、多くの人々を喜ばせる成果が実際に生まれました。ルドルフ・シュタイナーは、その生涯の最後となる緊迫した活動期のただ中で、まもなく実を結ぶことになる治療の潮流を始動させることができたのです。子どもたちは進歩を遂げ、治癒のプロセスが始まりました。シュタイナーが亡くなるわずか3か月前、1924年12月30日に彼の病床に届いた手紙の中で、コリスコはシュトゥットガルトの学校にいる「問題児」たちの進歩の様子を再びこのように描写しています。イェーナの特別なケアを必要とする子どもたちについて、彼はこう語りました。

「ラウエンシュタインの成果も本当に大きな喜びでした！ 少し前までは光にさえ反応しなかったシュトゥットガルト出身のあの小さな男の子が、今ではテーブルの周りを元気に走り回り、ランプを見せるとこれ以上ないほど大喜びするのです。なんと素晴らしいことでしょうか！ クルト（……）も、その他の多くの子どもたち、そして何人かのてんかんを患う子どもたちも、ずいぶんと良くなりました。親愛なる博士、あなたのご訪問は無限の恵みをもたらしました。あそこにいる全員が、博士の体調が回復され、再びお迎えできる日を心から待ち望んでいます。たとえ子どもたちが良くなったとしても、博士の一言があれば、彼らはさらに良くなることができると、私たちは皆知っているのです。」

今日、もし私たちが、イタ・ヴェークマンがルドルフ・シュタイナーの意志を継いで行った、特別なケアを必要とする子どもたちへの献身の内に深く分け入ろうとするならば、治療教育コースという霊的衝動が投げ込まれた「歴史的状況」を考慮に入れなければなりません。特別なケアを必要とする子どもたちの治療を取り巻き、最終的には彼らの殺害へと至ったあの劇的な状況――深まりゆく暗黒――を直視して初めて、私たちは20世紀において人智学が果たした役割を洞察し、ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマンが世界の中でどのような立場にいたのかを理解することができるのです。

この致命的な展開は、ナチスの下で突如始まったのではなく、そこで「頂点に達した」にすぎません。ルドルフ・シュタイナーがその後半生に生を受けた19世紀は、経済的・技術的進歩に偏重した価値観を持つ社会の中で、発達の遅れた子どもたちをますます辺境へと追いやり、彼らに「劣等」な機能的要素という烙印を押し続けていきました。

「すべての精神疾患は脳の病気である」（1845年）というヴィルヘルム・グリージンガーの格言は、人間のあらゆる困難の責任を中枢神経系に帰結させました。1895年、シュタイナーがワイマールでゲーテの遺稿の整理にあたり、ゲーテの霊的な意志を推し進めるために働いていたまさにその時、オーギュスト・フォレルは「社会的・優生学的根拠」に基づく不妊手術を導入し、アルフレート・プレッツは「民族衛生学」の理論を提唱して、奇形児を排除することの可能性と必要性を示唆していました。社会ダーウィニズムが支配的な思考様式となり、アドルフ・ヨストの有名な著書『死への権利（Das Recht auf den Tod）』のように、自殺の権利や安楽死の幇助を繰り返し求める主張が出版されるようになりました。

最初のゲーテアヌムの定礎が行われ、第五福音書についての講義がなされた1913年、フォレルは次のように書いています。

「私たちの意図は、新しい人類、すなわち『超人（Übermensch）』を創り出すことでは決してない。ただ、劣等遺伝子の保持者に恣意的な不妊手術を施すことで、欠陥のある『劣等人間（Untermenschen）』を段階的に排除し、その代わりに、より優れ、より社会的で、より健康的で幸福な人間をより広く繁殖させることにある。」

人智学に基づく最初の医師向け講義コースの最終日であった1920年4月10日、近くのフライブルクでは精神科医のアルフレート・ホッヘが、カール・ビンディングとの共著『生きるに値しない命の処分の解禁（Die

Freigabe der Vernichtung lebensunwerten Lebens）』の序文を執筆していました。そしてついに1924年、ルドルフ・シュタイナーが最後の精力的な講義活動を行った年であり、運命の問いに大いなる光をもたらした「カルマ講義シリーズ」、キリスト教的な治癒への意志を強調した「若い医師たちのためのコース」、そして「障害」を持つ子どもへの無条件の支援に捧げられた「治療教育コース」が行われたその年に、フォレルはライプツィヒで、その内容を如実に物語る『文化への道（Der Weg zur Kultur）』という極めて冷酷な本を出版しました。その中で彼は、とりわけ次のように述べています。

「法律や宗教に支配され、社会衛生学を軽視している医学は、医師に対して、どれほど惨めな生物であっても可能な限り長く生きながらえさせることを要求している。産科医にとって、どんなに悲惨な生物の誕生であってもそれを介助し、生かし続けることは一つの勝利なのだ。医師として私たちは、白痴、狂人、そして生まれながらの犯罪者を、可能な限り長く生かし続けなければならないという不幸な義務を負っている。私たちは、自殺を望む多くの人々がそうするのを阻止することさえ強いられているのだ。」

これらの例だけで確かに十分でしょう。これらは、科学的・社会的思想が当時すでにどのような方向へ向かっていたのか、そしてルドルフ・シュタイナーの人智学がそれに対していかに決定的な対極（文明全体を救い、そして何よりもまず、障害を持つ子どもたちを救い彼らの宿命を守るための、偉大なるミカエル的イニシアチブ）を示していたのかを私たちに伝えてくれます。

またこれらの例は、1925年3月末にルドルフ・シュタイナーが逝去した後、イェーナにいた3人の若い人智学治療教育者が置かれた、ほとんど絶望的とも言える状況を浮き彫りにしています。シュタイナーが誕生したその年に、「治療教育（ Heilpädagogik）」という言葉はウィーン近郊のギオルゲンスとダインハルトによって公にされました。しかし、その言葉に真の中身を吹き込んだのは、生涯の最後の年にあったシュタイナーに他なりません。治療教育コースは次の言葉で締めくくられています。

「親愛なる友人たちよ、これが皆さんに強さと指針を与え、皆さんの意志が正しい方法で働くためのものとなりますように」。

その後、ルドルフ・シュタイナーは亡くなりました。1925年の春、アルブレヒト・シュトローシャイン、フランツ・レフラー、ジークフリート・ピッケルトにとって、状況はほとんど絶望的に思われました。しかしその聖霊降臨祭（ペンテコステ）のとき、彼らはイタ・ヴェークマンに出会い、若い感性によって、それまで他の誰も気づいていなかった深い霊的神秘（「ルドルフ・シュタイナーから注がれる力が、いまこの瞬間、イタ・ヴェークマンの内に、そして彼女を通じて働いている」）を感じ取ったのです。

魂の果実は
私のために熟す

地上のヴィジョン（幻視）を
あなたへと送ることができるとき
霊の内に
過去の存在が
私を包み込む
霊の家の中で。

私には思える
炎の中で
喜びを抱きながら
形を成していくのが

だから魂の手を取るがいい

あなたのものである私の自己が
それをあなたへと差し伸べている

そして私の愛することを成すがいい。
そうすればそれは成されるだろう
まるで私自身の自己が
あなたの歩みを導いたかのように。

1925年の春とその後の数年間、イタ・ヴェークマンにとって事態は決して容易ではありませんでした。彼女は人智学的治療教育を築き上げることを固く決意していましたが、条件は不利なものばかりで、どこを向いても障害にぶつかりました。まず、彼女が頼りにできたのは、経験も訓練も不足した、しかも特に我が強い数人の若者だけでした。財政状況は、当時の政治的・経済的一般状況と同様に暗憺たるものでした。そして、彼女のケアに委ねられた子どもたちは、その発達において最も深刻な制限を抱えていたのです。彼らは「体質的に重い病」（ルドルフ・シュタイナー）を抱え、頻繁にてんかん発作を起こし、言葉を発せず、暴れ回って家具を破壊し、突発的に重病に陥ることもありました。

このような状況におけるヴェークマンのすべての責任と活動に目を向けると、その圧倒的な多様性に驚かされます。ジークフリート・ピッケルトをはじめとする多くの若者たちに対して、彼女は指針と強さを与えました。助言を与え、励まし、助ける一方で、時には戒めることもありました。彼らは結婚したいとき、人間関係が困難になったとき、そして人間的な危機状況が生じるたびに彼女に相談しました。そして、若い治療教育の教師たちが恒常的に過重労働にさらされ、限られた空間で共に働かなければならなかったことを考えれば、そのような危機が頻繁に起きたのも驚くにはあたりません。また、彼らに加わるためにやってきた援助者たちの多くが、彼ら自身も問題を抱え、感情的に不安定で支えを必要としていたという事実も考慮せねばなりません。

ヴェークマンは常に、高い専門的基準を確立し、維持しようと努めました。彼女は養成の問題に責任を持ち、不可欠なケアワーカーたちが受講できるようコースを整えるために全力を尽くしました。彼女は常にアルレスハイムでさまざまなホームのスタッフとなる援助者を見つけ出し、すべての子どもたちに十分な医療ケアが常に保証されるよう最善を尽くしました。同時に、この秘教運動において、全スタッフが共通の課題を遂行する上で互いを結びつけるような精神性を培うことに深く心を砕いていました。このような状況の中で、ヴェークマンは将来的な施設の拡張に関して、またその後、状況がますます危険をはらむようになると、子どもたちやスタッフを保護するために関しても、多くの決定的な判断を下しました。そして、最終的に治療ホームの存続そのものが脅かされたとき、すべての金銭的な不安を背負わなければならなかったのもまた、イタ・ヴェークマンでした。彼女はできる限りの援助をしましたが、あるときマドレーヌ・ヴァン・デフェンターへの手紙にこう書き記しています。

「彼らは皆、心の中で『ヴェークマン博士がお金を見つけてきてくれる（……）』と思っています。そして彼らがそのように考えているために、何の解決策も現れてこないのです。現実とはそういうものです。私の中の声がこう言っています。『私の霊的な援助が、物質的な援助ほどに評価されていないために、私自身も麻痺してしまっているのだ』と。この先どうなっていくのか分かりません。私も、あなたがたの間でこのような生き方をこれ以上続けることはできないと感じています。人々が、物質的な支えというものはアーリマンを克服することからのみ生じるのだということ、あるいは、お金の後ろに精神性が存在できるようアーリマンと結びつく（※正しく制御して扱う）ことからのみ生じるのだということを理解しない限り、そしてすべての援助をただ当然のこととして受け取っている限り、私たちは麻痺したように感じ続けるでしょう。」（1933年5月9日）

「私も、あなたがたの間でこのような生き方をこれ以上続けることはできないと感じています。」――これほどの実務能力や企業家としての手腕を持ちながらも、イタ・ヴェークマンは骨の髄まで精神的な（霊的な）人間でした。彼女の本質は高い精神性にありました。彼女は自らの内に生きる魂の力を知っており、そ

れらの力に対して自分が義務を負っていることを自覚していました。他の人々はそれにまったく、あるいは限られた範囲でしか気づいていませんでしたが、ヴェークマンはそれらを他人に明かさず、自らの心の奥底に秘めていました。時折、何かが表面に浮き上がってきては効果を現すことがありました。特別なケアを必要とする子どもたちは、明らかに彼女を「認識」していたのです。

「彼女の内には、病める者、苦しむ者への大いなる愛が稀に見る直接さをもって生きており、彼女が特別なケアを必要とする子どもたちのホームを歩くとき、彼女の心から放たれる光は、凝固したすべての苦しみや、縛り付けられた罪悪感を瞬時に照らし出しました。お祝いのような厳かな気分がこれらの子どもたちを包みました。それは通常、彼らが深い眠りの中にあり、霊的ヒエラルキーの輝きが彼らの日常の弱さという暗い側面を照らしているときにしか観察できないようなものでした。彼女が子どもたちの間を歩くとき、苦難に抗う奔流が沸き起こって彼らの心を引き上げ、その鈍かった眼差しは焦点を結び、それ自体の輝きを帯びました。まるで、ついに見るに値する何かが彼らの視野に入ってきたかのようでした。治療教育機関への彼女の訪問は、特別な行事として祝福されたのです。」（フランツ・レフラー）

拡大を続ける治療教育運動におけるイタ・ヴェークマンの任務や活動という、これまではどちらかといえば抽象的だった記述に生命を吹き込むために、私たちは今、残されている関連の手紙に目を向けてみたいと思います。各治療ホーム、より正確には様々な場所にいる個人との間で交わされた豊かな書簡が保存されています。特にジークフリート・ピッケルトやフランツ・レフラー、ヴェルナー・パッヘ、フリード・ゴイター、マイケル・ウィルソンとのもの、またハインリヒ・ハルトやエドムント・ドレッバーといった治療教育の現場で働いた医師たちとのもの、そしてアルレスハイムの財務管理者であり、金銭的な破綻を回避するためにヴェークマンによってしばしば派遣されたエーリヒ・キルヒナーとの間で行われた、濃密な文通です。そこからは日々の暮らしの多くの詳細が明らかになるだけでなく、イタ・ヴェークマンが当時の危険な「鉛のような重苦しさ」（シュタイナー）に立ち向かい、時代精神との実存的な闘いに挑んだ、その率直さと勇気も伝わってきます。

まず、国際的な活動家ダニエル・ニコル・ダンロップによって組織され、1928年夏にロンドンの中心部で開催された人智学の大規模なイベント「精神科学とその実践的応用に関する世界会議」への治療教育教師たちの参加をめぐる、フランツ・レフラーとの往復書簡から、小さな、しかし重要な一節を紹介しましょう。この会議には2,000人以上の人々が集まり、社会的・文化的生活における人智学の活動について学びました。イタ・ヴェークマンは当初から、治療教育が個人の参加だけでなく、様々なホームの作業所で作られた作品の展示によっても代表されるべきだと強く主張していました。1928年5月24日、彼女はフランツ・レフラーに次のように書いていました。

「今すぐ始めて、子どもたちが可能な限り最高の成果を上げられるようにしなければなりません。もう今から最良の作品を選び始めてください。（……）ロンドンは私たちにとって計り知れないほど重要です。これが確実に成功するよう、あなたとピッケルトがそこに集中してくださることを切に願っています」

すべての準備が順調に進み、ヴェークマンが満足していた矢先、レフラーはある日、自分は10人（！）もの同僚たちとは異なり、ロンドンへ旅立つことができないと彼女に告げました。彼はその理由を次のように説明しました。

「私としてもぜひ参加したいのですが、親愛なるヴェークマン博士、もし私が少しでも留守にできる身であるなら、イェーナに残ることをお許しいただかなければなりません。私は財政のことも心配なのです。私の下着も衣服も靴も、完全にボロボロです。これまでは即興でなんとかやりくりしてきましたが、復活祭以来、私の工夫も限界を迎えました。『あの』一張羅のシャツは糸くずのようになっており、私たちにはもっとずっと重要なものを買うためにお金が必要なのです」（1928年7月10日）

それが現実でした。レフラーは続けて、次に入ってくる資金を衣服の購入ではなく、色彩療法の構築に使いたいのだと説明しました。鋭い感受性を持つヴェークマンは、フランツ・レフラーがロンドンに行きたが

らないのには、ほかにも理由があるに違いないと行間を読み取りました。彼女は、彼にどうしてもそこにいてほしかったため、この申し出を喜びませんでした。彼女はこの若者がいかに才能豊かで特別な存在であるかを知っていたのです。彼女は、彼の決定を尊重し、本人が適切と思うようにすべきであり、その方が心が落ち着くのであれば家に残るのもよい、と返事を書きました。しかし、スーツが不足しているという点については、次のように付け加えました。

「衣服の問題に関しては、将来的には別の手配をしなければならないでしょう。なぜなら、世界的な運動の一翼を担う者が、公の場に姿を現すことができないというのは、正しいことではないからです」（1928年7月6日）

括弧書きで、彼女はアルレスハイムのクリニックから、中古ではあるもののまだ見栄えのする紳士用スーツを数着彼に提供しました。そして最終的に、フランツ・レフラーは若きカール・ケーニッヒと共にロンドンへと旅立ち、会議に出席しました。この会議は大成功を収めることとなります。

ヴェークマンのリーダーシップのスタイルをよく表している、もう一つの特徴的な短いやり取りが、その数か月後、彼女とジークフリート・ピッケルトの間で交わされました。1928年11月21日、彼女はピッケルトに対し、5週間後に開催されるクリスマス会議の講演者リストに彼の名前を入れたことを、前置きもなく通知しました。さらに、彼が話すべきテーマまで彼女が選んでいたのです。

「さて、今年のクリスマス、あるいはクリスマス直後の12月27日か29日頃に、ここアルレスハイムで再び医学的な集まりを持ちたいと考えており、そこには治療教育の教師たちも出席すべきです。そして私たちは、あなたにドルナッハのゲーテアヌムで会員に向けて講演をしていただきたいのです。私が提案したテーマは『社会生活における治療教育』です。私がこのような決定を下したからといって、どうか怒らないでください。どのようなことを語るべきかについては、書面、あるいは可能であれば対話を通じて、まだお互いの考えを分かち合うことができるでしょう」

イェーナからドルナッハまでは遠い道のりです。ピッケルトにとって仕事を離れるのは難しく、また自分自身を優れた雄弁家だとは到底思えませんでした。それにもかかわらず、彼は即座に同意し、ヴェークマンの手配を受け入れました。その2週間後、彼女は彼から次のような手紙を受け取りました。

「最も畏敬する、親愛なるヴェークマン博士。昨日クリスマス会議のプログラムを受け取ったとき、シューベルト博士と私の二人による治療教育の講演が二つもあるのは、いささか多すぎるのではないかと思わずにはいられませんでした。どのように手配されているのか分かりかねますので、私は自分の講演を喜んで取り下げ、別の機会に回したいとお伝えしておきます。単にそのように手配されたからという理由だけで講演をしたくはありません。それが本当に求められ、必要とされるときにだけ行いたいのです」（1928年12月5日）

しかし、ジークフリート・ピッケルトがヴェークマンの計画からそう簡単に逃れることはできませんでした。彼はすぐに彼女からの返信を受け取ることになります。

「親愛なるピッケルト氏！ ロンドンから戻ると、クリスマスに講演を取り下げるべきかどうかを尋ねるあなたからの手紙を見つけました。今日、少なくとも短いメッセージを書いてお伝えしたいのは、そのようなことは論外であり、たとえシューベルト博士もお話しになるとしても、あなたは講演をしなければならないということです。あなたはただ、より『社会的』な側面に集中すればよいのです」（1928年12月18日）87

そして、実際にその通りになった。

ヴェークマンは、若い同僚たちに時に困難な課題を突発的に割り当てる一方で、その優れた教育的感受性をもって、彼らの置かれた状況や精神的な成長にも個人的な関心を寄せていました。数か月後、彼女がヴェルナー・パッヘに宛てた手紙には次のように書かれています。

「お元気でお過ごしですか？ 親愛なるパッヘ氏、あなたが眠れずにいて、霊的な仕事をするための心の平穏を欠いていると知り、大変深く憂慮しています（……）。これは重大な問題です。なぜなら、熱烈な内面の準備なしに講演を行うことなど不可能だからです。実を言うと、シュタイナー博士はすべての若者に対し、ある一定の年齢に達するまでは公の場で話すことを禁じておられました。お互いに語り合ってはならないという意味ではありません。公の場での講演は、もっと後になって、しかるべき年齢に達してから行うべきだということです。現在の状況下でこの法則が破られざるを得ないのは当然のことです。いまや、あらゆる物事が昔よりもはるかに速く進んでいます。それでも私は、あなたに少し慎重になるよう警告せずにはいられません。健康は簡単に損なわれてしまうものであり、そうなれば多くの貴重な時間が失われてしまうのですから」

彼女は、自分が考えていることを穏やかに、しかし明確に彼に伝えました。イタ・ヴェークマンが他人の感情を傷つけることはめったに、あるいは一度もありませんでしたが、責任ある立場の同僚たちの間に霊的な逸脱を見出したときには、鋭く明白に意見を述べることができました。ある年のクリスマス、彼女はアルブレヒト・シュトローシャインに次のような手紙を送っています。

「あなたがこちら（アルレスハイム）へ来て、私とお話しする機会を持つ前に、あらかじめ次のことを伝えておきたいと思います。カルマや過去世にまつわる事柄が、これほど真摯さを欠いた形で扱われていると聞き、私は大変悲しく思いました。これらの問いに関心を持つことは確かに重要です。しかし同時に、これらの事柄が十分に重く受け止められない場合、計り知れない危険をはらむことになります。単なる推測にすぎない段階で、受肉について語ることは不可能です。そして、それが霊的な現実に合致しているとシュタイナー博士によって確認されていない限り、それらは『常に』推測にすぎないのです。誤りなくこれを行うことができたのは、シュタイナー博士だけであったと私は繰り返します。この場合、知識だけでは十分ではありません。適切な年月を重ねること、そして相応しい態度を持つこともまた必要なのです。したがって、そのような推測をあたかも事実であるかのように語ることは、信じがたいほど不遜なことです。

私の意図を正しく理解してください。自分自身の推測は、あなた自身の内なる洞察にとっては計り知れないほど実り豊かなものになり得ますし、他者を理解する上でも有益です。しかし、それらを決して事実として提示してはなりません。また、他者と軽々しく話し合うようなことがあってもなりません。

ですから、ご自身の個性に関するあなた自身の予感は、どうか胸の内に秘めておいてください。さもなければ、それらは信じがたい混乱を引き起こす原因になります。また、現在行われているような方法に対して、私がすべて同意しているかのような印象を周囲に与えないでほしいのです。あなたもよくご存知の通り、私は前進すること、それも情熱的に進むことには大賛成です。しかし、前進する中で陥りがちなことですが、この点において人々が道を見失うときには、私は極めて厳格になります。

どうか誤解しないでください。私の意図は、単に、そうしなければ私たちが陥ってしまうかもしれない危険を未然に防ぐことにあります。そして、親愛なるシュトローシャイン氏、あなたこそは、私がその良識と責任感に訴えかけることのできる人物に他なりません。なぜなら、もしあなたの予感が正しいものであるならば、あなたには良識と責任感が備わっているはずだからです。

私は、ラウエンシュタインで過ごすことを許されたあの日のことを、しばしば喜びとともに振り返っています。私があなたの取り組みと活動を全面的に支持していることを、どうぞ確信していてください」
（1925年12月16日）

私たちがこの手紙を読むとき、イタ・ヴェークマンにとってこの治療教育教師たちの小さなグループは、将来的な可能性を秘めた「世界運動」への責任を背負った存在であり、彼女が彼らをそのように扱っていたということを心に留めておかなければなりません。彼女は彼ら一人ひとりに細心の注意を払いました。なぜなら、彼らこそが世界的な文化更新の先駆者になり得ると望み、またそれが可能だと信じていたからです。この理由から、彼らは人智学的精神科学における精神性（霊性）をどのように扱うかに関して、特に大きな責任を負っていました。イタ・ヴェークマンはこの責任感を絶えず彼らに意識させ、新たに鼓舞しようと努めたのです。

ヴェークマンは、この発展途上にある治療教育コミュニティの精神的な中心にいました。多くの事柄が彼女の「内なる存在」と結びついていました。彼女は本当に自分自身を治療教育教師のグループの一員であると感じており、活動について語るときは、決して二人称（あなたがた）ではなく、常に一人称（私たち）を用いました。このより広い社会的プロセスのなかで、彼女は「仲裁人」の役を演じることを断固として拒みました。責任あるスタッフの間で危機的な状況が生じ、「裁定」を求められたとき、彼女はそうした解決の可能性すら頭から否定し、人々を彼ら自身の判断力と社会的なスキルへと立ち返らせたのです。

「ほかに選択肢はありません。なぜなら、何か不都合なことが起きたときに施設長や教師を解任し、他の誰かに交代させるような他の機関と同じやり方を、ここでとるわけにはいかないからです。それは罰になりますが、もしそんなことをすれば、私は自分自身を罰することになってしまいます。ですから、コミュニティとして間違いを背負い、コミュニティとして再びそれを正すよう努める以外に道はないのです」
（ハインリヒ・ハルトへの手紙、1931年1月6日）

自由な意志のもと、ミカエルの名において結ばれた人間による治療教育の世界運動を組織するという大局的な意図（「人間がミカエルに仕える覚悟を持つならば、能動的に彼に近づかなければなりません。受動的で、敬虔で、従順であることによってミカエルに到達することはできません。私たちがミカエルに到達するのは、霊的領域へと能動的に参入することによってなのです。人は自由のうちに、志を同じくする人間と結びつくのです」）に違わず、ヴェークマンはルドルフ・シュタイナーの逝去後まもなく、イェーナに設立されたホームを確固たるものにし、そこの人々を団結させようと試みました。数年後、彼女はラウエンシュタインの購入を再び力強く主張しました。そこは当時、所有者による立ち退き要求訴訟のために閉鎖寸前に追い込まれていた場所でした。イタ・ヴェークマンにとってそこは、「かつてルドルフ・シュタイナーが滞在した」神聖な土地であり続けたのです（ハインリヒ・ハルトへの手紙、1929年12月31日）。

1929年7月、彼女はジークフリート・ピッケルトに対し、当時の状況を踏まえて率直に次のように書き送りました。

「できるだけ早くラウエンシュタインの購入に着手することを強くお勧めします。これは成功させなければなりません。なぜラウエンシュタインの購入が不可能なのか、私には理解できません。土地を買い、すぐに建設を始めるのです。それを可能にするために、あなたの力でできる限りのことをしてください。あなたや他の多くの人々は、その気になればどこででも融資を受ける資格を得られるはずです。私たちには、イェーナのラウエンシュタインに、正しい方法で治療活動を継続できる治療ホームが必要なのです。例えば、フーゼマンが、ラウエンシュタインの子どもの家よりも確実に費用がかかる大きな療養所の建設のために十分な資金を集めることができるというのに、なぜあなたが正しい方法で施設を建てられないのか分かりません。フーゼマンは十分な資金が集まるまで休みませんでした。あなたも同じようにしなければなりません。これ以上待つことはできません。行動を起こさずに過ぎ去る毎日は失われた一日であり、現時点で私たちが実行すべきことを実践できなければ、重要なことは何も起こらなくなってしまうでしょう」（1929年7月5日）

同時に、イタ・ヴェークマンは治療教育教師のグループを一つにまとめようと最善を尽くしていましたが、彼らの間では摩擦の兆候がますます顕著になっていました。彼女は困難な状況において、一時的な離別を勧めることもありました（1926年にシュトローシャインを一時的にブレスラウ［現在のヴロツワフ］へ移したように）。

しかし、長期的な視点では、人々は共に働き続けるべきだと強く感じていました。1927年7月、彼女はフランツ・レフラーへの手紙にこう書いています。

「私はシュトローシャインに独自の道を歩んでほしくはありません。博士が常に思い描いていた方法で、あなたがたは共に留まるべきなのです」（1927年7月18日）

イタ・ヴェークマンにとって、グループの分裂のプロセスを食い止めることは不可能でした。しかし、この分裂は、活動のイニシアチブを各地へ広げるという肯定的な効果をもたらすことにもなりました。1928年、1929年、1931年、1932年に、ピルグリムスハイン（シュトローシャイン）、ゲルスヴァルデ（レフラー）、ハムボルン（ピッケルト）、そしてアルテフェルト（ハルト）に、それぞれ独立した治療教育センターが設立されたのです。しばらくの間、ヴェークマンはこの進展、あるいはその特定の側面に強く反対し続けました。ハインリヒ・ハルトが、彼女の反対投票にもかかわらずアルテフェルトを開設する計画を推し進めたとき、彼女は1932年2月15日に彼へ次のような手紙を送っています。

「私が心を痛めているのは、誰もが全体の目的ではなく、自分自身の関心事（利益）ばかりを考えていることに、突然気づかされる点です。私は、ハムボルンの全所領の購入が誘惑であったのと同様に、アルテフェルトもまた一つの誘惑であると捉えています。若者たちがハムボルンを購入したがったときにも私は警告しましたが、彼らはそれが正しいことだと確信して購入に踏み切りました。私は同じ内なる確信を持って、アルテフェルトは不適切であると言います。しかし、彼らがそうしたように、あなたもまた、この行動が私にどのような深刻な結果をもたらすかを顧みることなく、自らの計画を進めるのでしょう」

「私への結果」とは、イタ・ヴェークマンは何を意味していたのでしょうか。この言葉を読んだ人々は、それをどのように理解できたのでしょうか。それは「単に」、こうした周辺部への拡張によって、ドルナッハの理事会（Vorstand）との間でヴェークマンが抱える困難が増大すること、あるいは、彼女が背負う財政的な全体責任が持ちこたえられないレベルにまで膨れ上がることを意味していたのでしょうか。

歴史的な全体像を見渡し、ハインリヒ・ハルトのような文通相手にはアクセスできなかった彼女の遺品の膨大な文書への洞察を持つ私たちは、イタ・ヴェークマンがより深い霊的な次元（「私も、あなたがたの間でこのような生き方をこれ以上続けることはできないと感じています」）をほのめかそうとしていたのではないか、という印象を抱きます。それは、ルドルフ・シュタイナーや大天使ミカエルと結びついた、彼女の存在と活動の霊的な側面であり、霊的な発展が正しい方法で継続されるためには、彼女が常に考慮に入れ、内包していなければならないものでした。

ヴェークマンは自らの意図を理解してもらうことができたのでしょうか。彼女はそれを望み、また表現することを許されていたのでしょうか。あるいは、自分と結びつき、出会い、共に働く人々が、この次元に目覚めてくれることを彼女もまた望まざるを得なかったのでしょうか。これらは、私たちが今日、自らに問いかけることができ、また問いかけねばならない問題です。当時の治療教育教師たちも、これらの問いを抱いたのでしょうか。感受性豊かなハインリヒ・ハルトは、ヴェークマンの手紙を読んだとき、何を思ったのでしょうか。

ヴェークマンは人々に結束を強く求め、「本質的なのは個々の場所ではなく、共に働くグループである」と、あるとき断固として宣言したものの、将来の治療ホームのために選ばれた場所や、すでに獲得された場所を徹底的に視察しました。彼女にとって、それらの土地は単に経済的・実務的な価値で判断されるべき、売りに出された物件ではありませんでした。彼女はそれらを歴史的な発展として、したがって、霊的な文化伝統の中に位置づけられ、今や新しいキリストの神秘から生じる癒やしの活動の場を提供する、本質的な現実として見ていたのです。あるとき、深刻な財政危機の最中に、彼女はハムボルンについてフランツ・レフラーに次のように書き送っています。

「前回の訪問の後、私はトイトブルクの森のこの特定の地域が、私たちにとっていかに計り知れないほど重要であるかを、改めて繰り返さなければなりません。もし私たちがこれを乗り切ることができず、ハムボルンの霊的な宿命が果たされないままで終わるなら、それは深刻な後退を意味することになるでしょう」（1932年1月25日）

ハインリヒ・ハルトとともにアルテフェルトを視察した後に彼女が記した、驚くほど思慮深い報告書は、イタ・ヴェークマンがどのような探求の眼差しをもって風景のなかを歩いたか、その存在感の濃密さを明かすと同時に、大気の質に対する自らの感受性への慎重さも物語っています。

「アルテフェルトに上って以来、私は心の中でその風景や地域全体を何度も思い返し、追体験し続けています。そこは美しい場所でしたが、より高い場所はかなり寒く、吹きさらしで孤独な印象を受けました。もちろん、1〜2時間の短い訪問では、その地域について決定的な判断を下すには不十分です。そこへの移転を決める前に、あらゆることを徹底的に調査すること、さらにはもう一度赴いて1〜2日滞在してみることを強くお勧めします。
また、そこで以前に馬の繁殖が行われていたという事実にも、私は完全に安心しているわけではありません。私の思い違いかもしれませんが、そこにはまだ『動物的なアストラル体』が感じられるように思えたのです（私が間違っている可能性もあるので、この点に固執するつもりはありません）。ハムボルンは霧が深く、アルテフェルトには霧がなかったものの、ハムボルンの方がより風雨から守られているという印象を抱きました。現時点でどのような助言をすべきかまだ分からないため、あなたの決断を先んじるつもりはありません。私はただ、くれぐれも慎重になるよう警告することしかできないのです」（1932年2月9日）

この状況における彼女の並外れた慎重さがどれほど賢明であったかを理解するには、これらの場所が、様々な困難のために柔軟な適応が難しく、移動も容易ではない子どもたちの「日々の環境」になる予定だったということを念頭に置く必要があります。また、子どもたちが自分を取り巻く環境や日々の生活をどのように体験するかが、彼らの宿命（カルマ）に深く刻み込まれることになるため、ヴェークマンにとってそれがどれほど計り知れない重要性を持っていたかをも考慮しなければなりません。

それにもかかわらず、ハインリヒ・ハルトが彼女の異議を押し切ってイェーナを去りアルテフェルトへ行くことを決断したとき、ヴェークマンは何のわだかまりもなく彼を支え続けました。彼女は決して根に持つような人間ではなく、自らと結ばれた友人たちが勇気をもって課題に取り組み、自らの宿命的な使命を果たすために人生を捧げるのであれば、どこまでも誠実に彼らの味方であり続けたのです。

しかしその一方で、ヴェークマンは時期尚早とみなしたいくつかの拡張の試みを制止しました。

「さもなければ、私たちは非常に多くの困難や懸念を抱え込むことになり、私たちの霊的な活動を十分に深めるための可能性が失われてしまうでしょう。この深化こそが、こうした事柄を成功させるためにも重要なのです」（1929年2月25日、ヴァルター・パッヘへの手紙）。

早くも1929年から1930年にかけてプラハで治療教育を築こうと考えていたカール・ケーニッヒに対しても、彼女は「治療教育の活動を担うことのできるスタッフが十分にいない」という理由から、強い留保（懸念）を表明しました。彼女はさらにこう書き記しています。

「さもなければ、私たちはシュタイナー博士が思い描いていたような方法で物事を成し遂げることが本当にできなくなってしまいます。（……）結果として、大きな『浅薄さ』を招くことになりかねず、私はその責任を負いたくありません。当面の間、正しい方法で十分な人々が養成されるまでは、新しい施設の設立を考えてはならないのです。正しい人材はどこでも不足しています」（1930年1月6日）

したがって、イタ・ヴェークマンは、能力と霊的な勇気を持つ数少ない「正しい人材」が、別々の場所やホームで働くために去ろうとする頻度がますます高まっていたとき、彼らに共にとどまるよう説得を試みました。彼女の願いは、治療教育に携わる人々が「無条件の連帯感」を育み、個々の治療センターが互いに助け合い、自分たちを一つの場所であるとみなすことでした。

エドムント・ドレッバーが、ゲルスヴァルデにおける極めて困難な人事・財政状況について再び絶望的な手紙を寄せてきたとき、彼女は彼を支えるために次のような言葉を送りました。

「あなたが私の手紙を受け取る前に、私の方へ返書が届きました。あなたが描写された状況について、私は大変心を痛めています。しかし、私たちは状況を改善するために本当に真剣な措置を講じなければなりません。治療ホーム同士が互いに助け合えるかどうかが、今まさに試されています。あなたにとって何が助けになるでしょうか。何よりもまずお金でしょうか。残念ながら、それは私たちのだれも持ち合わせていないものです。

アマーシュレーガー夫人が倒れてしまわないよう、私たちのところ、あるいは他のホームのどこかから、仕事をこなせる人間を一人派遣することはできないでしょうか。ピルグリムスハインから来られる人はだれもいませんか？ そして、ゲルスヴァルデを助けるために、ピルグリムスハインがその費用を負担することはできないでしょうか。ぜひそれを掛け合ってみてください。私からもこちらから手紙を書きます。

それから、あなたのスタッフの1〜2人が、私たちの費用負担でこちら（アルレスハイム）へ来て静養することも可能であるべきです。あるいは、ここへ来るのは距離が遠く費用がかかるため、同じ資金を使って彼らをハムボルンへ送り、その費用を私たちが支払うという形でも構いません。11月末に私がベルリンへ赴く際には、必ずゲルスヴァルデを訪れ、あなたとともに状況を徹底的に見極めるとともに、特に援助者たちと話をして、彼らが今まさに必要としている勇気を与えたいと思います。

なぜなら、人々はどこに向かえばよいのか分からず、また、今の時代に感覚世界だけでなく霊的（精神的）にも何かを成し遂げるために不可欠な、あの『切実な連帯感』を本当の意味で持てずにいるからです。人々は『境界の体験』をしていながら、それを自分たちの意識の中へと完全に引き上げることができず、それが彼らの魂にこのような重苦しさをもたらしているのです」（1932年11月9日）

イタ・ヴェークマンにとって何よりも重要だったのは、この「霊的な連帯感」でした。なぜなら、それこそが社会的な調和や友愛を可能にするものであり、実際、この二つはどちらが欠けても成り立たないものだったからです。ヴェークマンはこの精神性に関して、徹底して実践的でした。彼女は治療教育センターに高次精神科学学校の講義や日曜礼拝を導入し、定期的にスタッフを自らのクリニックに招待して、一年の主要な霊的祝祭を共に祝うための作業を行いました。彼女は、外的な活動が霊的な活動にあまりにも干渉しそうになると強く反発し、アルレスハイムに参集できない人々に対しても、その祝祭の営みを自らの意識の中に携えておくよう要求することさえしたのです。

「ドレッバーから今日電報があり、移転が金曜日に行われるとのことでした。私は少なからずショックを受けました。なぜなら金曜日からは会議が始まるのであり、会議の開始時に移転作業を始めるのは正しいことではないからです。あなたがたは皆、会議を共に支えるために、自らの心と思考のすべてをここに集中させなければなりません。まさにその日に移転を行うようでは、正しい効果をもたらすことなどできないのです」（1929年11月19日）

ルドルフ・シュタイナーが医学セクションの指導者としてイタ・ヴェークマンの手に委ねた、この秘教的な治療教育運動を真に統合していた要素は、ヴェークマンの「内なる存在」と深く結びついていました。彼女はこの「内なる存在」から、しばしば出来事の経過に介入したのです。

フリード・ゴイター、より正確には、彼のイギリスにおける治療教育センターに宛てられたいくつかの手紙が、そのことを非常に明確に示しています。ヴェークマンはゴイターに対して極めて率直でした。そこでの進展が行き詰まり、次のステップを検討するための委員会が設立されたとき、彼女は次のように書き送っています。

「率直に言って、この委員会が介入してくることに私は本物の恐怖を抱いています。なぜなら彼らは、霊的に何が必要であるかについて、正しい理解を持ち合わせていないかもしれないからです。私たちはホレ（Holle）でも、ゾネンホフでも、どこでも同じ困難に直面してきました。シュトゥットガルトの小さな家でもそうでした。しかし、私たちはこれらすべての場所で困難を克服することができました。なぜなら、私たちは常に『霊的な必要性』を第一に置いたからです。

そして、勇気を奮い起こし、これらの事柄を押し進めるに足る断固とした態度をとれるのは自分しかいないということを、私はよく知っています。他人に委ねることは、これまで一度も役に立ちませんでした。（……）重要なことが懸かっているのです。このような状況において、私はすべての個人的な事柄を脇に置いてきました。ですから、手紙の中に『あれこれのことで博士を煩わせたくない』などと書いてはなりません。それは私個人には何の影響もないからです。しかし、もしこの活動が停滞するようなことがあれば、ミカエルの意図が妨げられることになってしまいます。

現時点で、どのような結果が生じるかを予測することはできません。私の中にただ明確にある感覚は、皆で協力し（……）、なされるべき仕事を成し遂げるということです。（……）あなたが現時点で私を完全には理解できないかもしれないということは分かっています。しかし私にとって、いまこの瞬間重要なのは、霊的世界の意図に関して何かが成されるということなのです。閉鎖することや、より良い機会を待つということは、私にとって受け入れられる選択肢ではないことを理解してください。それは霊的に受け入れられないのです。もし委員会が異なる決定を下すのであれば、私は自ら行動を起こし、彼らの決定を覆す（拒否権を発動する）つもりです（……）」（1930年6月5日）

ルドルフ・シュタイナーは、戦後の1919年のミカエル祭に、次のような詩を書き残していました。

勝利せる霊よ
我らの弱き
躊躇（ためら）う魂の内に燃え上がれ。

あらゆるエゴイズムを焼き尽くし、
慈愛の念いに火を灯せ
人類のための命の川たる無私が、
霊の内に新しく生まれ変わるための
源泉（みなもと）となるように。

「……それは私個人には何の影響もないからです。しかし、もしこの活動が停滞するようなことがあれば、ミカエルの意図が妨げられることになってしまいます。（……）あなたが現時点で私を完全には理解できないかもしれないということは分かっています（……）」

「今重要なのは、現在起きている事柄についてより深い理解を持ち、私たちの内から、そして私の活動から生じる何かを、それらに対置させる必要があることを見抜ける人々を見出すことです。私はこれらのことをあまりにも頻繁に口にしてきたため、それについて言及し続けることは、もはやほとんど不可能に思えるほどです。（……）これらすべての事柄において、私はただ強く感じています。全員で最後の努力を払って乗り切るか、さもなければ、ルドルフ・シュタイナーが私たちに委ねてくださった課題において、私たちが失敗したことを認めざるを得なくなるか、そのどちらかであると。それは活動を続けられないという意味ではありません。いつでも活動することはできます。しかし、大義全体の方向性が変わり、本来発展すべきであった形とは異なる形で発展していくことになるでしょう」（1932年3月1日）

1932年、活動を継続する力を彼女に与えてくれたギリシャの神秘神殿跡への旅を終えた後、イタ・ヴェークマンはイギリスのゴイターに再び手紙を書きました。

「あの素晴らしい古代の環境は私にとって不老不死の霊薬のようでした。私は新しく生まれ変わったように感じており、ルドルフ・シュタイナーの活動を、私の心に刻まれている方法で継続するに足る強さと決意を抱いています。そして、皆さんが助けてくれるなら、ルドルフ・シュタイナーの意図のうち、私自身、私の個体性とも結びついているあの部分を、少なくとも私たちの全力を尽くして、あるいは未来のために必要な限り、確実に遂行することができるでしょう。

今世、そして前世における私たちの取り組みには、どこか深く悲劇的なものがあります。それでもかつて、ルドルフ・シュタイナーは私に、この悲劇は将来解決される、いや、すでに今この瞬間にも解決されているの

だと言ってくださいました。それなのに、すべてはかつて起きたのと同じように起こり得るのです！ 私たちには理解する人々、カルマがどのように働くかを理解する人々が必要なのだと、私は考えています」

イタ・ヴェークマンは、いかなる手紙においてもセクション指導者としての自らの権威に言及することはありませんでした。特定の点を強調したい、あるいは強調する必要がある場合、彼女はルドルフ・シュタイナーとの真の結びつきや、ミカエルの神秘とのつながり（「それは私とも結びついているのです」）を、文通相手にそっと思い出させたのです。私たちは、イタ・ヴェークマンが決定を下す際、常にこれらのより深い層から行動し、あるいは行動しようと努めていたという印象を抱きます。彼女は自らの「内なる存在」においてルドルフ・シュタイナーと結びついていると感じており、シュタイナーの霊的な意図から活動を続けました。

魂の果実は
私のために熟す
地上のヴィジョン（幻視）を
あなたへと送ることができるとき
霊の内に。

過去の存在が——
私には思える
炎の中で
喜びを抱きながら
形を成していくのが
霊の家の中で
私を包み込むために。

だから魂の手を取るがいい
あなたのものである私の自己が
それをあなたへと差し伸べている
そして私の愛することを成すがいい
そうすればそれは成されるだろう
まるで私自身の自己が
あなたの歩みを導いたかのように。

優れた歴史的意識と世界情勢への鋭い警戒心を持っていたイタ・ヴェークマンは、極めて早い段階で国家社会主義（ナチズム）とファシズムの脅威および台頭を予見していました。そのため彼女は、1930年代の初頭にはすでに、すべての人智学活動とは言わないまでも、治療教育運動をイギリスへ移転させることを計画していました。当時、彼女自身もイギリスに移住することを計画していました。そこからの方がより良く活動できると考えたからです。早くも1931年に、彼女はフリード・ゴイターに次のように書いていました。

「ドイツの崩壊（これは私の目には時間の問題にすぎませんが）にもかかわらず、私たちがスイスから西側とのつながりを維持できるなら、将来のために人智学の種子を救うことができるかもしれませんし、その時にはドイツを助けることさえできるかもしれません。現在の人智学協会が、今のドイツで多くを達成できるとは思いません。完全な政治的・経済的崩壊が訪れるでしょう。これらすべては私たちにとって計り知れないほど苦痛であり、その結果として、私たち自身が非常に困難な経済状況に置かれるかもしれないという意味でも、特に苦痛です。

イギリスからの援助も得られるよう、イギリスに病院を設立しようという私の取り組みはまだ成功しておらず、おそらく今はもう遅すぎるのでしょう。私たちは常に、あらゆることにおいて遅すぎるのです。それでも、西側との連絡を保つよう努めましょう。すべてが計画通りに進めば、私は10月にバーミンガムに本部を置き、そこから何か行動を起こせるようにするつもりです」

1931年以降、彼女の手紙の中には、治療ホームを表現するために「島々（islands）」という言葉がますます頻繁に見られるようになります。ヴェークマンがこれらの島々を強化したいと考えたのは、そこに、中央ヨーロッパ文明全体の持続的な存在、そして将来的に必要となるであろう再建のための保証を見出していたからでした。例えば、ハムボルンの購入が確定した直後の1931年9月に書かれた手紙には、次のようにあります。

「私たちは（……）凄まじいほどの努力を重ねなければなりません。それによって私たちの施設が、前途に横たわる新しい困難な時代において、私たちが新しい未来を築き上げるための『正しい場所』となるよう、強烈に努めることができるように。博士はそれらを『島々』と呼ばれました。これらの島々を築き上げ、強化することが私の取り組みなのです」（1931年9月16日）

1932年11月、彼女はこのことについてヴァルター・パッヘに書き送っています。彼とは早くも1931年の時点で、戦争と荒廃についての予感を共有していました。

「私たちを取り巻く世界に、果たして何かしらの影響を与えることが可能なのだろうかと、私も自問することがあります。私にとっては、私たちの施設が経済的に健全であるよう努めることが、常に最善の道であるように思われます。そうしてこそ、施設は内側から活気ある霊的な生活を展開することができるからです。私は、人々が馬車を使ってある場所から別の場所へと移動しているイメージを抱き続けています。本当にそうなるのか、あるいは、まだ世界に影響を与えることが可能なのかは分かりません。私は、すべての施設が『精神的な避難所』となることを望んでいます。世界があまりにも悪くなったとき、人々がそこへ退くことができ、そこで働くことができ、そしてその活動が人々へ、あるいは霊的世界へと還元されるような場所です。治癒は、そのようなセンターから生じなければならないでしょう。私たち自身が、まず自分自身の内からこの治癒のプロセスを始める強さを持てますように」

1933年の初頭、イタ・ヴェークマンはドイツから子どもたち、特にユダヤ系の血を引く子どもたちを避難させる計画を立てており、この取り組みへの支持を医学界の同僚たちに取り付けようと努めていました。彼女はイギリスの同僚たちとドイツからの難民を支援する計画を練る一方で、ドイツ国内で「障害」を持つ子どもたちを脅かしていた不妊手術法（遺伝病子孫防止法）を回避するため、まずは治療教育の教師たちと戦略を話し合いました。同時に彼女は、治療教育センターをできるだけ長く存続させるため、それらの施設があたかも「一般的な病院」であるかのように見せるための最善を尽くしたのです。

ヒトラーが権力を掌握して間もない1933年2月5日、彼女は当時ハムボルンにいたエーリヒ・キルヒナーに次のように書いています。

「ドイツにおいては、将来に備えて養護ホームを築き上げ、それらを強固なものにする以外に選択肢はありません。なぜなら、それらの場所が最終的に唯一の教育の場となるかもしれないからです。また、私たちはすべての外見を『医療的』なものにしておかなければなりません。教育的なものがすでに統制されている場所であっても、医療的なものであれば確実にまだ容認されるからです。（……）ヒトラーが権力に就いたのは最悪の事態ですが、今となっては私たちにできることは何もありません。私たちが弱すぎたのであり、その代償を支払わなければならないのです。（……）しかし、もしかしたらあなたがたは皆、ヒトラーの崇拝者になってしまい、この点においても私は孤立しているのでしょうか。誰に分かるというのでしょう？」

イタ・ヴェークマンが多くの点において深く孤立していたのは確かですが、国家社会主義者（ナチス）に対する態度に関する限り、治療教育センターの大部分は足並みを揃えていました。わずか10日後にアルレスハイムに届いたヴェルナー・パッヘの言葉は、キルヒナーへの手紙の最後にあるヴェークマンの問いに対する答えとなっています。パッヘは次のように記していました。

「イギリスからの帰り道にハムボルンへお立ち寄りいただき、ここで高次精神科学学校の講義（クラス・レッスン）を行ってくださるよう、改めてお願い申し上げます。私は二日前、ベルリンのヴィッテンベルク広場に

立っていました。他の多くの公共の場所と同様に、そこでもヒトラーの演説が拡声器で放送されており、アーリマンの力は圧倒的なほどでした。その時、突如として静けさと確信の念が私を包み込み、その感覚があまりにも強かったため、私は突然この悪しき力の呪縛から解き放たれたのです。私たちの目的は決して失敗しないという強い実感を抱きました」

ナチスからのさらなる防衛策として、イタ・ヴェークマンは個々の施設に対してより大きな自治権を導入しました。これには、すべての文通を削減、あるいは中止することも含まれていました（「現在、私の手紙はしばしば開封されています」）。同時に彼女は、関わるすべての人々の精神的な結びつきを絶えず強化しようと努めました。

「このような時代だからこそ、私たちが良好な関係を保つことが極めて重要なのです。少なくとも、私たちの関係が根底において真実であり、善良であること、そして、時に誤解が生じるようなことがあっても、それは私たちの最も内なる本質とは何の関係もないのだということを、私たちは知っていなければなりません」（ハインリヒ・ハルトへの手紙、1933年5月12日）

その二か月前、ヴェークマンはすでにイギリスの同僚であるゴイターとウィルソンに対しても、これと同様の趣旨の言葉を書き送っていました。

「ドイツの状況は深刻であり、私たちがこれらの事柄について常に情報を得ていること、また、現在の困難な状況の中で支援を切実に必要としている友人たちに支えの思いを送ることが非常に重要です。すべての施設がこれまで享受してきた自由を維持できるようにするため、私たちの前には重大な闘いが横たわっています。そして、あなたがた二人が自らの思考を私たちの活動と結びつけ、その思考を運動全体に向け続けてくださるよう、心から改めてお願い申し上げます。なぜなら、イギリスから私たちへと至るひとつの『連帯』としてのみ、私たちは医学と治療教育における自らの課題を担い、果たすことができるからです」（1933年3月7日）

ドイツの一部の人間が「熱心に、かつ日和見主義的に」ナチス党に入党していく一方で、イタ・ヴェークマンはますます差し迫ってくる諸問題の解決策を求めて、一貫してイギリスに目を向け続けました。彼女はそこ、そして後にはアメリカにも、人智学が育まれ、その生存が保証されるような新しい故郷を創り出したいと考えていたのです。

「これらすべての事柄にいかに立ち向かうべきかは、私にとって今なお大きな問いですが、私の中には常に同じ答えが返ってきます。それは、ドイツの友人たちの間に強固な内なる防衛線を築き上げること、そして国外に、多くの人々が参加できるような力強い人智学運動を可能な限り確立することです」（1933年6月22日、フリード・ゴイターへの手紙）

その二週間後、彼女は別の手紙の中で、ドルナッハにおける受動性や内紛にも言及しながら、さらに強調して次のように記しています。

「人智学が妥協を排して新しい生命へと向かうことができるよう、私たちはイギリスに強固で信頼できるセンターを築くために全力を尽くさねばならないという印象を抱いています。いたるところで支配的になりつつあるナショナリズム（国家主義）の精神を克服するためには、どこからかミカエルの衝動が沸き起こらねばなりません。このミカエルの衝動は、ここドルナッハから放射されるはずのものでしたが、現在の私に見える限りでは、ここにそのための場所はありません。したがって、私たち、あるいは少なくとも私は、別の場所でミカエルの衝動を再び燃え立たせるよう試みなければならないのです」（1933年7月9日）

1933年を通じて、それ以前の数年間と同様に、イタ・ヴェークマンは数多くの失敗や失望を経験したにもかかわらず、イギリスにおける活動展開の計画を決して手放しませんでした。彼女は何度もイギリスへ旅立ち、あらゆる種類の人々やグループに自分の実存的な意図への関心を呼び起こそうと試みましたが、その大

部分は不成功に終わりました。1933年の暮れ、またしてもイギリスへの旅から戻った後、彼女は現状を総括しました。そしてクリスマスの時期に、フリード・ゴイターに宛てて極めて注目すべき手紙を書き送ったのです。

「イギリスからオランダを経てドイツへと戻り、ケルンから車でハムボルン地方へと向かったとき、私はこの地域を覆っている『魂に満ちた空気』に圧倒されました。イギリスからこのドイツの風景の中に到着したことは、完全に新しい体験でした。かつてはいつもオランダで旅を中断することに慣れていたため、当時これほど強くそれを体験することはなかったのかもしれません。

同時に私は、この魂の豊かさ――人間がそれを自らの内に携えているからこそ、いたるところに存在しているのであり、さもなければ大気の中に存在し得ないもの――が、確実に段階的に絞め殺されていくだろうということに気づきました。権力者たちは、ドイツ人の大多数から魂を追い出すためにできる限りのことをするでしょう。そしていつの日か――かつてコンスタンティノープル公会議で霊が否定されたのと同じように――ドイツでは魂が否定されることになるでしょう。私たちはそのような時代から遠く離れてはいません。各治療教育施設もまた、この魂豊かな光景を伝えていました。

それらの施設は、以前よりはるかに自分たちだけの力に委ねられていました。彼らの精神性と強く結びついた、共に活動を続けていこうという願いが明らかに見て取れました。人々もまた、数か月前よりも思慮深く、そして強くなっていました。時間が足りなかったためアルテフェルトを訪れることはできませんでしたが、彼らの共同作業者の何人かがハムボルンにやってきました。それから私はハムボルンからゲルスヴァルデへと旅を続けましたが、そこでも同じ雰囲気を見出しました。レフラーは生命力と勇気に満ちあふれていました。驚いたことに、レフラーに率いられた彼らは皆、選挙（※ナチスの一党独裁を信任する国民投票）で「反対」に投票したのです。それは非常に勇敢なことだと私には思えましたが、必ずしも賢明な選択であったとは言えません。これまでのところ、その結果として起きたことといえば、彼らの住宅融資が回収されたことくらいです。他の施設は、できる限りうまく世間の目をすり抜けてやり過ごしていました。

ベルリンでも活動を続けることは可能ですが、この活動を外部へ広げることはできず、より内向的なものにとどまっています。もし各グループがこのように継続できるのであれば、彼らはドイツでの出来事を生き延びることができるかもしれません。しかし私たちは、この崩壊のプロセスが特にドイツにおいて今後も続いていくこと、そして近い将来に改善を期待することはできないという事実に気づき、覚悟を決めなければなりません。もしこの現実、ゲーテの言う「死して成れ」を受け入れることができないのであれば、このような時代に生きることなど到底できません。これが大陸の状況です。

しかし私は、大きな懸念を抱きながらイギリスとロンドンのことも振り返っています。なぜなら、人々が今なお自由のうちに生きられる場所（これこそがルドルフ・シュタイナーが人間の理想として見たものでした）をイギリスに築き上げようという私の野望が、どこにも行き着いていないように思えるからです。その間にも大陸では、魂に満ちたものすべてがバラバラに崩壊していくかのようであり、霊は私たちのものではない他の霊的潮流と結びつきつつあります。

私が望み、私たちの救いとして見ていたものは、支配的な「死の力」を取り囲むような、啓発された人間たちによる生きた「環」でした。それは、再び自由を手に入れ、場所から場所へと移動できる人間たちが暮らす、様々な国に点在する「要塞」であり「聖杯城」の環です。これが正しい方法で実現されるなら、私はそれを、世界に新しい生命が育つための何かをもたらすことができる「ミカエル同盟」とみなしたことでしょう。しかし、この構想を具現化する道には、大きな困難が横たわっているようです。人々が自由に移動できないという事実がそれを難しくしていますし、イギリス人の魂がこのような広範にわたる試みに対してあまり信頼を寄せていないという事実も影響しています。イギリス的な堅実さを考えればこれは理解できることであり、受け入れざるを得ません。

憂鬱なのは、霊的世界がこの新しい発展を求めているにもかかわらず、地球上だけで進化してきたこうした国民的特性を考慮に入れてくれないことです。成されるべきことは必然として私たちの前に立ちはだかっており、人間はそれを引き受けなければなりません。それが成功するかどうかは、十分な数の人間がこの必要性に対する意識を育むことができるかどうかにかかっています。ケント・テラスの拡張には確かに障害があり、私たちはそこで慎重に歩みを進めるか、むしろそれはそのままにしておくべきだと私は信じています。内なる必要性によって呼び起こされる、財政面だけでなく「意志の力」の面での確固たる支持がなければ、この拡張が繁栄することはありません。私たちは、人々がこの必要性に気づき、それを完全に受け入れる準備

ができるまで、ただ忍耐強く待つしかないのかもしれません。私個人の意志であるかのように見えるかもしれない何かを押し通すことは論外です。なぜなら、それは私の意志ではないからです。
あなたが素晴らしいクリスマスを過ごされるよう願っています。キリストには、以前よりも確実に近づきやすくなっています。」（1933年12月18日）

ナチス政権や差し迫る戦争という過酷な状況下にあっても、各地の治療教育センターが長きにわたって活動を継続できたのは、スタッフたちの多大なる個人的な勇気によるものでした。彼らはますます自分たちだけの力で切り抜けねばならなくなり、家宅捜索や尋問に耐え忍ぶ日々を送っていました。アルレスハイムやスイスは、突如として遥か彼方の存在となったのです。しかしイタ・ヴェークマンは、特別なケアを必要とする子どもたちの周りに集まり、彼らを守り抜こうとする人々と、常に精神（霊）において共にありました。

1940年以降、ヴェークマンはスイス南部ティチーノ地方のアスコーナ近郊にある「カーサ・アンドレア・クリストフォロ（Casa Andrea Cristoforo）」で、少数のスタッフ、多くの患者、難民、そして家を失った魂たちと共に暮らしていました。彼女はその全員に医療ケアを提供し、自らの強烈な霊的活動によって、この破滅的な時代を彼らが乗り越えられるよう尽力しました。週に一度、彼女は近くのブリッサーゴにある治療教育の子どもの家「ラ・モッタ（La Motta）」を訪れました。ノーラ・フォン・バディッツは、その回想録に次のように記しています。

「子どもたちは嬉しそうにヴェークマン博士のもとへと駆け寄りました。誰もが彼女を愛していました。そして彼女の慈愛に満ちた、細やかな眼差しが子どもたち全員に注がれていました。彼女の心は、新しい治癒の方法を考案することを決して止めませんでした。アスコーナのカーサ・アンドレア・クリストフォロに戻ってくると、彼女はさらに晴れやかな表情になり、食卓で子どもたちのことをこの上ない愛情を込めて私たちに語ってくれたものです」

この時、イタ・ヴェークマンはアルレスハイムの自身のクリニックや、ゾネンホフ、そして諸外国にある他のすべての治療教育センターから引き離されていました。それらの施設は何年もの間、独立して運営されており、彼女自身も長い間そこを訪れていませんでした。それにもかかわらず、ルドルフ・シュタイナー自身が医学セクションの責任を彼女個人に委ねていたのです。医学と治療教育のすべてを、シュタイナーは外面（エキゾテリック）的にも内面（エソテリック）的にも、彼女の「個体性」へと結びつけていました。

今や1940年代において、戦争の最中に続けられている個々の人々の独立したイニシアチブや活動について、少しでも情報がもたらされるなら、彼女はまだ幸運であると思わねばならない状況でした。ここでいう「情報がもたらされる」とは、すでに決定されてしまったプロジェクトに対して、彼女の祝福（承認）が事後的に求められるということを意味していました。イタ・ヴェークマンは、自らが霊的に「持ちこたえられない（破綻している）」と見なさざるを得なかったこの状況に、長年苦しみ続けていました。

アルブレヒト・シュトローシャイン、ジークフリート・ピッケルト、フランツ・レフラーらを中心とする、初期の治療教育コミュニティの核心からの離別と分裂は、ある部分においては彼女の意志に反して起きたことであり、さらに多くの事態がそれに続いていました。1942年の夏、ゾネンホフの治療教育教師であるヴェルナー・パッヘが、クリニックでのトレーニングコースに関する比較的ささやかな提案を提出したとき、ヴェークマンはこの状況を深刻に受け止め、彼に次のような返書を送りました。

「私は次のような結論に達しました。――かつてルドルフ・シュタイナーはそうおっしゃっていましたが、当時の私は本当には信じていませんでした――すなわち、医学と治療教育は私と強く結びついているべきであり、すべてのイニシアチブは私から発せられるべきであって、他の人々はそれを支持し、自らのイニシアチブを私のものと調和させるべきである、という結論です。私はこれが本当に正しいことなのか、常にどこか確信が持てずにいました。そのため、内なる声が反対しているにもかかわらず、他者から提出されたイニシアチブに同意し、それを実行してしまうことがしばしばありました。私が主に思い出すのは、シュタインやコリ

スコとの間に起きたこと、そして他の多くの事柄です。ほとんどの場合、事態は私や他の人々が望んだようには運びませんでした。

したがって、私は今、この結論に達したのです。――そして長年の私の経験がこのことを証明しています――シュタイナー博士が語られたことは完全に真実であり、私はもはやそれを遵守することを躊躇しません。それどころか、もし人々が私と共に働きたいと願うのであれば、イニシアチブが私から発せられるという事実を受け入れなければなりません。もし他の人々にイニシアチブがあるなら、まず私に相談しなければならず、それが私のものと両立し、時間的にも業務の負荷的にも私がそれと完全に結びつくことができる場合にのみ、進めることができます。

今後は、あなたがた全員が自分たちの立場から最善と考える事柄を私に提案し、もし私が同意しなければ、『私たちは皆これが良いと思っているので、あなたがこれと結びつき、あなたから発したものとして機能させてください。それが不可能なら、私たちはあなた抜きで進めます』というような状況に私が直面させられる、という手順はもはや容認できません。あなたの手紙のなかでは、それほど露骨に語られてはいなかったとしても、そこには明確にそのような意味が含まれています。そのようなやり方は、私を『あなたがたのプロジェクトに反対するか』、あるいは『時間的にも業務の負荷的にも不都合であるにもかかわらず、ルドルフ・シュタイナーがかつて世界にもたらしたものが希薄化し、私から段階的に切り離されてしまわないようにするために、それに従わざるを得ないか』という立場に追い込みます。この『切り離し』が、ある特定の霊的（精神的）な諸力によって明確に意図されているということは、ルドルフ・シュタイナーも語っていた事実なのです。

親愛なるパッヘ氏、これが現在のありのままの状況です」（1942年7月25日）

ヴェルナー・パッヘが、彼女の驚いたことに、この根本的な考察に同意する返事を出したのに対し、イタ・ヴェークマンはそのわずか数週間後、ゾネンホフが彼女への相談すら一切なしに、戦争でトラウマを負った40人の子どもたちの受け入れを拒否したという事実を耳にしました。ヴェークマンはショックを受け、文字通り愕然としました。7月25日の彼女の手紙に対して肯定的な返答があったにもかかわらず、彼女はこの重大な決定から完全に排除されていたのです。

「あなたがごく最近の手紙のなかで、私たちがそのような過酷な事態に直面するかもしれないという、これらの壮大な計画について語っていながら、いざそれが現実になると、すべての勇気を失い、私に相談することすらなく拒絶してしまったことに、私は底知れぬ驚きを禁じ得ません」（1942年8月20日）

イタ・ヴェークマンには、なぜこの救いの手が拒まれたのか理解できませんでした。施設側が提示した「子どもの数が施設の収容能力を超えてしまう」「すべての人智学施設が生き残りをかけて闘っている」といった抗弁を、彼女は受け入れようとはしませんでした。なぜなら、赤十字がその費用を支払うことに同意していたからです。彼女はアルレスハイムで下された決定にもかかわらず、自らの側から、これらの子どもたちを何とかして受け入れられるよう今なお手を尽くそうとしました。8月20日、彼女はヴェルナー・パッヘにこう書き送っています。

「あなたがたは唯一無二の機会を拒絶してしまいました。私たちの歩みを助けようと努めている霊的な諸力に調和した行動をとらなかったのです。前進するということ、それは困難を回避することではなく、それを『克服する』ことであり、それこそが私たちを前進させるものなのです」

同じ日、彼女はゾネンホフで働いていた治療教育教師のヘレーネ・オイグスターに次のような手紙を送っています。

「しかし、あなたがたは皆現場の抗弁に同調してしまっている。そうした過大評価や障害のせいで、非常に多くの治療教育教師たちが力を失いつつあり、それらはパッヘの破滅をも招くことになるでしょう。私たちはそうした障害によって立ち往生してしまうのです。戦争によってトラウマを負った子どもたちを受け入れることは、私たちが治療教育における自らの課題を見失うことを意味しません。それどころか、それこそがこの課題の真の具現化なのです。もしそのことが理解できないのであれば、時代の大きな歩みとともに前進し

ているとは言えません。私は断じて、小さな歩みに甘んじるつもりはありません。常に大きな歩みとともにありたいと考えています」

イタ・ヴェークマンはその生涯を通じて、周囲がもたらすあらゆる障害や時代精神にも抗い、特に治療教育の分野において常に「大きな歩み」で前進し続けました。それからわずか6か月後、彼女はルドルフ・シュタイナーが彼女のために建てたアルレスハイムの木造の家で、この地上を去りました。

彼女が亡くなったその日、1943年3月4日、遥か彼方のスコットランドにいた一人の治療教育教師（カール・ケーニッヒ）は、日記に次のように書き記しています。

「いま、この善良で偉大なる女性が霊的世界へと旅立たれた。おそらくはルドルフ・シュタイナーの最良の友人であった人。シュタイナー博士の闘病中、昼夜を問わず彼を看病した人であり、新しい医学、新しい治療教育の中心であった人。多くの人々の医師であり、援助者であり、相談相手であった人。あの援助者であり母親のような友人は、もうここにはいない。私自身の内にある生命の神経が一本、断ち切られてしまったかのように感じている」

イタ・ヴェークマンはカール・ケーニッヒに本質的な援助を与え、彼をその道（のちのキャンプヒル運動やスコットランドでの活動へと繋がる道）へと送り出した人でもありました。1925年の聖霊降臨祭（ペンテコステ）のときに若い治療教育教師たちが知ったように、ケーニッヒもまた、イタ・ヴェークマンとルドルフ・シュタイナーとの真の結びつきを知っていました。そして、シュタイナーの活動を継続する上での彼女の偉大さと精神性を知っていたのです。特に、特別なケアを必要とする人間たちの宿命（カルマ）が、その恩恵を授かることになるあの領域において。

魂の果実は
私のために熟す
地上のヴィジョン（幻視）を
あなたへと送ることができるとき
霊の内に。

過去の存在が――
私には思える
炎の中で
喜びを抱きながら
形を成していくのが
霊の家の中で
私を包み込むために。

だから魂の手を取るがいい
あなたのものである私の自己が
それをあなたへと差し伸べている
そして私の愛することを成すがいい
そうすればそれは成されるだろう
まるで私自身の自己が
あなたの歩みを導いたかのように。

〔第３講義〕

「私は誰の自由に対しても、いかなる方法でも干渉したくはありません」
イタ・ヴェークマンと医師たち
"I do not want to interfere in any way with anyone's freedom"
Ita Wegman and the Physicians

●基本的な視点

イタ・ヴェークマンがルドルフ・シュタイナーから託された
「人智学的医師たちの共同体」を、自由を尊重しつつ
霊的源泉に根ざして実現しようとした営みが描かれる。

ヴェークマンは、シュタイナーが1924年9月18日に語った
「それでもなお、この共同体は可能です」という言葉を出発点に、
直面した分裂・拒絶・妨害・排除、そしてファシズムと戦争という障害の中で、
なお「前進あるのみ」の姿勢を貫いた。

中心にあるのは、医学セクションの本質を
「シュタイナーとヴェークマンの結びつき」に見る理解と、
医師たちの「同胞愛」・共同の意志をどう育むかという問いである。
個人の自由を侵さないことと、
ゲーテアヌムを源泉とする連帯を維持することの緊張が、
講義全体を貫いている。

●要点

・シュタイナーの医師共同体のビジョン

1924年の最後の演説で、ゲーテアヌムを治癒の源泉とし、
医師たちがその中心から放射される衝動への「真の連帯感」を持つことを求めた。
医師グループを未来の決定的な推進力と位置づけ、
共同体は「心の中」で実現されるべきだと述べた。

・ヴェークマンの実践的努力

広範な文通・講演・会議・医師派遣を通じて共同体意識を喚起。
アルレスハイム・クリニックを治療・研究・養成のモデル機関とし、
ハウシュカらを招き入れた。
個別の患者への詳細な助言、休暇の支援、
必要に応じた批判や修正を行い、同僚の消耗を防ごうとした。
1927年末にようやく総合医学会議を実現し、
「互いに支え合い、一丸となる」第一歩と位置づけた。

・医学セクションの深い理解と伝達の困難

セクションの霊的実質はシュタイナーとヴェークマンの結びつきにあり、
逝去後も継続すると理解。
イニシアチブはセクションから発せられるべきで、

現地の独立した会議組織は衝動の希薄化を招くと主張
（1930年のツァイルマンスとの往復書簡が典型）。
多くの同僚はこの層に到達せず、理解の溝が対立を深めた。

・内部対立と組織的排除

医師コミュニティの分裂はシュタイナー生前から存在し、死後に悪化。
ヴェークマンの個性・立場への拒絶、
理事会・セクション指導者としての活動への段階的妨害が続き、
最終的に4人の同僚医師に交代させられた。
彼女は「誰の自由にも干渉したくない」と明言し、
クリニック内で内部抗争を持ち込ませず、若い同僚や患者を保護した。

・ナチス台頭への対応

1933年、親しい医師・治療教育者たちを集めた会議を
急遽招集しようと大量の手紙を送った。
子どもたちのスイス避難を勧め、
人智学協会を脱退してナチス党に入党する医師たちを批判。
「ドイツ人智学的医師連盟」構想（生物学的医学への同調）を
「致命的な連帯」として拒絶した。

・若き世代への期待とその限界

1930年代前半の医学生グループに、個人診療所ではなく
「共同体を通じて医学をより高い次元へ」引き上げる未来を託した。
イギリスでのミカエル的意志への期待もあったが、実現は限定的だった。

・最晩年の霊的集中と協働

1940年以降、アスコーナでの「内なる亡命」的生活の中で、
施設の存続は「シュタイナーの思想が忠実に守られる場合に限る」と遺言。
ヒルマ・ヴァルターとの病歴改訂作業を通じ、
小規模ながら実効的な医療共同体を実践。
エフェソスの神秘との結びつきを強調し、
講義はシュタイナーが彼女の誕生日に贈ったエフェソスの光の詩で閉じられる。

●本文

「そして私は、私たちが互いに支え合い、ルドルフ・シュタイナーが私たち医師に期待されたことを達成できるよう、今こそ皆で一丸となって活動に励むことができるよう願っています。」
（1927年12月28日）

※写真（1925年/1926年頃、アルレスハイム・クリニックの庭園にて、同僚たちと共に写るイタ・ヴェークマン。）

「それでもなお、この医師たちの共同体は可能です。この共同体は、ゲーテアヌムの治癒の実践に真に加わることを願う人々の「心の中」で実現されなければなりません。（……）人智学的医師として働こうとするす

べての人々が、ここゲーテアヌムにおけるこの活動の源泉に対し、特別な意識をもって結びつかなければならないのです。
　ここゲーテアヌムにそのような医学の源泉を確立することこそが、私がここでヴェークマン博士とともに協働する目的であり、目指すところです。そして、ここにおいて源泉たるべきものへと結びつくことによってのみ、――まさにこの結びつきを意識することにおいてのみ、――治療家たちがゲーテアヌムの医学セクションでの医学コースから持ち帰るものの「真の意味」が見出されるのです。それは、ここで示された中心から放射される衝動に対する、真の連帯感に他なりません。
　したがって、親愛なる友人である皆さまに、最後にこの言葉を贈ることをお許しください。実践に携わる医師たちのこの　「同胞愛」を象徴する、その道を自らの内で探求してください。あなたがたはそれを見出すでしょう。そして、あなたがたがそれを見出せるようにすることこそが、私たちゲーテアヌム側の務めとなるのです。」（ルドルフ・シュタイナー）

　ルドルフ・シュタイナーがこの言葉を語ったのは、今から77年前、1924年9月18日のことでした。それは彼が司祭（キリスト者共同体）と医師たちのために行った共同コースの最後になされた、人智学的医師たちへの最後の演説でした。

　「それでもなお、この共同体は可能です」――今夜私たちは、この医師たちの共同体を可能にしようとしたイタ・ヴェークマンの決意と、彼女が直面した無数かつ克服不可能に思える障害を前に、それがうまくいかないのではないかと絶えず抱いていた不安について見ていきたいと思います。その障害とは、ルドルフ・シュタイナーの存命中からすでに存在し、彼の逝去後に急速に悪化していった人智学的医師コミュニティの分裂であり、イタ・ヴェークマンの個性や立場を受け入れようとしない人々の拒絶反応であり、1925年以降の理事会のメンバーおよびセクション指導者としての彼女の活動に対する段階的な妨害であり、彼女が組織から排除され4人の医師の同僚たちへと交代させられたことであり、そして最終的には、ファシズムと第二次世界大戦でした。

　今夜、この2001年9月18日に、私はこれらの展開を追っていきたいと考えています。決して体系的ではなく、網羅性を主張するつもりもありませんが、探求的かつ選択的な方法で進めていきます。それは同時に、人智医学の内部において、医師たちの間の「共同体形成」という問いが、いかに特別な重要性を帯びているかを念頭に置いてのことです。ルドルフ・シュタイナーは医師たちから活動を始めました。シュタイナーは他のどの専門職グループよりもこのグループを支持しており、彼らこそが未来のすべての発展にとって決定的な推進力になると明らかに考えていたのです。

　イタ・ヴェークマンは、医師としての自らの立場にうぬぼれるようなことはありませんでした。彼女は同僚の医師たちの多くよりも、自らの看護師、療法士、そして援助者たちと遥かに近いところにいました。しかし彼女は、ルドルフ・シュタイナーから委ねられた使命を果たすために、自らの能力の限りを尽くしたのです。その目標は、今日に至るまでなお達成されないまま残されています。

　この第3回目であり締めくくりとなる講義のプロセスの中で、私は再び、イタ・ヴェークマンとルドルフ・シュタイナーが「医学セクション」とは何であると理解していたか、その本質へとアプローチしていきます。その理解は、彼女の友人や同僚たちのほとんど誰も到達することができず、その結果として深刻な事態を招くことになったものでした。その「セクション」の霊的な実質は、ルドルフ・シュタイナーとイタ・ヴェークマンとの結びつきの中に存在しており、それは1925年3月30日の彼の逝去後も存在し続けていたのです。

　これよりわずか1年前、彼が「カルマ講義シリーズ」を行う直前の講義の中で、シュタイナーはそのような結びつきの真の背景について次のように描写していました。

「秘法伝授を受けた者（イニシエート）は、自らとカルマ的関係にある他者を経験するとき、単に『あの人は私の意志に働きかけている、あの人は私の意志の中で働いている』と言うような形では経験しません。そうではなく、その他者が『自らの内に個人的に存在している』ものとして経験するのです。伝授を受けたる者

が、カルマ的な結びつきのある他者に近づくとき、その他者は、その人自身の話し言葉、その人自身の発言や開示とともに、伝授を受けた者の内に存在しています。そのため、その人物は、私たちの隣に立っている人が通常私たちに語りかけるのと全く同じように、伝授を受けた者の内から語り出すのです。通常であれば意志においてのみ感じられるものが、伝授を受けた者においては、その他者がまるで隣に立っている人のように自らの内から語りかけてくるという形で現れます。伝授の科学に熟達した者にとって、カルマ的な出会いとは次のことを意味します。すなわち、その他者が私の意志に働きかけるだけでなく、私の『内側』で、まるで隣に立っている人のように力強く、ごく当たり前に働くということなのです」

魂の果実は
私のために熟す
地上のヴィジョン（幻視）を
あなたへと送ることができるとき
霊の内に。

過去の存在が――
私には思える
炎の中で
喜びを抱きながら
形を成していくのが
霊の家の中で
私を包み込むために。

だから魂の手を取るがいい
あなたのものである私の自己が
それをあなたへと差し伸べている
そして私の愛することを成すがいい
そうすればそれは成されるだろう
まるで私自身の自己が
あなたの歩みを導いたかのように。

「少しの間だけでもあなたを訪ねたいのは山々なのですが、来週からイギリスへの旅が控えているため、近い将来には叶いそうもありません。本当はイギリスへなど旅したくはないのです。しかし、人々との接触はいま非常に重要であり、私が何かを与えることができるとき、個々の人間と結びつきを築くことができるときこそが、私の唯一の強みなのですから、いま行くのをやめるのが良くないことはあなたもご存じの通りです。

往路では、フレーデ博士と私はパリで数日間を過ごし、会議に参加しなければなりません。ハンブルクでの雰囲気は素晴らしく、オランダでも同様でした。北方はきっと良い方向へ向かうでしょう。エッセン、ボーフム、ドルトムントから高次精神科学学校の講義をしてほしいという招待を受け、現地からは良い報告が届いています。

親愛なるヴァルター博士、私は今、雑誌のための論文を執筆しているところなので、あなたがいないのをとても寂しく思っています。私の頭の中にはすべてが明確に、そして完全に存在しているのですが、足りないのはあなたの執筆の手であり、言語面での助けなのです。（……）

医学セクションを代表してシックラー氏〔訳註：Eberhard Schickler（エーバーハルト・シックラー、1895年9月26日-1963年9月15日） 人智学医学（特に癌治療のミステル療法）の初期発展に関わった医師〕が行った講演は大変素晴らしいものでした。自由七科（リベラル・アーツ）と治癒の芸術との間に存在する関係について、初めて言及がなされたのです。これによって重要な一歩が踏み出されました。医学セクションにおいてこれを築き上げていくための、十分な強さと十分な支えが私に与えられますように。私はしばしば絶望してしまいます。なぜなら、お金も人材もいないからです。根本的なニーズを満たすためのお金もなく、最も単

純な作業をこなすための人間もいません。それでも、ほかに道はないのです。私たちは勇気をもって進み続けなければなりません」

この抜粋は、ヴェークマンが医学セクションの指導者に就任して最初の数年間に書かれた手紙からのものです。彼女の活動の短い描写であり、彼女が深く尊敬していた最初の医学界の同僚、ヒルマ・ヴァルター博士への報告となっています。「私が何かを与えることができるとき、個々の人間と結びつきを築くことができるときこそが、私の唯一の強みなのです……」――決して大言壮語ではありませんが、計り知れないほど誠実な言葉です。

当時、旅や講演、医学会議、広範囲にわたる文通、そして医学雑誌の出版などを通じて、イタ・ヴェークマンは医学運動の内部、特に常に独立して自分のために働くことに慣れていた医師たちの間に、共同体意識を呼び起こそうと休むことなく働きかけていました。同時に彼女は、ルドルフ・シュタイナーが「模範的な施設」と呼んだアルレスハイムの自身のクリニックにおいて、そこが真に人々を結びつける拠り所となるよう、質的な改善を実践しようと努めていました。アルレスハイムのクリニックは、治療、研究、そして養成のためのモデル機関となるべき場所でした。ヴェークマンは、特に才能豊かな人智学的医師、科学者、芸術家たちをすべて惹きつけようと試みることで、そのための内的な、そして外的な条件を整えていったのです。

そうした人材の中には、機知に富んだ若き化学者であり薬剤師のルドルフ・ハウシュカがいました。彼はヴェークマンが断固とした介入を行うまで、サメの皮を売ることでなんとか生計を立てようともがいていました。ヴェークマンは1929年1月29日、彼に次のような手紙を送っています。

「奥様から、ロンドンでのあなたの活動について随時報告を受けています。私は、あなたが本当に私たちと、特に私とともに働くべきだと考えずにはいられません。そして、この目的を達成するためにいかなる努力も惜しんではならないということが、私にはますます明確に分かってくるのです。
このサメの商売で、私たちがどこかへ到達できるとは到底思えません。それは今日まで成功を収めていませんし、将来的にもそうなることはないでしょう。さて、あなたが給与を受け取ることなくコルシカ島へ赴き、そこに研究所を設立するかもしれないという話が私の耳に入ってきました。私は、これらすべての事柄を絶対にやめるよう、あなたに強くお勧めしなければなりません。それよりも、あなたのエネルギーと勇気を私たちのために差し出していただきたいのです。
私は次のような提案をしたいと思います。状況としては、どのみちあなたの奥様とお子様たちはここにいるのですから、あなたはここへ来なければなりません。そして私たちは、すべての医薬品をもう一度徹底的に検証し、私たちにとって重要となり得る他の実験を行うことにしましょう」

ハウシュカは、「状況としては、あなたはここへ来なければなりません」という、どちらかといえば命令のようにも響くこの提案を拒絶することができませんでした。それはかつてカール・ケーニッヒやヴェルナー・ケーリンが、イタ・ヴェークマンから受け取った招請の手紙に抗えなかったのと全く同じでした。その結果として、アルレスハイムのクリニックは着実に成長していきました。そしてアルレスハイムだけでなく、イタ・ヴェークマンはグナーデンヴァルト、ハーグ、アスコーナにおける新しい病院の設立を始動させ、あるいは支援し、ベルリンやロンドンといった都市での治療センターの立ち上げを助け、現地で働く医師たちと緊密な連絡を保ち続けました。

支援の一環として、彼女は自身のクリニックから様々な場所へと医師を派遣し、多くの同僚たちと定期的な文通を楽しみました。そして、彼らから求められた際には、一般的な治療法だけでなく、個々の患者に対する包括的かつ非常に詳細な助言や推奨事項を書き送ったのです。こうして、一部の医師たちを結びつける「共同体意識」、あるいは少なくとも「共同の意志」の萌芽が形作られていきました。それにもかかわらず、イタ・ヴェークマンは必要と考えた場合には、細やかな批判や機知に富んだ修正を口にすることをためらいませんでした。グナーデンヴァルトの療養所への訪問から帰宅した彼女は、現地で医師をしていたノルベルト・グラスへ、実務的な手紙の中で次のように書き記しています。

「男爵A氏の件について、あなたとお話しするのを忘れていました。彼が私に語ったところによると、彼が手術を受けた病院の顧問医師がレントゲン（X線）検査をしたがっているのに対し、あなたはそれに反対するよう助言したとのことですね。男爵A氏にとって、このジレンマから抜け出すのはかなり難しかったように私には思われます。彼は私たちに最大の信頼を寄せておられるため、レントゲン検査には消極的ですが、執刀医にも信頼を置いており、その助言を完全に無視することにも躊躇しているのです。

私たちがレントゲン検査に反対する助言をすることは、一定の責任を負うことになりますし、病院の顧問医師を怒らせてしまう可能性もあります。最も良い方法は――私も男爵A氏とこの点で同意したのですが――、病院側に改めて完全なカルテを要求し、親愛なるグラス博士、あなた自身が執刀医に、レントゲン検査に何を期待しているのかを直接尋ねてみることです。このケースでは、後から何らかの合併症が起きた際に『検査に反対したからだ』と私たちが責められることのないよう、慎重に歩みを進めなければなりません。私自身もレントゲン検査には賛成しかねますが、もしどうしても避けられないのであれば、たった一度のレントゲン検査がそれほど深刻な結果をもたらすとは考えられません。非常に多くの場合、患者はそれを不快に感じ、二度、三度とレントゲンを撮られることを嫌がるようになるものなのです」（1928年9月12日）

医薬品に関しては、治療に関する推奨事項は常にアルレスハイム、ひいてはルドルフ・シュタイナーの遺産と結びついたものでなければならないという事実に、人智学的医師たちの注意を向けることが必要であると、イタ・ヴェークマンは強く感じていました。彼女との協働を通じてであれば、医薬品を他者へ手渡し、使用してもらうことは可能でした。しかし、それらの医薬品の起源や、アルレスハイムにおいて明白な形となったルドルフ・シュタイナーの意図については、明確に認められなければならなかったのです。彼女はあるとき、ボーデン湖畔のクロイツリンゲンにあるリハビリテーション・センターで働き、彼女が頻繁に助言を与えていた同僚のヘルマン・リーベルトに対し、非常に不満げで率直な手紙を送っています。

「ケーリン博士を通じて、スイスの医師たちの間で回覧されているニュースレターに目を通す機会がありました。そこで気づいたのですが、あなたや他の先生方は、もともとここ（アルレスハイム）の私たちから発した治療の提案を、そのことへの特別な言及なしに掲載されています。しかし、シュタイナー博士の意図が損なわれないようにすること、そして博士がもたらされた医学的衝動が希薄化してしまわないようにすることは、私の義務なのです。

すべての治療の提案が常にここ（アルレスハイム）から発せられなければならないということを人々が尊重しないならば、そのような希薄化は必然的に起こってしまうでしょう。治療に関して疑問を持つ医師たちに助言を与えるため、私たちが常に最善を尽くしていることは、先生ご自身もよく目にしてこられたはずです。ですから、あなたが私のこの要望を正しい方法で受け止めてくださると確信しています」（1929年10月30日）

イタ・ヴェークマンはその後の数年間も、ヘルマン・リーベルト博士に対して――寛大に、そして誠実に――助言を与え続けました。彼が病に倒れたときには、有益な医学的推奨事項を彼に送っています。……そして、イタ・ヴェークマンが遠方から支え続けた人智学的医師は、リーベルト博士だけではありませんでした。彼女は愛と献身、そしてコミットメントをもって、当時しばしば完全な心身の消耗に至るまで働いていた無数の同僚たちの健康と気力に目を配っていたのです。彼女は他者が無理をしているのを察知すると、彼らの治癒と回復のために、しばしば独創的な提案を思いつきました。

「あなたの手紙から伝わってくる切迫した状況を深く受け止め、ここでどのように力になれるかについて、ずっと深く考えていました。休息もとらず、気分転換をすることもなく、常に同じ場所にとどまり続けるのは決して良いことではありません。私は次のような提案をしたいと思います。

心身をしっかりと休めるために、お一人で、あるいは奥様やお子様と一緒に、こちら（アルレスハイム）へ来られてはいかがでしょうか。そして、体調が回復した暁には、ここでご自身が楽しめる何かの研究に携わることもできます。ここには、あなたの助けとなる多くの人々や、多くの専門的な知識が存在しています。クナウアー博士による眼の疾患の治療、がん研究所、ズハントケ博士による新陳代謝に関する興味深い調査、オイリュトミー療法などです。

また、3月2日から10日にかけては若い医師たちのためのコースがここで開催され、ロンドンからジョージ・カウフマン氏が来て、射影幾何学についての講義や実践的な演習を行う予定です。そこでは私たちは人智学に基づいて、生理学や、人間の器官および骨の起源と変容について考察することになっています。さらに、ケーリン博士と私はこの分野の特別な訓練を受けていますから、あなたも婦人科的な診察の研修を受けることができます。

この手紙を書いている今、私の目の前には非常に愛らしい光景が浮かんでおり、私自身この提案にすっかり熱中しています。あなたが来てくださることをただ願うばかりです。（……）最後に、あなたが古き文化を切望されていることについてですが、それもここで見出すことができます。西暦900年頃のアルザス地方の改革運動はすべてここで行われましたし、聖オディールや、彼女に結びつくあらゆるものもここにあります。ここの医師たちも、あなたが来られるというアイデアを大いに歓迎しており、あなたがここで新しい要素を見出せるだろうと感じています」（エドムント・ドレッバーへの手紙、1933年2月9日）

イタ・ヴェークマンは本当に模範的な精神をもって、できる限りの力で同僚たちを支えました。彼女は彼らが新しい力を得るのを助け、また、大きな困難に直面しても実践的な人智医学のために立ち上がるよう勇気づけることで、彼らが自らの専門職（医師）に背を向けてしまうのを防いだのです。

類まれな才能を持つ医師であり、かつて「若い医師」の一人であったクルト・マーゲルシュテットが、1929年2月にイェーナでの開業医を辞めて学校（ヴァルドルフ学校）で働き始めようと考えていると彼女に伝えたとき、彼女は折り返しの便で次のような返書を送りました。

「あなたのお手紙を受け取り、環境を変えたいというお気持ちはとてもよく理解できます。しかしその一方で、後任が見つからないまま、これほど繁盛している診療所を辞めてしまうのはもったいないことだとも思います。もし学校へ行かれたいのであれば、ハノーファーが最も適した場所でしょう。しかし、あなたの持つ医師としての卓越した才能を考えれば、医学の実践を完全にやめてしまうなどということは私には到底想像できませんから、それは確実に一時的な試みにすぎないはずです」（1929年2月16日）

このようにして多くの人々が新しい勇気を与えられ、活動を継続していきました。

イタ・ヴェークマンはまた、自身のクリニックの内部でも医療共同体の形成を実践していました。彼女はしばしば、ヒルマ・ヴァルターやマルガレーテ・キルヒナー＝ボックホルト、マドレーヌ・ヴァン・デフェンターといった同僚たちが反対するのを押し切って彼女たちを休暇へと送り出し、その間、彼女たちの患者の面倒を見ながら、通常よりもさらに精力的に働いたのです。そして、彼女自身が講演旅行や会議に出かけたり、あるいは後になって心身の静養のために休暇をとらなければならなくなった際には、追加の業務を引き受けてくれた同僚たちに対して、温かい感謝の手紙を書き記しました。

ロンドンで重要な講演を行った翌日、彼女はマドレーヌ・ヴァン・デフェンターに次のような手紙を送っています。

（※金曜日の朝）
「親愛なる ヴァン・デフェンター博士
ありがたいことに、私はすべてをやり遂げました。昨晩が講演でしたが、大きな反響を与えたと信じています。人々がいまこれほど切実に必要としているのは、やはりこの「キリスト教的なもの」なのです。キリスト教的な思想を、古代の神秘学、すなわち誕生の神秘（testa mysterium）や、まだキリストを受け入れる準備ができていなかったために3年後に必ず死なねばならなかった「太陽の英雄」の神秘、そして後のゴルゴタの秘儀（M.o.G.〔訳註： Mystery of Golgotha〕）における、自らの内にキリストを携えた太陽の英雄イエスによる「死の克服」へと結びつけることによって、私はキリスト教にそれほど親しんでいない人々だけでなく、レールス、ハーン、そしてコリスコといった多くの古い人智学者たちをも満足させることができました。

これが成功したことを私は非常に嬉しく思っています。なぜなら、これはイギリスにおける人智学運動全体にとって極めて本質的なことだからです。まるで、すべての悪しき霊が追い払われたかのようです。（……）

昨晩は本当に素晴らしい体験でした。だからこそ私は、あなたに手紙を書き、あなたがより多くの仕事を引き受けて私にこの機会を与えてくださったことへの感謝を伝えたいという衝動に駆られたのです。私は簡単にロンドン行きを辞退してしまっていたかもしれません。自分が弱気になってしまうような要因が、すべて重なり合っているように思えたからです。あなたからのたった一言の引き止めがあれば、私は行かなかったでしょう。私はほとんど、その言葉を待っていたのです。それなのに、あなたはあの言葉を口にされませんでした。それはあなたがいかに寛大であるかを示しています。そのようにして、あなたは私が成すべきことを成すのを助けてくださったのです。皆さんはお元気ですか？

私はすぐにロンドンから発つ予定です。日曜日にはもう一つ講義があります。先週の月曜日のレッスンも、ある公園の完全に隠された場所にある礼拝堂で行われました。多くの人が集まることができるでしょう！
ボックホルト博士にも心からの挨拶を。
あなたの イタ・ヴェークマン 」

数年後、彼女が非常に高く評価していたルートヴィヒ・エンゲルと、医師のカール・ヌンホーファー、そして一時的にはロンドンのケント・テラスにいたルドルフ・ハウシュカとの間で、財政面をはじめとする様々な困難が生じたとき、ヴェークマンはルドルフ・シュタイナーの「根本的社会法則」を分かりやすく説明する実務的な言葉を書き送っています。

「あなたがブレスラウにいた時のように、自分が稼いだものはすべて自分の自由になり、家族だけで暮らしたいと切望される気持ちはよく分かります。しかし、もし私たちが皆そのように考え行動していたなら、人智学運動を推し進めるための成果、あるいはこの場合で言えば人智医学を発展させるための成果など、何ひとつ達成されなかったでしょう。自己犠牲を払うことによってのみ、私たちは霊的なものを掴み取り、それを物理的な次元で起こるべき事柄と結びつけることができるのです。

もしあなたとヌンホーファー、そしてハウシュカの3人で膝を突き合わせ、お互いの間でどのように資金を分配できるかを相談できるなら――すなわち、各自が週にいくら必要かを割り出し、そこに家を維持し見栄えを保つために必要な経費を上乗せするのです――、そうすれば、ヌンホーファー博士が週にいくら受け取り、あなたと奥様が研究所から週にいくら受け取るかを確立できるはずです。（……）これらの事柄は、その家が賄える範囲に応じて、あなたがた3人の間で合意されなければなりません。親愛なるエンゲル博士、それはもちろん、もう一つの犠牲ではあります。しかし、私たちは皆、霊的な必然からそのような犠牲を払い、今なお払い続けているということを忘れないでください」（1937年4月1日）

イタ・ヴェークマンは、治療教育センターにおいて、またオランダではエマヌエル・ツァイルマンス・ファン・エミショーベン博士とともに、そして他の多くの場所において、秘教的な「クラス・レッスン」を行うことで、最も深い意味での共同体形成を支えようと努めていました。ルドルフ・シュタイナーの意図を継続し、彼女は他者、特に医学界の同僚たちが自らの存在の「カルマの次元」に目覚めるよう鼓舞することに心血を注いだのです。ヒルマ・ヴァルター博士に宛てた「私が何かを与えることができるとき、個々の人間と結びつきを築くことができるときこそが、私の唯一の強みなのです……」という言葉は、まさにその霊的、カルマ的な意味において理解されるべきものです。

人智医学の同僚たちのグループでギリシャや小アジアの神秘神殿跡を共に旅するという彼女の提案（オイゲン・コリスコが『この最も重要な冒険を本当によく準備できるよう、早く決断してくださるようお願いします！ 私は非常に熱狂しています。特にサモトラケを含めることができるなら。この旅は私たちに計り知れないほど重要なものをもたらすと確信しています。今、霊的世界から非常に多くのものが押し寄せています。それは多くのことから見て取れます。私たちに必要なのは愛と勇気だけです』 と熱狂的な反応を寄せたにもかかわらず、実際には一度も実現しませんでした）、第2ゲーテアヌムの開館時になされた印象的なエフェソス講演、そして「ステーケンベルフ収容所（Kamp de Stakenberg）」のためにヴァルター・ヨハネス・シュタインとともに執筆したペルセポネ劇――これらすべては、共同体の覚醒に向けてなされた試みでした。

それにもかかわらず、この歴史的な回顧は、イタ・ヴェークマンが周囲のほとんどの人々に本当の意味では届いていなかったのではないか、という印象を私たちに残します。彼女が望んでいたプロセスは、その大部分において具現化しなかったか、あるいは持続可能な社会的形成力を発展させるには至りませんでした。

全体として見ると、イタ・ヴェークマンにとって人智学的医師のグループは、最初からあまり一様ではなかったこともあり、非常に扱いにくいものでした。彼女がセクション指導者に任命されてから丸3年が経過した1927年12月末になって、ようやく最初の総合医学会議を組織することができたほどです。彼女は同僚のクルト・マーゲルシュテットに対し、会議の前日にかつての「若い医師たち」のグループを呼び集めて会合を持つよう、余裕を持って助言していました。その会合の2週間前、彼女は別のより詳細な手紙の中で、自らの意図を彼に次のように説明しています。

「望む医師たちは確実に集まるでしょう。そして私たちはともに、医学の分野で扱うべきすべての問いに取り組むことになります。長い講演を行うよりも、もっと人間的なレベルで出会うこと、誰もが自らの活動について語り、今まさに心に浮かんでいる問題を提起できる機会を持つこと、それが私の意図です。私はかつてともにいたこのサークル（若い医師たち）に発言の機会を与えるために、一度彼らだけで集まりたかったのです。しかしそれは、大人数のサークルで行っても同じようにうまくいくでしょう。なぜなら、私たち全員が医学の分野において、人間を癒やしたいという同じ切実な願いを抱いているからです。それこそが、私たち全員を一つに結びつけているものなのです」（1927年12月14日）

彼女が会議の幕開けに行った注目すべき演説のなかで、ヴェークマンはこの集まりが実現するまでにこれほど長い時間がかかった理由を説明しようと試みました

（「私たちはその方法論に習熟するための時間を必要としていました。治癒の方法（治療法）が成熟するためにも時間が必要でした。私たちは歩みを進める前に、自分たちの足場を固めなければならなかったのです」。

そこでは人間関係の困難についてはほとんど触れられませんでした。彼女の優先事項は、明らかに、医師たちが自らの心に近い医学的探求に取り組むことのできる、事実に基づいた有意義な交流の場を創り出すことでした。そこは、各自が他者の経験から学び、全員が自らを一つに結ばれていると実感できる領域だったのです

（「しかしそれは、大人数のサークルで行っても同じようにうまくいくでしょう。なぜなら、私たち全員が医学の分野において、人間を癒やしたいという同じ切実な願いを抱いているからです。それこそが、私たち全員を一つに結びつけているものなのです」）。

彼女は導入の最後に、未来を見据えた、そして彼女としては珍しく慎重で探求的な言葉を語りました。

「そして私は、私たちが互いに支え合い、ルドルフ・シュタイナーが私たち医師に期待されたことを達成できるよう、今こそ皆で一丸となって活動に励むことができるよう願っています。この集まりが、その方向への第一歩となるなら、私はこの上なく幸せです」

イタ・ヴェークマンの視点から見れば、その会議は大成功であり、まさにこの第一歩を象徴するものでした。医師たちが必要な医薬品、特にがん治療における自らの豊富な関連経験を共有し、より緊密に協働することに同意することは、少なくとも部分的には可能となったのです。より濃密な協働の成果はまもなく形となって現れました。1928年の春、イタ・ヴェークマンはアメリカの人智学的医師クリストファー・リンドナーに次のように書いています。

「クリスマスに開催された私たちの医師会議がどれほど実り豊かなものであったか、あなたも耳にされていることでしょう。その結果として、私たちは現地の医師たちとはるかに緊密に協働するようになっており、その成果はますます顕著になっています」

実務的なレベルではこのように当初こそ肯定的な進展があったものの、その後の数年間、ヴェークマンは自らが内面化し実践していた「医学セクション」の真の意味を、医師の同僚たちに伝えることに苦しみ続けました。彼女がルドルフ・シュタイナーとの結びつきの意識に基づいて活動していたことは、これまでに何度も指摘されてきた通りです。彼女自身の「内なる存在」は、医学セクションのそれと霊的に結びついており、この結びつきは不可分のものでした。

イタ・ヴェークマンが1942年夏にヴェルナー・パッヘに手紙を書く以前に、この関連する問題をいずれかの医師に対して十分に説明できていた（あるいは説明しようとした）可能性は極めて低いと言えます。彼女の崩御のわずか8か月前に書かれた、昨日私が読み上げたあの言葉は、1925年3月30日（シュタイナーの逝去日）以来、彼女が医学セクションの活動の多面的な側面に対する自らの個人的な全体責任という問いと、絶えず格闘し続けていたことを明かしています。

少なくとも彼女と非常に親しかった医師の同僚たちに対して、彼女は、自分自身ひいてはルドルフ・シュタイナーの存在と結びついていた「セクション」という概念のより深い層や、セクション活動の霊的な次元に対する意識を目覚めさせようと、様々な試みを行っていました。しかし、他者を遠ざけてしまわないようにするために、彼女自身の確信に反するような歩みを容認してしまうことも度々あったのです。1930年1月7日、彼女は友人であり同僚でもあったヴィレム・ツァイルマンス・ファン・エミショーベンに次のような手紙を送っています。

「あなたが発たれた後、私は医学セクションがどのように機能すべきか、そして私に何が期待されているのかについて、ずっと深く考えていました。あなたが私に、復活祭（にオランダで開催される予定の医学イベントに同意するかどうかを尋ねられたことを思い出しました。私は、ひとつの現地の機関が医学イベントを組織することが果たして可能なのか、それともそれらは医学セクションから発せられるべきなのか、深く熟考しました。

他の医師たちと協議した結果、私が到達した結論は、創始のイニシアチブは医学セクションからのみ発せられるべきであり、セクションこそがイニシアチブをとって様々なイベントを開始するのだということです。各機関（病院など）の医師たちは医学セクションを支持することになりますが、彼らが自らの判断で会議を組織することはできません。もしこれを許してしまえば、シュトゥットガルトのパルマー博士にも、イェーナのマーゲルシュテット博士やピルグリムスハインのケーニッヒ博士と同じように、会議を組織する権利が生じてしまうことになります。

その場合、関係性が逆転してしまいます。なぜなら、医学セクションはこれらのイベントを自ら始動させるのではなく、イベントの組織運営を『手伝う』立場になってしまうからです。医学セクションが、現地の病院に全面的に支えられた形でオランダで医学会議を開催できないと言っているわけではありません。しかし、イニシアチブはまずセクションから発せられなければならず、その上で現地の病院がそれを全面的にサポートすべきなのです。

ガルヤール博士がオランダ側から会議を組織し、その結果、私の意志に反して私が参加を妨げられたとき、私は何かが正しくないという非常に強い感覚を抱きました。現在、私は復活祭に何か医学的な催しを行うことについて、全く異なる考えを持っています。復活祭において、私たちは『ラファエル的要素』を祝うべきです。そして、どこか周辺の地方ではなく、ここゲーテアヌムにおいて、全員の精力的な支持のもとに医学会議を開催すること以上に美しいことは私には想像できません。

3月にベルリンで小規模な会議が開催されたばかりですから、オランダという周辺の地方で再び別の医学会議を開催することは勧められませんし、会員たち、あるいは医師たちもこれを本当には理解できないだろうと私は考えています。また医学セクションとしては、隔週で私たちのところから医師を一人ベルリンへ派遣して講演を行わせること、ここゲーテアヌムでの月曜の夜の集いをこれまで通り継続すること、そして以前行

われていたように、ライプツィヒ、ケルン、イェーナの各都市で4週間ごとに医学講義を提供することを意図しています。
ただし、これらすべてのイニシアチブは医学セクションから発せられなければならず、私はそのための必要な準備を整えました。これについてあなたが同意されるか、あるいは他に提案があるかどうかをお尋ねしたいと思います。あなた、シックラー、コリスコ、グラス、そしてシュタイナー博士によって最初に医学セクションに属するものとして任命された他の医師たちの同意が得られ次第、私はすべての医師たちに通知して彼らの支持を確実にするつもりです」1

しかし、ヴィレム・ツァイルマンス・ファン・エミショーベンンは同意しませんでした。少しも同意しなかったのです。わずか1週間後、彼は次のような見解を書き送りました。

「この手紙はタイプライターで口述筆記させるよりも自筆の方が良いと判断しましたので、私の悪筆が読めることを願っています。あなたへのお返事がこれほど遅くなってしまったのは、1月7日付のあなたのお手紙について、まず考えなければならなかったからです。その内容の多くは私にとってあまり明確ではなく、大変残念ながら、最も主要な側面が私には今なお理解できていないということをお伝えしなければなりません」

（1930年1月7日、イタ・ヴェークマンからヴィレム・ツァイルマンス・ファン・エミショーベンへの手紙目）

「あなたが復活祭にアルレスハイムで医学会議を開催することを計画されているのは、非常に素晴らしいニュースです。これほど大きな喜びはありません。それは私が長年抱いてきた願いの成就です。私の積極的な支持をあてにしてください。これにより、ハーグでの医学会議の計画（これは復活祭ではなく、聖霊降臨祭に予定されていたものですが、今となってはどちらでもよいことです）は不要になります。
しかし、私にとって全く合点がいかないのは、創始のイニシアチブが医学セクションから『のみ』もたらされなければならないという点です。イニシアチブが医学セクションからインスパイアされるべきものであることは明白ですが、例えば、現地の医療生活にとってハーグでの医学会議が有益であると私が感じ、その計画をあなたと話し合い、あなたがそれを良いと認め、プログラムがあなたと合意され、そうした協働の中から会議が立ち上がったとするなら、それもまた医学セクションからインスパイアされたイシアチブとは言えないのでしょうか。
昨年の聖霊降臨祭にルドルフ・シュタイナー・クリニックで行われた会議の準備が不十分だったというのは、また別の問題です。それについては、開催に至るまでの5週間のあいだ私が国外におり、当時のガルヤールに処理しきれないほどの仕事を課してしまった私に責任があります。しかし、これは問題の本質とは何の関係もありません。計画も、プログラムも、すべてがあなたと話し合われていました。その何が間違っていたというのか、私には分かりません。会議を開催するのは、どこか名もなき機関ではありません。その機関は単に会議の会場にすぎないのです。イニシアチブは、医学セクションに属する医師の一人としての私から発せられました。もしセクションの医師が――その医師に委ねられた立場の内部において――医療活動のためのイニシアチブを立ち上げることすら許されないのだとしたら、私が今なおセクションとどのような関わりを持っているのか、よく理解できなくなってしまいます。私から発するいかなるイニシアチブも、セクション指導者であるあなたと話し合われなければならないということは、言うまでもありません。
すべてのイニシアチブが医学セクションから発せられなければならないとあなたが書かれるとき、私には、医学セクションとは一体誰であり何であるのかが全く分かりません。あなたは、セクション指導者であるあなただけがイニシアチブをインスパイアできるとおっしゃっているのでしょうか。医学セクションのためにあなたから多くのイニシアチブがもたらされるのは、私の見解としては素晴らしいことですが、セクションに結びついている私たち他の医師たちが、同じようにイニシアチブを立ち上げてはならないという理由が分かりません。そのような場合におけるあなたの任務は、提案されたイニシアチブが適切な場所にあるか、全体の計画と合致しているかなどを判断することであるはずです。
私はあなたの問いに理解が及ばないため、同意するかどうかという問いに答えることができません。あなたがこの件について私に説明してくださる可能性を見出されることを、心から願っています」（1930年1月14日）

イタ・ヴェークマンにとって、その説明を行うことが可能であったかどうかは疑わしいと言わざるを得ません。その後の往復書簡の続きや、セクション活動のさらなる展開を見ても、明確な解決は示されていないからです。

医師ヴィレム・ツァイルマンスは、その10年前、27歳のときにルドルフ・シュタイナーへの道を見出していました。シュタイナーとの最初の出会いは彼の存在の根底を揺るがし、それ以来、彼は自らの人生を人智学と人智医学のために完全に捧げました。早くも1922年の春、彼は独立した病院を立ち上げる計画をシュタイナーに語っており、ルドルフ・シュタイナーも彼を励ましていました

（「あなたが若いということは全く問題ではありません。なぜなら、あなたは毎日、一日ずつ歳を重ねていくのですから。そして、あなたが人智学についてまだ多くを知らないということも問題ではありません。毎日より多くのことを理解していくようになるからです」）。

シュタイナーは、人智学的医師として活動を始めたばかりの最初の数年間、ツァイルマンスに対して、定期的に助言をくれるであろうイタ・ヴェークマンの方向を明確に指し示していました（「それから博士は非常に厳粛な面持ちになり、私をヴェークマン博士の方へと向けられたのです。『彼女こそが、治癒（ヒーリング）のための正しい勇気を持っているからだ』と」）。

ツァイルマンスはオランダのアントロポゾフィー協会の総書記へと昇りつめ、1924年9月にはルドルフ・シュタイナーによって医学セクションの秘教的な内報サークルへと召致されました。シュタイナーの逝去後、ツァイルマンスはスケフェニンゲン近郊にルドルフ・シュタイナー・クリニックを開設し（1928年）、ヴェークマンが医学セクションの指導者から排除されるというドラマチックな事件の最中も、彼女を身近で支え続けました。公開書簡において、彼は彼女の「ペルセポネ劇」を拒絶し、彼女が抱いていたセクションに対するより深い理解も、おそらく彼の生涯を通じて同様に到達不可能なままだったのかもしれません。それにもかかわらず、彼は全身全霊でイタ・ヴェークマンの側に立ち続けたのです。

神秘神殿跡への旅へのヴェークマンからの招待に対し、オイゲン・コリスコは次のように返答していました。「今、霊的世界から非常に多くのものが押し寄せています。それは多くのことから見て取れます。私たちに必要なのは愛と勇気だけです」

愛と勇気――それこそが、ますます差し迫ってくるすべての問題に対処するために、イタ・ヴェークマンがますます必要としていたものでした。アントロポゾフィー協会内部から、そして一部の医師たちからも、彼女に対する憎悪に満ちた申し立てがなされていたのです。最終的に、彼女は同僚のイルゼ・クナウアーだけを伴ってギリシャへと赴きました。出発を目前に控えた1932年3月10日、彼女は一般人智学協会の他の理事たちに次のように書き送っています。

「ルドルフ・シュタイナー博士の没後7周年というこの時期に開催される総会に、私は肉体的にも精神的にも参加できる状態にないことを痛感しています。回復のための時間をとることで、ここ数年間の出来事から少し距離を置くことができるよう願っています」

その後の数か月間、彼女は医師や治療教育教師の友人たちに、広範囲にわたる旅の報告書を送り続けました。これらの報告からは、自らの活動の大部分が根づいていたその霊性の地へと、イタ・ヴェークマンがいかに強烈に再接続を求めていたかが伝わってきます。それは、20世紀という条件下における医療的・社会的な営みであり、医学に対する彼女の確固たる、そして気高き献身によって特徴づけられるものでした。

5月26日、ヴェークマンはフリード・ゴイターに次のように書いています。

「ギリシャやこれらの遺跡を訪れることは不可欠です。たとえ今、古代の神秘の遺跡には廃墟しか残されていないとしても、風景は今なおそこにあり、これらの古い時代に多くを経験した人間の心もまたそこにあり

ます。（……）もし魂がその対比に耐えるに足る強さを持っているなら、当時と現在の間に気づかされるその対比は、新しい衝動を呼び起こしてくれます。さもなければ、その対比は人を打ちのめしてしまうほどのものでしょう。

トルコ政権とその統治が、かつてそこに存在したかもしれないすべてを破壊し尽くしてしまったエフェソスにおけるこの対比は、言葉に尽くせず、描写しがたいものです。もし、現在の無知な雰囲気を、かつてアルテミス神殿の周囲に生きており、彼女の英知によってインスパイアされていたものと比較するなら、人は激しい涙を流すか、あるいは激しい怒りに駆られるか、さもなければ新しい十字軍を呼びかけたいと切望することでしょう。

しかし、そんなことをして何になるというのでしょう？ アルテミス神殿と結びつきを持つ人間たちはアントロポゾフィー協会の中にいるというのに、彼らはそれが何についてであるのかさえ明確に知らず、冷酷にも精神（霊）を殺しつつあるのです」

イタ・ヴェークマンが未来の医療共同体に抱いていた最後の希望の一つは、おそらく1930年代の初頭における、人智学に関心を持つ医学生たちでした。何年もの間、若く決意に満ちた学生のグループが、彼女のもとで、あるいは彼女のクリニックでのコースに参加していました。ヴェークマンは未来の希望を彼らに託していたのです。1933年5月12日に彼女が同僚のハインリヒ・ハルトに宛てて書いた、懸念に満ちた手紙のさなかに、突如として次の一節が現れます。

「これまでに3〜4年にわたって、年に2回、私たちの定期的なコースを受けてきた若い学生たち、そのうちの半ダース（6人）ほどがここバーゼルでさらに6か月間学ぶことになりますが、彼らはいつの日か、ルドルフ・シュタイナーが未来の医師に期待した通りの方法で行働する医師のグループとなるでしょう。彼らの最大の関心は、いかにして自分自身の診療所を持つかということではなく、いかにして共同体を確立し、その共同体を通じて医学をより高い次元へと引き上げるか、ということになるはずなのです」

その10年前、ハインリヒ・ハルトはヘレーネ・フォン・グルネリウスを取り巻く医学生のグループの一員でした。ルドルフ・シュタイナーは彼らを高く評価していましたが、他の人智学的医師たちと同様に、彼らもまた真の「意志の共同体」へと身を捧げることができませんでした。かつての「若い医師たち」は皆、優れた開業医となっていましたが、一つのグループとしては多かれ少なかれ失敗しており、そのため「医学をより高い次元へと引き上げる」ことはできなかったのです。そこでヴェークマンは、今や親しい交流のあった新しい世代に望みを託しました。

遅くとも1933年以降、昨夜の講義でも触れた、彼女のイギリスにおける人智医学の計画が、この若者たちとの関係において重要な役割を果たし始めていました。彼女は、この若い人々が、イギリスを経由して人智学と人智医学の「守護者」となるために潜在的に必要な「ミカエル的な意志の要素」を携えていると考えたのです。

1933年の春、ドイツにおける破滅的な展開がもはや引き返せないものであることが明白になった後、イタ・ヴェークマンは学生たちとともにイギリスへ旅し、ルドルフ・シュタイナーがかつて活動し重大な決定を下した重要な場所へと彼らを連れていくことを決意しました。彼女は、全員とは言わないまでも、彼らのうちの誰かがイギリスに定住することを決意してくれるよう触発できることを願っていたのです。1933年6月に書かれた手紙の中に、次のような示唆が見られます。

「多くの若い医師たちが、（……）国外に自分たちの可能性を創り出せるかどうかを熱心に知りたがっています。8月初旬にここアルレスハイムで開催されるコースの後、私は新しい医学的衝動の基盤を整えるために、小グループを伴ってイギリスへ旅することになるかもしれません」

その数週間前、彼女はこう書いていました。

「これらの若い医師たちとともに、イギリスにおいて計り知れないほど新しい衝動が沸き起こる可能性があります」（1933年6月22日）

フリード・ゴイターへの手紙の中で、彼女はもう少し明確に、自らの実際の評価と意図をよりはっきりと説明しています。1933年7月18日、彼女はこの記念すべき「休暇旅行」の参加者たちについて彼にこう書き送りました。

「この学生たちのグループは、みな学業が進んでおり――何人かはすでに課程を終え、他の者も半ばまで達しています――、彼らはドイツの状況を受け入れることができず、パリ、オランダ、イギリス、あるいはアルザスに選択肢を求めたいという強い衝動を抱いています。彼らは軽率になることなしに、世界の中にしっかりと立ち、自らがどこにいようとも、国籍に関係なく、ミカエルを直接の指導者として仰ぐ新しい共同体に参加することを望む人間を周囲に集めたいと考えているのです。
この若者たちは、ルドルフ・シュタイナーがブレスラウでの青年への講義の中で、伝統を覆し新しい社会的構造の創造へと乗り出す勇気を持たねばならないと指摘した際に、若い世代に期待したものをまさに備えています。そのために必要なものは三つある、と博士はおっしゃいました。第一に勇気、第二に勇気、そして第三に――やはり――勇気である、と。そして今、若い人々は計り知れないほど大きな決断に直面しています。なぜなら、彼らがこの勇気を見出し、これから到来せねばならない偉大な活動に取り組み、それを担っていくか、あるいは安易な道を選んで古い伝統へと逆戻りするか、そのどちらかだからです」

ナチス・ドイツにおける学生生活が、現地の状況の暗黒によってますます影を落とされていたこの時期、ヴェークマンによってイギリスを案内された若い人々は、この素晴らしい旅を喜び、感謝していました。しかし、彼らの回想録が明かしているのは、イタ・ヴェークマンが望んでいたことを察知し、実践に移すことが彼らにはできなかったという事実です。彼らのうち、ユダヤ系の血を引いていたローター・マルクスだけがイギリスに残り、後にそこで医師としての活動を開始しました。

イタ・ヴェークマンが医療センター（ロンドンのケント・テラス）の構築に多大な努力を傾け、大きな計画を抱いていたそのイギリスにおいてさえ、彼女は1933年から1934年にかけて、そのすべての希望を断念せねばなりませんでした。1933年2月、彼女はマドレーヌ・ヴァン・デフェンターにこう書いています。

「世界がこれほど悪化しているのですから、まるで巨大な大惨事が起きる前に、すべてを急いで成し遂げなければならないかのようです。私たちにケント・テラスがあるのは恵みですが、ここの医師たちも他と同じように眠りこけています」（1933年2月25日）

そして、それを取りまとめるかのように、彼女はその1年後にヒルマ・ヴァルターへ次のように書き記しました。

「イギリスでの私たちの活動が、現在のやり方では繁栄しないことも分かっています。なぜなら、この医学セクションに本当に関心を持っている者が誰もおらず、私がいない間、誰もこの活動を分別を持って継続しようとしないからです」（1934年2月1日）

ナチスがドイツで権力を掌握した直後、ヴェークマンは多くの困難に直面しながらも、最も親しい医師の同僚たち、治療教育の教師たち、そして厳格に選抜されたわずかな個人とともに状況を議論するための集まりを招集すべく、全力を尽くしました。

1933年3月5日から29日の間に、彼女はヴィレム・ツァイルマンス、オイゲン・コリスコ、カール・ケーニッヒ、ベルナルト・リーフェグート、クルト・マーゲルシュテット、ハインリヒ・ハルトらに少なくとも43通の個人的な手紙を送り、4月初旬にベルリン、あるいは必要であればシュトゥットガルトで、全員が出席するこの国際会議を手配しようとしたのです。

「他国の友人たちはもちろんのこと、私たちのドイツの友人たちにとっても、前途には確実に困難な時代が横たわっています。ですから私たちは、本当にお互いを理解し、助け合おうとする人々の連合戦線（一元的な前線）を確立するために、できる限りのことをしなければなりません」（ベルナルト・リーフェグートへの手紙、1933年3月7日）

「私はこの会議のために、お互いに協働する善き意志を持ち、シュタイナー博士から課された衝動に完全かつ真に結びついていると感じられる種類の人々を選ばなければなりませんでした」（ヘルベルト・ハーンへの手紙、1933年3月13日）

「（……）もし皆さんが、私たち全員の中に生きているこの衝動を前へと推し進めるよう努めてくださるなら、私たちはともに秘密裏に対話を交わし、私たちの未来の道の方向性を決定することができるでしょう」（ヘルベルト・ハーンへの手紙、1933年3月25日）

障害が生じ、一部の同僚たちが出席不可能、あるいは出席への消極的な姿勢から辞退したとき、ヴェークマンは彼女の抱く懸念の緊急性を彼らに理解させようと、何度も何度も試みました。上記の限られた期間のなかに、最大で6通（！）もの手紙を受け取った者もいたほどです。今なお残されているこれらの手紙を研究すると、イタ・ヴェークマンにとって、これらすべての重要な人々が「一堂に会する」ということがいかに決定的な重みを持っていたか、鮮明な印象が残ります。彼女は議題についてはほとんど言及しませんでした。本質的だったのは、出会うこと、集まって対話をするという共同の決定そのものだったのです。

3月22日、ヴィレム・ツァイルマンス・ファン・エミショーベンから、他の先約（義務）があるために出席できないという謝罪の報せが届いたとき、彼女は折り返しの便で彼にこう書き送りました。

「私はこの集まりが極めて重要であると考えていますし、時代がますます過酷になっている以上、すべての友人も確実に同意してくれるはずです。いたるところで独裁政治が始まるでしょう。私たちはどうにかして、生き残るための道をともに見出さなければなりません。人智学者たちが自ら団結することはほとんど期待できませんから、それを行うために意識的な人々のグループが集まらなければならないのです。もしあなたがそこにいてくれないなら、この集まりはひとつの傷を負うように私には思えます。その結果として、この構造に必要な生命エネルギーが流れ込むことができなくなってしまうのです」（1933年3月22日）

同じ日、彼女はマルガレーテ・ボックホルトにこう書き記しています。

「（……）しかし、ツァイルマンスは重要な会議への出席を妨げる何かをいつも抱えており、取り組み全体が再びひとつの傷によって苦しむことになるでしょう。人が何か善きことを達成しようと決意しているときには、あの『傷ついたアンフォルタス』 [注：聖杯伝説に登場する、癒えない傷を負った聖杯王] がいつも忍び込んでくるのです」（1933年3月22日）

この会議について、決定的なことは何も分かっていません。そもそも開催されたのかどうか、もし開催されたとして何が話し合われ、どのような結果をもたらしたのかすら不明です。しかし、ヴェークマンの切迫した招待状の数々は、ひとつの兆し、あるいは「宿命のルーン文字（ destiny rune）」として――純粋な意図と結晶化された意志の力の表明として――今なお保存されています。

この初期ナチス時代――こうしたテーマについての文通がまだ可能だった時期――の他の多くの手紙は、イタ・ヴェークマンが開業医の同僚たち、とりわけ人智医学の医師たちに対して、能動的な人道主義的抵抗（レジスタンス）を明らかに期待していたことを物語っています。1933年3月に彼女がミュンヘンの医師エミー・ギースラーに宛てて書いた手紙には、次のようにあります。

「あなたにもう一つ伝えておきたいことがあります。私は世界全体の情勢を大いに憂慮しています。なぜなら、事態の現在の発展の仕方を見る限り、未来に多くの善きことがもたらされるとは思えないからです。私

は、このすべてを経験しなければならない子どもたちのことを特に想っています。一方における（ナチスによる）大げさな幸福の喧伝と、その一方で繰り広げられる、ユダヤ人など自分たちとは異なる思想を持つ人々への憎悪に満ちた迫害。ですから私は医師たちに対し、子どもたちをドイツから避難させられるよう、できる限りの手を尽くすことを心からお勧めしたいのです。私たちはここスイスで、子どもたちを愛をもって受け入れるということを忘れないでください」（1933年3月17日）

ヴェークマンは当初から、政治的状況とその内包する危険性を明晰に見抜いていました。

「人々は盲目であり、その上さらに愚かですが、現時点で時代の奔流に対して私たちができることは何もありません。判断力を保っている人々であっても、ある日突然、家に警察が押し寄せて強制収容所へと送られたくなければ、声を上げることはできません。今できることのすべては、多くの者がドイツを去り、後になってドイツに有益な影響をもたらすことができるよう国外で体制を立て直すこと、そして、国内に残る人々は、継続性が維持されるよう、静かに、かつ慎重に、できる限り自らの人智学的活動を続けていくことです」（ヒルマ・ヴァルターへの手紙、1933年4月28日）

1933年6月にイギリスへ宛てた手紙の中で、彼女は激しい怒りとともに、ニュルンベルクのレオンハルト・シェンクを取り巻く多数の人智学的医師たちが人智学協会を脱退し、ナチス党（NSDAP）に入党したことを報告しています。さらに10月、「ドイツ人智学的医師連盟」を設立する計画を耳にしたとき、彼女は完全に不意を突かれ、恐怖に慄きました。

人智学的な権益を守るためと称して、その設立が発表されたのは、1933年10月7日に「国家医師指導者」のゲルハルト・ヴァグナーが「生物学的医学」を用いる医師たちの「画一化（ナチス思想への同調統制）」を呼びかけたわずか3日後のことでした。医師のハンス・ラッシャーが同連盟の代表に任命されたのも同じ目的のためであり、彼はナチス党の中央指導部と緊密なつながりを維持していたのです。

それまで、ゲーテアヌムの秘教的な理事会（Vorstand）のメンバーであり医学セクションの指導者であったイタ・ヴェークマンには、このような連盟の準備に関する情報が一切もたらされていませんでした。

その2年前の1931年4月、すでに一部の医師の同僚たちが「ゲーテアヌムにおける自由医学ワーキンググループ」を設立し、週刊誌『ダス・ゲーテアヌム』に広告を掲載していました。彼らは、医学セクションとともに活動していくことは不可能であるとみなしていた医師たちだったのです。

最後の病に倒れる3か月前、ルドルフ・シュタイナーは治療教育の教師たちと医師たちに向けて次のように語っていました。

「（……）将来、アントロポゾフィー協会は、その責任を果たすか否かという重大な決断に直面することになるでしょう。皆さんは信じないかもしれませんが、現在起きているすべてのことからそれは明白です。すなわち、クリスマス再基礎財団会議が現実のものとなるはずだった時、出席していた個々の人間の『質』に関する例外性（排他性）を伴って、これらの責任は厳格に輪郭づけられました。それは皆さんの一部にはむしろ残酷なものに映ったかもしれません。
しかし、ゲーテアヌムの理事会はまさにその基盤の上に形成されたがゆえに、この理事会は、アントロポゾフィー協会において起きているあらゆる事柄の文脈における『最高権威』以外の何物ともみなされることはできません。考慮されるべきすべての詳細な事柄に関して、理事会が最高権威なのです。将来、人智学運動の内部でこのことが理解されるようになるでしょうか、それとも理解されないまま終わるでしょうか」

1933年10月、この新しい「ドイツ人智学的医師連盟」についてついに耳にしたとき、イタ・ヴェークマンはシュトゥットガルトにいたオイゲン・コリスコに手紙を書き、彼の意見を求めました（「これについてあなたがどう考え、どのように応じたのか、あるいは応じなかったのか、ぜひ意見を聞かせてください」）。彼女はこう続けました。

「もしこれが本当に起きるなら、それは致命的としか言いようのない連帯を証明することになります。何よりも、『生物学的（医学）』という言葉が人智学と結びつけられてはならないからです」（1933年10月13日）

コリスコはその回状を受け取ってはいませんでしたが、その計画については知っており、彼もシュトゥットガルトの他の多くの同僚たちと同様に、それを断固として拒絶していました。

「私はあなたに完全に同意し、この計画を誤りであり、見当違いなものであるとして拒絶します。（……）私たちは、医療活動の極めて明白かつ単純な霊的課題を越えて進んでしまうことを避けなければなりません」（1933年10月22日）

ドルナッハにおけるイタ・ヴェークマンへのますます憎悪に満ちた攻撃は、これらの年において最高潮に達していました。1934年3月、彼女を医学セクションの指導者から更迭し、一般アントロポゾフィー協会の理事会から排除する計画が明白になったまさにその時、イタ・ヴェークマンは重い、命に関わるほどの危険な病に倒れました。彼女が高熱でベッドに伏せっていたとき、彼女はオランダの若い同僚であるベルナルト・リーフェグートに次のように書き送っています。

「私には、これまで行ってきたのと全く同じ方法で活動を継続していくこと以外に、何の計画もありません。それらの任務はシュタイナー博士によって割り当てられたものであり、私たちはそれぞれ自らの方法で、できる限りのことを行うのです。シュタイナー博士の手配に背くようなことは、博士への軽蔑に値します。もしこのような事態（更迭）が起きることになっているのなら、それはカルマによって決定され、自然に起きることでしょう」（1934年3月13日）

この後、数か月に及ぶ病魔との闘いを経て、彼女は南方（地中海地方）へと旅立ちました。それは彼女の伝記において極めて本質的な意味を持つこととなるコンスタンティノープルとパレスチナへの滞在であり、そして、アルレスハイムとドイツでの活動を断固として継続するという決意の旅でもありました。彼女は自らの不本意な更迭の2か月前、1935年2月にリーフェグートに宛てた別の手紙の中で、このことに触れています。

「人智学協会内部の危機は、ゲーテアヌムからより遠く離れた場所よりも、ここアルレスハイムにおいて、はるかに深刻な影響を私たちにもたらしています。私たちに向けて送られてきた、この凄まじい憎悪と誤解の波に毅然と立ち向かい、それらに屈しないためには、本当に多大なる強さが必要です。
それにもかかわらず、私は私たちが弱さに屈してはならず、自らの活動を、特にここアルレスハイムにおいて継続していかなければならないと確信しています。（……）シュタイナー博士はこの方向性を指し示す特別な示唆を与えられました。私は、特定の暗黒の諸力が望んでいるような方法で、私たちのアルレスハイム・クリニックに一種の種子として植えられたものが破壊されるのを許してはならないという、強い内的な義務を自らの内に抱いています。その代わりに、私たちは自らの足場を固め、私たちの存在を通じて、霊的に繰り広げられているこの戦いに対するひとつの『均衡』をここに確立するよう努めなければならないのです」（1935年2月14日）

その一週間後、彼女はイギリスへ向けてこう書き記しました。

「絶え間ない悪魔的な攻撃が平穏をかき乱している、このドルナッハ＝アルレスハイムという奇妙な雰囲気の中に座っていると、自らの均衡を保ち続けることは容易ではありません。そして、人智学協会内部で起きているこの不快な出来事から、その隔たりがあるというだけで自らを守ることができるような、遥か彼方の場所へと立ち去りたいという深い切望が湧き上がってくるのです。それにもかかわらず、私は自らの態度を通じて、もはや私個人とは何の関係もないこの戦いを、私たちの活動から遠ざけるよう努めるつもりです」（1935年2月21日）

これらすべてがついに終わりを迎え、イタ・ヴェークマンが4人の「同僚医師」たちによって医学セクションの指導者から交代させられた（更迭された）とき、彼女はヒルマ・ヴァルターへの手紙にこう書き残しています。

「アントロポゾフィー協会内部の多くの人々にとって、言葉に尽くせない10年間の試練がこれでようやく幕を閉じました。当時のことを振り返ると、これらの事柄が今や私たちの過去のものとなったということに、ただただ安堵を覚えずにはいられません。（……）私はもちろん、ルドルフ・シュタイナーを裏切ることなどできません。ルドルフ・シュタイナーが医学セクションのために設定された課題を継続し、ルドルフ・シュタイナーが自らの精神科学の一環として創始されたこのセクションに対して、どこまでも忠実であり続ける以外に道はないのです」（1935年5月3日）

あの破滅的な分裂の総会からわずか10日後、彼女はベルリンにいた若い同僚のイダ・ベーレに対しても、ドルナッハでの出来事にかかわらず、クリニックとそれに付随するすべての医療活動をすぐ近くのアルレスハイムにおいて継続していくという決意を通知しました。彼女はこう付け加えています。

「私の決定について尋ねてくる人がいたら、だれにでもそのように伝えていただいて構いません。私は誰の自由に対しても、いかなる方法でも干渉したくはありません」（1935年4月24日）

ゲーテアヌム周辺を襲ったあの人間的な大惨事（内紛）は、そのような（すべてを破滅させる）潜在的な危険をも孕んでいました。これが現実のものとならなかったのは、ひとえにイタ・ヴェークマンの功績によるものです。彼女は「特定の暗黒の諸力」が自らのクリニックに居座ることのないよう、個人的に細心の注意を払いました。クリニック内では、ヴェークマンの敵対者やゲーテアヌムの理事会（Vorstand）に対して、感情的な報復（非難や嫌がらせなど）を行うことは何人たりとも許されなかったのです。

1930年代の初頭、さらなる医学的養成のためにアルレスハイムにやってきた若い看護師エルス・アイヒラーは、人智学協会内部の闘争について何も知りませんでしたが、クリニックの内部では、すぐ近くのゲーテアヌムで起きている深刻な問題について、ただの一言も耳にすることはありませんでした。そのため、彼女は自らの活動に完全に、かつ献身的に身を捧げることができ、この環境は事実、極めて実り豊かな成果をもたらすこととなったのです。もし、若い同僚たちや患者たちをこうした「魂の戦い」の中へと引きずり込んでいたなら、人智医学にとって、そしてヴェークマンが語っていたあの「均衡」にとって、破滅的な結果をもたらしていたことは想像に難くありません。「私は誰の自由に対しても、いかなる方法でも干渉したくはありません」

イニシアチブ（活動の火）を絶やさないためのあらゆる努力がなされたものの、ドイツや中央ヨーロッパにおける政治的状況のせいで、活動を継続することは極めて困難であると判明していきました。誕生したばかりの若い民主主義国家が次々と崩壊し、ナショナリズムとファシズムが蔓延していきました。自由が許される余地はますます狭まっていったのです。投獄や国外追放、不妊手術、そして強制収容所への移送の時代が始まりました。イタ・ヴェークマンはこれらすべての事柄を知っていました。彼女は常に警戒を怠らず、現在の情勢について正確に把握していたのです。国際的かつ世界市民的な方向性を持っていた彼女自身の活動は、ますます多くの制限にさらされ、次第に不可能なものへと追い込まれていきました。

だからこそ彼女は、医師たちを一つにまとめようと、それまで以上に強烈に、そして休むことなく努めました。そして彼女は、その絶え間ない努力のなかに、すでにこの世を去った同僚たちの存在をも含めていたのです。

「最近、私たちの医療共同体において、再び大きな損失を被りました。あなたも確実に知っておられる、シュトゥットガルトで広範囲な診療活動を行っていたグライル博士が、3か月の闘病の末に亡くなりました。彼は健康な体でイタリアへ休暇旅行に出かけ、そこで病に倒れたのです。重篤な状態であったため、スイスのア

スコーナまでしか運ぶことができませんでした。私たちは、彼がロカルノの病院に入院するまでのしばらくの間、私たちの『カーサ・アンドレア・クリストフォロ』で彼を預かっていました。

ヘレーネ・フォン・グルネリウスのときも同様でした。彼女も休暇に出かけ、病気になって戻ってきましたが、ドイツへは帰りたがりませんでした。グライル博士もまた、ヒトラーへの忠誠の誓いのせいで、ドイツに戻るという考えを激しく嫌悪していました。その誓いは彼の良心にとって途方もなく大きな重荷となっており、彼は医師たちを脅かすこの脅威から逃れる方法を永遠に探し求めていたのです。これらすべての事柄が、本来であれば克服できたはずの病魔を退けるための体力を、彼から奪う要因となってしまったのかもしれません。

グライル博士は誠実な同僚であり、私たちの会議には一度も欠かさず出席し、休暇は常に私たちのところで過ごしていました。彼の逝去は私たちにとって大きな損失です。この点において、人がどれほど多くのものを耐え忍ばねばならないのか、本当に過酷なことだと感じています」（ヴィレム・ツァイルマンス・ファン・エミショーベンへの手紙、1937年8月4日）168

1923年から1924年にかけての若い医師たちのグループの「魂」であったヘレーネ・フォン・グルネリウスは、1936年12月17日、クリニック（アルレスハイム）にて息を引き取りました。彼女はまだ39歳という若さでした。イタ・ヴェークマンは、専門職としても個人としても、グルネリウスを極めて高く評価していました。ヴェークマン自身が彼女の看病を引き受け、最期の数日間は彼女の病床を一時も離れませんでした。彼女の没後数日間にわたり、ヴェークマンは多くの医学界の同僚たちへ、この（過酷な）宿命を描写する注目すべき手紙の数々を書き送っています。

「私たちの医学が、もう一度まばゆく輝き出しますように！」――イタ・ヴェークマンは1935年1月15日、ヒルマ・ヴァルターにそう書き送っていました。それから4年後の1939年1月18日、最終的には金銭的な性質をも帯びることとなった、深刻化する困難のただ中で、彼女はスイスの同僚であるエルンスト・マルティに次のように打ち明けています。

「物事を正しく成し遂げることは、特にこのような時代においては至難の業です。ですから私は、ここでの活動をいかにして適切かつ賢明な形で帰結させるかを考えています。それによって、もし私に許されるならば、別の場所でその種子を霊的に蘇らせるため、あるいは、もしそれが不可能であるなら、自分自身の内なる発展のために静かに働き続けるためです」

1940年の春以降にイタ・ヴェークマンの身に起きたこと、それは、彼女の医療活動と「完全な霊的集中」への傾倒が一つに融合していくプロセスでした。

その15年前に大規模に開始されたこと――すなわちスイス、ドイツ、オランダ、イギリス、オーストリア、フランス、イタリア、スウェーデン、さらにはアイスランドの治療センターをも含む、新しい病院、医薬品、治療教育センター、そして医師連盟を伴った「人智医学のための国際的なイニシアチブ」――は、完全に立ち往生し、急速に瓦解しつつありました。アルレスハイムのクリニックは、もはやヴェークマンがイシアチブをとり、無数の糸（連絡網）を自らの手に握りながら手紙を送り出していた、あの印象的な世界市民的な中心地ではありませんでした。そこは、財政難に喘ぎ、スイス国内でも広く無視されている、ひとつの小さな病院にすぎなくなっていたのです。生命はそこから引き退き、ほとんど単なる記憶の影と化していました。

一種の「内なる亡命」のように、イタ・ヴェークマンは今後の展開を見守りながら、スイス南部ティチーノ地方のアスコーナ近郊にあるカーサ・アンドレア・クリストフォロで、まるで流刑地にいるかのような、瞑想的で深く精神的な（霊的な）生活を送っていました。第二次世界大戦の勃発から12か月が経過した1940年9月、彼女はヴェルナー・パッヘに次のように書き送っています。

「1年前、私たちはまだ完全な不確実性のなかに生きていました。そして、この不確実性がいまなお拭い去られたわけでは決してないにせよ、私たちはこれから迎える1年をどのように生きていけばよいのか、その道筋を見定めることができています。私たちは、外に向けて能動的に行動を起こす段階にはまだ達していませ

ん。この課題のための時期はまだ熟していないのです。ですから私たちは、互いに分かち合っているこのコミュニティの一員として、それぞれが自分の場所にとどまっています。
　正しい方法で自己修練を遂行する可能性を持つことこそが、私たちの活動が継続し、後にドイツから確実に沸き起こるであろう霊性の巨大な波とともに、再び目覚めるための前提条件であるに違いありません。私たちは、この霊性を担い、伝播させる人々の間にいなければならないのであり、その意味において、この霊性の法則にのみ従うことこそが私の目指すところなのです。
　もしこのことが、私たちの施設の存続とともに達成できるのであれば、それに越したことはありません。しかし、もしそれが叶わないのであれば、私たちは解決策を見出すために変化する勇気を持たねばなりません。なぜなら、霊性の発展というものは、これまで通りに継続しようとする絶望的な執着によって、過度に圧迫されてはならないからです」（1940年9月4日）

　ヴェークマンは、今なお存在していた自らの医療活動のすべての拠点――アルレスハイム・クリニック、ゾネンホフ、その他すべて――を、根本的な意味で霊的世界の前に投げ出しました。彼女にとって、これら歴史的な施設というものは、起きたことのすべてを経験した後においては、それらが「何よりも本質的な精神性（霊性）」の器官であり続ける場合にのみ、存在する意味を持っていたのです。その数か月前、彼女はアスコーナへの出発後にアルレスハイム・クリニックの施設長を務めていたマドレーヌ・ヴァン・デフェンターに対し、これと同様の趣旨の言葉を書き残しています。

「物事がこの先どのように進んでいくかは、ひとえに私たちのスタッフの心のあり方にかかっています。私の言わんとすることを説明させてください。シュタイナー博士は私に何度も、『人智学協会を解散することを考えている』とおっしゃいました。私が理由を尋ねると（当時の私には理解できなかったからです）、博士はこう答えられました。
『人々は人智学のためにドルナッハに来ているのではない。そんなものは単なる素敵なオマケにすぎないのだ。彼らは、お互いに出会い、素敵な休暇を過ごすために来ているのだよ。ここに来ること、ここに滞在すること自体が目的化してしまっているのだ』
　私はしばしば、この言葉や他の多くの事柄について考え込まざるを得ません！ クリニック（アルレスハイム）に対する比喩もこれと同じです。人々は、このクリニックを、シュタイナー博士と私の創造物として、そして博士と私の進行中の活動がこれからも流れ込み続ける場所として維持したいと願っているのでしょうか。あるいは、単にそこに存在しているものにしがみつくのが心地よくて都合が良いから、またそこで育まれた人間関係のために、維持したいだけなのでしょうか。
　もし、前者の想いがすべての根底に生きているならば、クリニックに不都合なことなど何ひとつ起こるはずがありません。人々が人智学をもっと愛していたなら、アントロポゾフィー協会に何事も起きなかったはずであるのと同じように。
　（……）本来そうあるべきものは残り続けるでしょう。そして、シュタイナー博士がこの活動の継続を望まれるならば、必ず解決策は見つかるはずなのです」（1940年7月26日）

　彼女は当時の日々の中に自らの遺言を書き残しています。その中には次のような一節が見られます。

「可能であるならば、臨床治療研究所（アルレスハイム・クリニック）とその支所、およびそこで行われている活動が、私の死後も存続していくことが私の遺志であり遺言です。しかしながら、それはその基礎となっているルドルフ・シュタイナーの思想が忠実に遵守される場合に限って継続されるべきです」

　アスコーナでの最晩年の数年間、イタ・ヴェークマンは、かつて最も早くに彼女の傍らで働き始めた人智医学の医師とともに活動を共にしていました。それは、ヒルマ・ヴァルター博士です。ヴェークマンは、1920年4月に開催された最初の医師向け講義コースの際、当時26歳だった若いヒルマ・ヴァルターに対し、ルドルフ・シュタイナーのすぐ近くに創設する予定の未来の病院で一緒に働かないかと声をかけていたのです。

「（バーゼルにあるシャイデッガーのホメオパシー病院へ向かう）道中、道路を横断しているときに、私はたまたまヴェークマン博士とシュタイナー博士の隣を歩くことになりました。するとヴェークマン博士が私の腕

を取り、ゲーテアヌムの近くに小さな私立病院を構えるための適切な建物を探しているのだと話し、私に同僚として一緒に働く意志があるかどうかを尋ねてくださったのです。私は喜んで同意しました――それ以上に望むことなど、私には何もありませんでしたから！」

道路を横断するなかで、ヴェークマンとシュタイナーの隣を歩むようになったこと――こここそが、ヒルマ・ヴァルターがその生涯を通じて誠実にとどまり続けた場所でした。ルドルフ・シュタイナーからもイタ・ヴェークマンからも、精神的に成熟し、計り知れないほど信頼のおける献身的な人物として、同時に極めて才能豊かな医師として等しく高く評価されていたヴァルターは、クリニックの開院後、1921年6月8日からイタ・ヴェークマンの傍らで働き始めました。

彼女はシュタイナー博士の回診に同行し、ゲーテアヌムが炎上した夜にはヴェークマンの傍らに寄り添い、シュタイナー博士の最後の闘病期間にはアトリエのホワイエで寝泊まりをしました。ヴァルターは一時期イギリスでも働いていましたが、1934年の春、イタ・ヴェークマンが命に関わる重病に倒れた際には、彼女を看病するために急いでアルレスハイムの我が家へと駆け戻ったのです。

そして、イタ・ヴェークマンもまた、ヒルマ・ヴァルターに深く心を寄せていました。彼女は同僚の傷つきやすい肉体と魂を脅かす危険を常に自覚しており、慎重かつ細やかな方法で彼女をケアしていました。ヴェークマンがヴァルターに宛てて書いた最初期の手紙の中に、次のような言葉が見られます。

「どうか、あまり謙遜しすぎたり、不安がったりしないでください、親愛なる、善き魂よ」

後年、イタ・ヴェークマンは他のどの同僚よりも、ヒルマ・ヴァルターに対して多くの手紙を書くことになります。彼女がいかにヴァルターをよく知っており、高く評価し、そして――ほとんど治療的とも言えるほどの――配慮を彼女に提供していたかは、1929年9月16日にヴェークマンがゾネンホフの医師ジュリア・ボルトに宛てて書いた手紙の短い一節によく示されています。ヴェークマンは、ヒルマ・ヴァルターがアルレスハイム・クリニックにおいて、もはや幸福を感じていないことに気づき、彼女にゾネンホフで独立して働いてほしいと考えました。ボルトからの反発を予想し、先んじるかのように彼女はこう書き記しています。

「さて、あなたが他の事柄に専念できるようにするため、また、治療医学的な側面を強化し、そこに方向性と調和を与えるために、どのようにして医学の分野でゾネンホフを助けることができるか、ずっと深く考えていました。いま、まさにそのためにうってつけの人物がいます。シュタイナー博士から授かったもののすべてが、その内において今なお生きている人物です。それがヴァルター博士です。
ただ、彼女は肉体的に強くないため、極めて過敏であり、自らの魂が何かに傷つけられたと感じるや否や、すぐに内へと引きこもってしまうのです。そうすることで彼女は人々を遠ざけ、私たちの活動から距離を置いてしまい、結果として貴重な何かが失われてしまうことになるのです」

ヒルマ・ヴァルターがイギリスへ渡ったときも、ヴェークマンは彼女と緊密な連絡を保ち続け、思いやり、支え、励まし、そして世話を焼き続けました。もしヴェークマンからヒルマ・ヴァルターへの手紙「だけ」がこの世に残されたとしても、それらはイタ・ヴェークマンがひとつの療法家として、また医師として、いかに深くキリスト教的衝動（愛の精神）に満たされていたかということを、十分に雄弁に物語る印象を与えることでしょう。

最終的にイギリスでの活動を継続できなくなり、多くの病苦を経たヒルマ・ヴァルターが事実上の解雇通知を受け取ったとき、ヴェークマンは遅滞なく彼女に手紙を書きました。彼女はそのなかで初めてヴァルターに対し、「ルドルフ・シュタイナーがこのクリニックとともにあなたと私に授けてくださったものを、どうにかして評価し、書き残さなければならない」という必要性を口にし、また「いかにその責任が私たち二人の肩にかかっているか」を伝えたのです。そしてイタ・ヴェークマンは、この課題に取り組むためにアルレスハイムへ戻ってくるよう、この上ない親愛の情を込めてヒルマ・ヴァルターを招待しました。2か月間の熟考の末、ヴァルターが最終的に同意したとき、彼女はこう書き送りました。

「あなたが来てくださるのを、本当に心から楽しみにしています。そうして私たちは、真の意味でともに働くことができるのです」

（ギリシャからヒルマ・ヴァルターへのイタ・ヴェークマンの絵はがき（1932年））

「親愛なる ヴァルター博士へ
心からの温かい挨拶を送ります。アスクレピオスの娘であるハイギエイア（衛生の女神）はあなたにとてもよく似ています。だから私は彼女の絵はがきをあなたに送るのです。アスクレピオスの神秘（神殿跡）の地はエピダウロスです。私たちはそこへ赴き、多くの興味深いものを見出しました。お風呂の設備などを備えた治療棟のほかに、そこには大きな劇場もありました。
あなたが元気で過ごされていることを願っています。
心からの親愛を込めて
Ｉ・ヴェークマン」

翌年、この企ての行く手には多くの障害や病気が立ちはだかりましたが、それにもかかわらず、ヴェークマンとヴァルターは、かつてルドルフ・シュタイナーとともに治療にあたった患者たちの病歴の改訂作業に着手しました。そうすることで、イタ・ヴェークマンはその生涯のまさに最後において、最も限られた空間の中で、しかし極めて実効的な小規模な次元で、再び「医療共同体の形成を実践したのです。

私たちは、ヴァルターの後の著書群のベースとなったこの共同体の存在を忘れてはなりません。そして、ヒルマ・ヴァルターという人物を決して忘れてはならないのです。この寡黙で、引きこもりがちだった女性は、アルレスハイムのあの「木造の家」で、最後の瞬間までヴェークマン博士を世話し、彼女に付き添い続けました。明日、私たちは彼女の没後25周年の記念日を迎えます。彼女は、イタ・ヴェークマンが、おそらく最も深くエフェソスの神秘神殿跡の次元において結びついていた同僚医師でした。その秘儀伝授の地が持つ霊的な自然の英知は、人智医学と今なお不可分に結びついており、これからも結びつき続けるのです。

私は、ルドルフ・シュタイナーが1925年の2月22日、彼自身の死のわずか数週間前に、イタ・ヴェークマンの誕生日のために彼女に贈ったあの詩をもって、これら3回にわたる講義を締めくくりたいと思います。

1925年2月22日の誕生日に

謎に満ちた世界の上へとまばゆく輝き
霊の内に放射される エフェソスの光よ
世界の深淵より
神なる霊の統べるその場所から
それは輝き出る。

女神の像の上へと降り注ぎ
魂を携え運ぶ エフェソスの光よ
女神の魂の深淵へ
人間の本質の統べるその場所へと
それは降り立つ。

エフェソスの神秘の光のなかで
かつて私の心はまばゆく輝いていた
ミサ（Mysa）の霊の写し絵たる
世界を統べるアルテミスの像のために
それは温かく輝いていた。

時の彼方を振り返る
その友の眼差しは
神々の像の周りを織りなしている
思慮深く、優しきミサの霊を
いま再び 見出すのである。